甲府市文化財調査報告 18

史跡 武田氏館跡Ⅷ

― 第32次～第52次調査報告書 ―

2002

甲府市教育委員会

序

時代は21世紀を迎え、甲府市は山梨県の中心都市として大きな発展を遂げておりますと同時に、文化財や伝統文化を、まちづくりや地域振興に積極的に活用していく施策を展開しております。中でもとりわけ力を入れておりますのが、国史跡武田氏館跡の保存・整備事業でございます。

武田氏館は、永正16年（1519)、武田信虎が川田館から躑躅ヶ崎に館を移転したことから始まります。この時の「甲斐府中（首都)」が現在の甲府市の地名となり、今日まで政治・経済・文化の中心地として発展してまいりました。その拠点となった武田氏館に関する調査は、昭和55年度から史跡の現状変更に伴う発掘調査として、住宅建設などに際して数多く実施されております。

この成果として、昭和60年度・第14次調査から平成元年度・第31次調査までを『武田氏館跡Ⅶ』に報告させていただいております。

本書は、『武田氏館跡Ⅶ』（平成12年度）に引き続き、平成元年度・第32次調査から平成９年度・第52次調査までの発掘調査概要をまとめたものでございます。報告は、前回に続いて「所在地」「調査原因」「調査面積」「調査期間」「調査担当者」「遺構」「遺物」「まとめ」の８項目を設定し、読みやすい報告書になるよう工夫に努めております。

これらの成果は学術的に価値が高く、地域史研究に多大な貢献を果たすものと思っております。本報告書が学習教材また研究資料として、多くの方々に御活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたり御指導と御鞭撻をいただきました文化庁・山梨県教育委員会、及び地元関係者の皆様に心より御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きの御力添えをお願い申し上げます。

平成14年２月

甲府市教育委員会
教育長　金　丸　　晃

例　　言

1．本書は山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目地内に所在する国史跡武田氏館跡の現状変更に伴う発掘調査、及び古府中町土地区画整理事業に伴う試掘調査の報告書で、第32次調査（平成元年度）から第52次調査（平成９年度）までを収録している。なお、第42次（平成７年度）・第48次（平成8年度）・第52次（平成９年度）調査については、『史跡武田氏館跡Ⅳ』に報告済みである。

2．本書に収録した調査は、文化庁・県教育委員会の指導のもと、甲府市教育委員会が主体となって実施した。調査経費は国・県の補助金の交付を受けた。

3．調査は、信藤祐仁・鈴木俊雄・志村憲一・平塚洋一・伊藤正彦の各文化財主事及び、望月小枝（駒沢大学卒）・内藤かおり（信州大学卒）・鈴木由香（法政大学学生）の発掘調査員が担当した。

4．各調査に付した番号は、山梨県遺跡調査団・山梨県教育委員会・甲府市教育委員会が実施した武田氏館跡関係調査の通算次数を示す。

5．本書の執筆は、望月秀和（嘱託）・鈴木由香が分担し、文末に文責を記した。

6．本書の挿図は、望月秀和・鈴木由香及び、飯室久美恵・長田由美子・小林明美・関本芳子・林久美子・早川さやか・望月小枝が作成した。

7．本書の編集は、目黒　秀（文化芸術課長）を編集責任者とし、鈴木由香が行った。

8．出土した地鎮具の保存処理は、(財)帝京大学山梨文化財研究所に委託した。

9．本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。

10．発掘調査にあたり、土地所有者の御協力を賜った。また、報告書の作成にあたり、次の機関及び諸氏から御指導をいただいた。
明野村埋蔵文化財センター・(財)帝京大学山梨文化財研究所
小野正敏・笹本正治・佐野　隆・畑　大介・吉野裕子　（敬称略）

11．調査参加者
浅川本雪・浅川道恵・雨宮英郎・池谷富士子・岡　悦子・長田富夫・小沢菊太郎・加賀美さか江・金井いく代・茅嶋一男・岸本美苗・倉田勝子・小池孝男・小池信夫・小宮通子・三枝袈裟男・坂本しのぶ・佐田金子・清水公子・末木義光・武井美知子・内藤安雄・長坂　清・中田芳仁・根岸利昭・花曲敬子・平沢則子・深沢久子・福田　勉・望月利子・渡辺金重・渡辺　茂・渡辺孝博・渡辺百合子　（敬称略）

凡　　例

本書に掲載した遺構図・遺物実測図は以下のとおりである。

1．遺構・遺物番号は、各調査地区単位で通し番号とした。

2．遺構名は、各遺構の性格や形状に応じて名称を付したが、名称・番号は、将来、面的な調査等により全体の把握がなされた場合、変更が生じる可能性がある。よって、本書で付した遺構名・番号は暫定的なものとする。

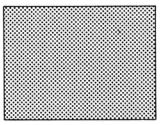
3．全体図・遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。

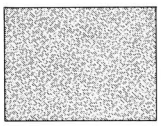
4．挿図中のＥ・Ｗ・Ｓ・Ｎは、東・西・南・北を表す。

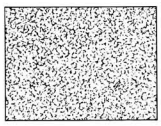
5．調査区位置図には、甲府市都市計画図（１/2500）を使用した。

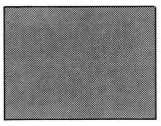
6．遺物観察表中の色調は「標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997 後期）に基づいて記載した。

7．実測図内のスクリーントーン指示は以下のとおりであるが、一部個々の図面上に表示したものがある。


石


溶融物


攪　乱


炭化物

セメント

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
調査区一覧表
調査区位置図

第１章　武田氏館跡周辺調査

1　第32次調査（古府中町3624-4）……1
2　第33次調査（古府中町1315～1329、1369～1378）……2
3　第34次調査（古府中町2746）……16
4　第35次調査（大手三丁目3684）……23
5　第36次調査（古府中町2617）……25
6　第37次調査（大手三丁目3675-14）……26
7　第38次調査（大手三丁目3680）……30
8　第39次調査（古府中町3547）……33
9　第40次調査（大手三丁目3685-3）……34
10　第41次調査（大手二丁目3688）……35
11　第43次調査（古府中町2727）……37
12　第44次調査（古府中町3567）……42
13　第45次調査（古府中町2614）……44
14　第46次調査（古府中町2614）……45
15　第47次調査（古府中町2619）……48
16　第49次調査（古府中町2744）……49
17　第50次調査（大手三丁目3675-5）……53
18　第51次調査（古府中町1507・1514-1・1515-1）……55

第２章　小　括……68

調査区一覧表

調査次数	所在地	調査原因	調査面積	調査期間	遺構	遺物	備考
第1次	古府中町2611	武田神社宝物殿新築工事	20.0m²	昭和47年5/10～15	なし	なし	『館跡Ⅰ』で報告済み
第2次	古府中町2611	武田神社社務所新築工事	216.0m²	昭和54年3/19～4/5	石列・水路石積・敷石水溜め遺構	かわらけ・青磁・陶器・銅銭	『館跡Ⅰ』で報告済み
第3次	屋形三丁目2548-1	中嶌家住宅新築工事	3.0m²	昭和54年9/26～10/12	石組水路	かわらけ・灰釉陶器	『館跡Ⅰ』で報告済み
第4次	屋形三丁目2559-1,-2	安藤家貸家新築工事	－	昭和54年9/26～10/16	石積	なし	『館跡Ⅰ』で報告済み
第5次	古府中町3626	幡野家住宅増築工事	6.6m²	昭和55年2/23～25	なし	なし	『館跡Ⅰ』で報告済み
第6次	屋形三丁目2585-2	広瀬家住宅改築工事	17.2m²	昭和56年2/26～3/8	暗渠・配石遺構	かわらけ・陶器	『館跡Ⅰ』で報告済み
第7次	屋形三丁目2529-1	奥石家住宅改築工事	30.0m²	昭和56年4/10～18	土塁・石積・墓坑	かわらけ・擂鉢・陶器・硯・青磁・鉄製品・黒曜石	土塁下部より人骨を発見『館跡Ⅰ』で報告済み
第8次	大手三丁目3711-2	山田家住宅改築工事	22.0m²	昭和56年5/14～28	なし	なし	『館跡Ⅰ』で報告済み
第9次	大手三丁目3742	小沢家車庫改築工事	7.0m²	昭和57年3/21～26	なし	なし	『館跡Ⅰ』で報告済み
第10次	屋形三丁目2571	アパート新築工事	110.0m²	昭和57年5/10～16,7/8～17	水路・石段状遺構・礎石と思われる平石	かわらけ・擂鉢・陶器・青磁・白磁・溶融物付着土器・漆器・銅銭・鉄器	『館跡Ⅰ』で報告済み
第11次	屋形三丁目2545-3	深沢家住宅改築工事	55.0m²	昭和57年6/20～30	水路・溝	かわらけ・擂鉢・陶器・漆器・鉄製品	『館跡Ⅰ』で報告済み
第12次	大手三丁目3696	梅沢家住宅新築工事	48.6m²	昭和57年7/20～30	なし	かわらけ・擂鉢・陶器・銅銭・縄文土器・石器	『館跡Ⅰ』で報告済み
第13次	屋形三丁目2563-1	長谷部家住宅改築工事	26.0m²	昭和58年1/16～2/8	土塁下に礎石を検出	かわらけ・陶器・磁器・白磁	『館跡Ⅰ』で報告済み
第14次	大手三丁目3687-2	市川家住宅改築工事	24.0m²	昭和60年4/15～23	なし	なし	『館跡Ⅶ』で報告済み
第15次	大手三丁目3685-4	山本家住宅改築工事	76.0m²	昭和61年8/5～25	なし	かわらけ・国産陶器・青磁盤	『館跡Ⅶ』で報告済み
第16次	古府中町3543,3544	数野家住宅改築工事	39.0m²	昭和61年8/25～9/5	礎石	かわらけ・織部破片・中国製磁器・鉄滓	『館跡Ⅶ』で報告済み
第17次	岩窪町253-3	武田氏館跡範囲確認調査	100.0m²	昭和61年9/10～27	なし	かわらけ・陶器	『館跡Ⅶ』で報告済み
第18次	古府中町2763-1,-2	武田氏館跡範囲確認調査	250.0m²	昭和62年1/14～2/10	水路・石列状遺構	かわらけ・国産陶器・青磁盤	御隠居曲輪『館跡Ⅶ』で報告済み
第19次	古府中町1311	古府中町土地区画整理事業	18.0m²	昭和62年2/13～3/7	柱穴群・溝	平安時代甕・かわらけ・瀬戸美濃系陶器・鎌・銅銭	『館跡Ⅶ』で報告済み
第20次	岩窪町267-2,3	武田氏館跡範囲確認調査	60.0m²	昭和62年11/16～12/8	なし	縄文土器・黒曜石	『館跡Ⅶ』で報告済み
第21次	岩窪町188-1	武田氏館跡範囲確認調査	41.5m²	昭和62年12/8～昭和63年1/20	井戸・溝・帯状集石遺構	かわらけ・陶器・白磁・甲斐型土器・須恵器・焼成粘土塊	『館跡Ⅶ』で報告済み
第22次	下積翠寺町1435-1	古府中町土地区画整理事業	30.0m²	昭和63年1/27～2/6	なし	縄文土器・かわらけ	『館跡Ⅶ』で報告済み
第23次	大手一丁目4404	武田氏館跡範囲確認調査	68.0m²	昭和62年12/8～昭和63年1/20	井戸	かわらけ・擂鉢・陶器・フイゴ羽口・鉱滓・縄文土器・平安時代土器・砥石　ほか	『館跡Ⅶ』で報告済み
第24次	古府中町3168	古府中町土地区画整理事業	12.0m²	昭和63年2/7～17	溝	かわらけ	『館跡Ⅶ』で報告済み
第25次	古府中町2617	保坂家住宅改築工事	6.0m²	昭和63年5/9・7/12	なし	なし	『館跡Ⅶ』で報告済み
第26次	大手三丁目3724-4	アパート新築工事	22.0m²	昭和63年12/21～平成元年1/11	なし	なし	『館跡Ⅶ』で報告済み
第27次	屋形三丁目2501-1	武田氏館跡範囲確認調査	26.0m²	平成元年2/22～3/20	井戸・土坑・柱穴	かわらけ・内耳土器・擂鉢・陶器・白磁・銅銭・鉄砲玉	『館跡Ⅶ』で報告済み
第28次	屋形二丁目2403-1	武田氏館跡範囲確認調査	43.0m²	平成2年3/1～31	石列・溝	かわらけ・内耳土器・陶器・溶融物付着土器・フイゴ羽口など	『館跡Ⅶ』で報告済み
第29次	屋形三丁目1600-4	武田氏館跡範囲確認調査	40.0m²	平成元年3/1～31	なし	かわらけ・土製品・陶器・中国製磁器・銅銭	『館跡Ⅶ』で報告済み
第30次	大手三丁目3691-2	カーポート・アパートの新築工事	22.0m²	平成元年8/28～10/5	なし	縄文土器・古墳時代土器・かわらけ	『館跡Ⅶ』で報告済み
第31次	屋形三丁目2542-1,2543-1	石垣積み直し工事	38.0m²	平成元年6/12～8/31	馬の墓・土坑・堀	かわらけ・内耳土器・擂鉢・陶器・白磁・漆器ほか	ほぼ完全な馬の骨が出土『館跡Ⅶ』で報告済み
第32次	古府中町3624-4	遺構確認調査	4.0m²	平成元年7/19・24・25,8/17・31	なし	なし	本書で報告
第33次	古府中町1315・他	古府中町土地区画整理事業	5000.0m²	平成2年2/26～11/13	土坑・掘立建物・井戸・礎石・集石土坑・溝	かわらけ・擂鉢・陶器・磁器・鉄製品・古銭　等	本書で報告
第34次	古府中町2746	渡辺家住宅改築工事	91.0m²	平成4年5/11～6/4	溝・土坑・地鎮遺構・近代建物跡	かわらけ・擂鉢・陶器・磁器・灯明皿・水晶・古銭	本書で報告
第35次	大手三丁目3684	水口家住宅新築工事	70.0m²	平成4年6/23～7/8	ピット	かわらけ・土鍋	本書で報告
第36次	古府中町2617	古府中町土地区画整理事業	5.0m²	平成4年9/2～3	なし	なし	本書で報告
第37次	大手三丁目3675-14	菊島家住宅新築工事	42.0m²	平成4年9/21～10/23	土坑・ピット	かわらけ・耳皿・擂鉢・甕・陶器・磁器・釘・硯	本書で報告
第38次	大手三丁目3680	小宮山家住宅新築工事	66.0m²	平成5年5/19～6/17	土坑・近代暗渠	かわらけ・土鍋・鉢・甕・陶器・天目茶碗	本書で報告
第39次	古府中町3547	保坂家住宅増築工事	3.0m²	平成6年7/12	なし	なし	本書で報告
第40次	大手三丁目3685-3	山本家住宅増築工事	13.5m²	平成7年12/5～8	なし	なし	本書で報告
第41次	大手三丁目3688	神宮寺家住宅新築工事	42.0m²	平成7年12/5～8	なし	なし	本書で報告
第42次	古府中町2570	笹堀凌渫	162.0m²	平成7年12/6～平成8年3/28	土塁・石積	常滑	『館跡Ⅳ』で報告済
第43次	古府中町2727	渡辺家駐車場・志村家住宅新築工事	48.0m²	平成7年12/11～21	溝	かわらけ・手づくね土器・陶器・白磁・土馬・煙管	本書で報告
第44次	古府中町3567	長田家住宅改築工事	16.0m²	平成8年4/4～15	ピット・溝	かわらけ・擂鉢・陶器・古銭	本書で報告
第45次	古府中町2614	武田神社トイレ改築工事	1.9m²	平成8年9/26・27	なし	かわらけ（図化遺物なし）	本書で報告
第46次	古府中町2614	武田神社トイレ改築工事	35.0m²	平成8年10/7～16	集石	かわらけ・陶器・甕	本書で報告
第47次	古府中町2619	保坂家住宅改築工事	18.0m²	平成8年9/2	石積・杭	なし	本書で報告
第48次	古府中町2570	笹堀凌渫	130.0m²	平成8年12/8～平成9年3/24	石積	なし	『館跡Ⅳ』で報告済
第49次	古府中町2744	谷川家住宅改築工事	62.0m²	平成9年6/12～23	井戸・土坑・溝・ピット	かわらけ・土器・陶器・磁器・碁石・緑釉陶器・汽車土瓶　他	本書で報告
第50次	大手三丁目3675-5	日原家住宅増築工事	23.5m²	平成9年9/1～3	なし	かわらけ（図化遺物なし）	本書で報告
第51次	古府中町1507,1514-1,1515-1	武田神社駐車場造成工事	169.5m²	平成9年11/6～12/9	ピット・溝・石列・井戸・土坑	かわらけ・擂鉢・陶器・染付・古銭	本書で報告
第52次	古府中町2570	笹堀凌渫	150.0m²	平成10年1/26～3/30	石積	かわらけ・常滑・青磁・染付・木製品・石製品・古銭	『館跡Ⅳ』で報告済

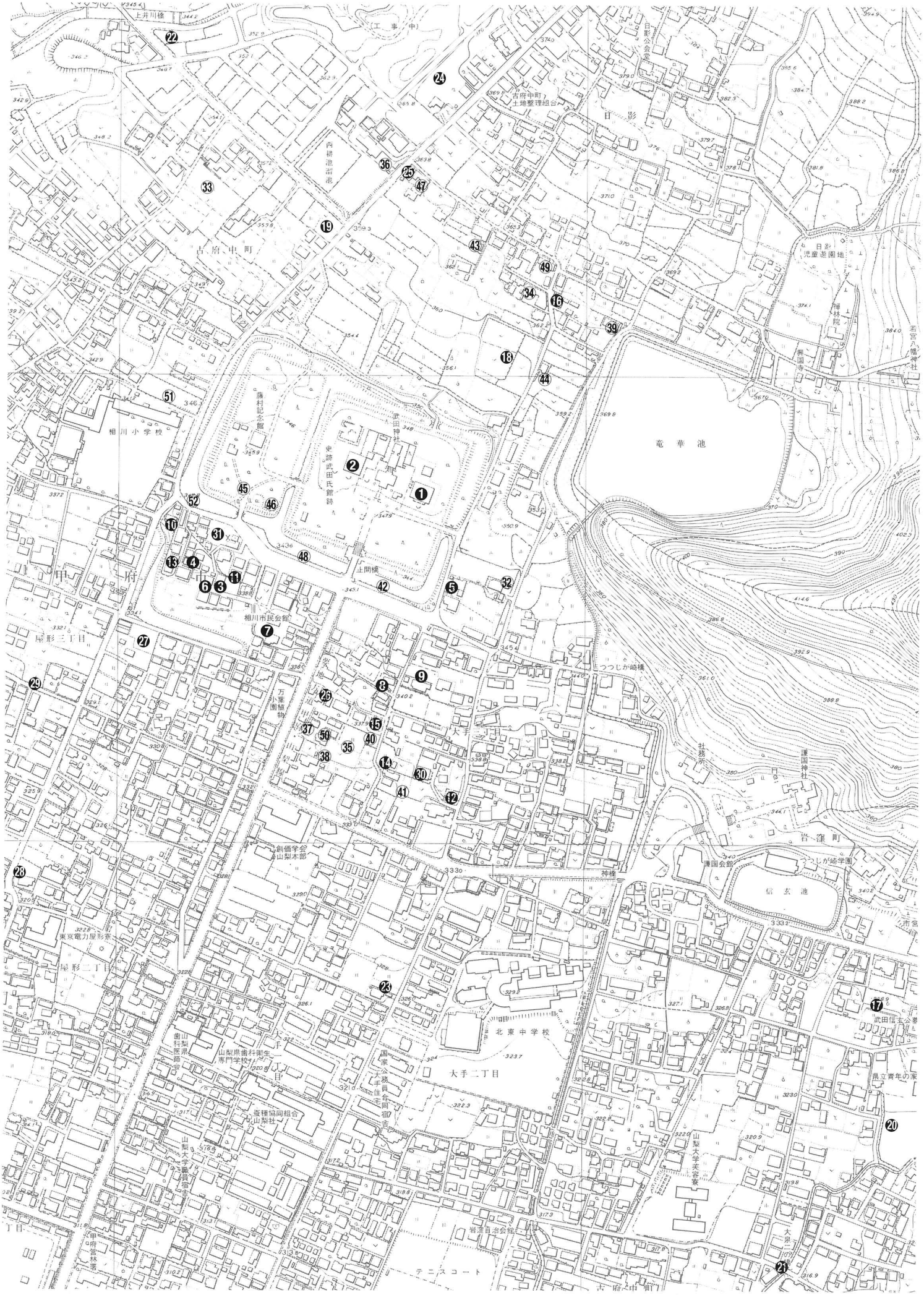
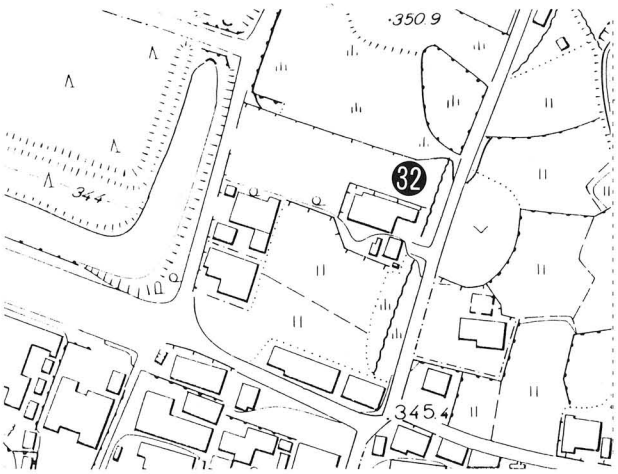


図1 調査区位置図

0 200m

武田氏館跡第32次調査



所　在　地　古府中町3624-4
調査原因　遺構確認調査
調査面積　4 m²
調査期間　平成元年7月19・24・25日、
　　8月17・31日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の東に位置し、大手馬出の南に隣接する。標高約350mを測る。本地点は武田氏館跡の史跡整備に伴い、公有地化して更地となった場所である。周辺には、資料的な裏づけを欠くものの、武田氏時代に牢屋が存在したことを伝える近世の絵図が数種類知られ、東接する南北基幹街路の一つである古籠屋小路（ふるろうやこうじ）の名称はこれに由来するものと考えられる。

調査の直接原因は、本地点の一部に陥没が生じている旨、周辺住民より通報を受けたことである。地下式坑が存在した可能性が指摘されたため、埋蔵文化財確認調査を実施した。本地点は武田氏館跡大手馬出の隣接地であり、武田氏館跡に関する遺構・遺物の検出も期待された。周辺では館跡内の調査の他、本地点南で第5次調査、また大手馬出の調査（平成12年度）も行われている。

調査は土地陥没部約4 m²を、人力により掘り下げて遺構確認を行った。

遺構・遺物

武田氏時代の井戸や屋敷に関する遺構、地下式坑等の検出が期待されたが、調査の結果、近代の井戸が確認され、遺物は出土しなかった。

ま　と　め

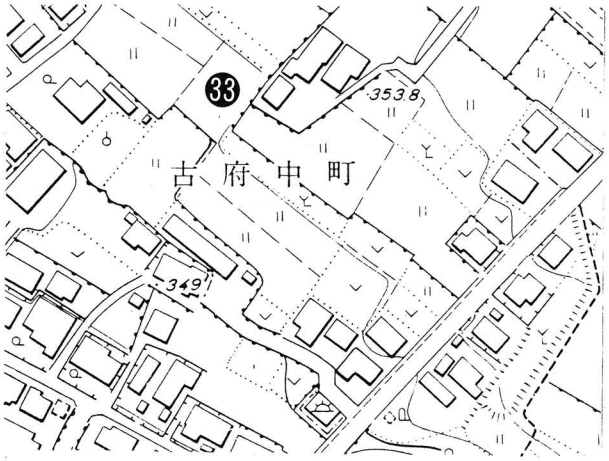
土地の陥没の原因は近代の井戸によるものであり、期待された館跡に関する遺構や、伝承・由来等に関する遺構・遺物は検出されなかった。しかし、調査範囲は陥没部分のみに止まるため、今後の調査において同地点またはその周辺より遺構・遺物検出の可能性がある。

（望月秀和）

写真1　井戸検出状況

写真2　調査区全景

武田氏館跡第33次調査



所　在　地　甲府市古府中町1315～1329、1369～1378
調査原因　古府中町土地区画整理事業
調査面積　5000㎡
調査期間　平成２年２月26日～11月13日
調査担当者　信藤祐仁・鈴木俊雄

調査の概要

調査地点は武田氏館跡味噌曲輪の西側に位置し、標高約350ｍを測る。東側約100ｍには、戦国期に設定された「もがり（虎落）小路」に接して第19次調査地点が位置している。

本地点は「貞享三丙寅年御直図」（武田神社蔵）によると、土屋右衛門尉昌次または小山田大学の屋敷跡にあたる場所で、「土屋敷」の小字を現在にも残している。また、周辺には「逍軒屋敷」の小字を残す武田逍遙軒信綱の屋敷跡伝承地や、「天久」「長閑」「小山田」の小字を残す武田典厩信繁、長坂長閑斎、小山田大学の屋敷跡伝承地が存在し、当地域一帯が武田氏家臣屋敷であったことが窺える。

調査は62か所の試掘坑を設定し（図１）、遺構や遺物が確認されたＡ～Ｋの６区について、試掘調査から本調査へと移行した。なお、調査は田畑の境界を壊せないという制約下にあり、本稿では試掘調査報告と一部本調査の概要に留め、本報告は別の機会に譲る。

遺　　構

・Ａ区　溝４条、土坑５基、井戸１基、ピット97基が検出された。

溝　　１号溝は最大幅78cm、深さ20cmを測り、調査区西側寄りで大きく湾曲する。２号溝は最大幅１ｍ、深さ14cmを測り、調査区西側で大きくクランクする。２号土坑・１号井戸に切られる。３号溝は最大幅35cm、深さ19cmを測る。２号溝と３・４号土坑に切られる。４号溝は最大幅44cm、深さ18cmを測り、６号土坑に切られる。

土　坑　　１号土坑は直径１ｍ、深さ41cmを測り、平面形態は円形を呈する。２号土坑は直径１ｍ、深さ27cmを測り、平面形態は円形を呈する。底部には平坦面を有する石が置かれていた。２号溝がクランクする部分でこれを切る。３号土坑は長径約74cm、深さ56cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。３号溝を切る。４号土坑は直径１ｍ30cm、深さ40cmを測り、平面形態は円形を呈する。３号溝を切る。５号土坑は長径92cm、深さ11cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。

井　戸　　１号井戸は直径90cm、深さは確認できた部分で３ｍ20cmを測る。石積の井戸で、２号溝を切る。

ピット　　直径20～78cm、深さ9～43cmを測る。調査区北東隅に、１ｍ80cm間隔の規則性を持つピット列が確認された。

・Ｂ区　溝２条、ピット35基が検出された。

溝　　１号溝は最大幅１ｍ、深さ23cmを測り、東西に走る。２号溝は最大幅20cm、深さ29cmを測る。南北に走り、南側は調査区外に延長する。

ピット　　直径18～60cm、深さ9.5～53cmを測る。規則性を持つ列構成は見られない。

・Ｅ区　溝９条、土坑７基、ピット144基、礎石10点が検出された。

溝　　１号溝は最大幅50cm、深さ７cmを測る。東西に走り、調査区東端で北側にクランクする。２号溝は東西に走り、最大幅88cm、深さ24cmを測る。４号溝を切る。３号溝は最大幅79cm、深さ16cmを測る。４号溝は最大幅64cm、深さ15cmを測る。２・３号溝に切られ、礎石２点が確認された。５号溝は最大幅84cm、深さ26cmを測る。延長方向を確認するには至らなかった。６号溝は最大幅１ｍ52cmを測る。７号溝と接する所で延長方向が不明瞭となる。７号溝は最大幅38cmを測る。途中を２・３号溝に切られ、西側に向かってクランクする。８号溝は最大幅38cmを測る。東西から途中で南側に向かってクランクする。９号溝は最大幅40cmを測る。東西に走り、調査区外に延長する。

土　坑　　１号土坑は直径約１ｍ44cmを測り、平面形態は円形を呈する。炭化した米と小麦が出土した。２号土坑は直径１ｍ68cmを測り、平面形態は円形を呈する。３号土坑は調査区外に続き、確認された部分で直径１ｍ42cmを測る。平面形態は円形を呈するものと思われる。４号土坑は長径１ｍ、深さ40cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。３号溝を切る。５号土坑は調査区外に続き、確認された部分で１ｍ20cm、深さ31cmを測る。６号土坑は長径１ｍ52cm、短径80cm、深さ７cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。直径10～20cm程度の石がまばらに入る。７号土坑は長径86cm、短径62cm、深さ26cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。直径10～20cm程度の石が密に埋まっていた。

ピット　　直径20～60cm、深さ10～54cmを測る。東西方向の溝に平行するピット列が一部に見られるが、全容は不明である。調査区最東端で５号溝と重複するピットには、かわらけが伏せた状態で置かれていた。

・Ｆ区　溝13条、土坑５基、井戸１基、ピット43基が検出された。また、調査区東側では２～３cmの川原石が敷き詰められている状況が確認された。

溝　　１号溝は最大幅26cm、深さ21cmを測る。２号溝は最大幅１ｍ34cm、深さ23cmを測る。調査区北寄りで東西方向に大きく湾曲して走り、調査区外に延長する。３号溝は最大幅14cm、深さ５cmを測る。４号溝は最大幅70cm、深さ８cmを測る。調査区中央部を東から南に向かって湾曲して走り、複雑に入り組む。南側は調査区外に延長されるが、東側の延長方向は確認できなかった。５号溝は最大幅43cm、深さ11cmを測る。４・６号溝と接し、２か所でクランク状を呈する。６号溝は最大幅48cm、深さ８cmを測る。途中を９号溝に切られる。７号溝は最大幅25cm、深さ７cmを測る。８号溝は最大幅40cm、深さ８cmを測る。南側は調査区外に延長するが、東側の延長方向は確認できなかった。９号溝は最大幅１ｍ40cm、深さ20cmを測る。調査区南端で10号溝と交わり延長する。６号溝を切り、12号溝に切られる。一部に石列を残す。10号溝は最大幅１ｍ90cm、深さ44cmを

測る。調査区南端で９号溝と交わり延長し、石列を残す。11号溝は最大幅52cm、深さ14cmを測る。12号溝に切られる。一部に石列を残し、調査区外に延長する。12号溝は最大幅42cm、深さ26cmを測る。９・11号溝を切る。

井　戸　　調査区最南端で確認された。直径３ｍ64cm、深さは確認できた部分で４ｍ50cmを測る。石積の井戸である。

土　坑　　１号土坑は長径１ｍ、深さ13cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。２号土坑は直径70cm、深さ74cmを測り、平面形態は円形を呈する。３号土坑は直径80cm、深さ63cmを測り、平面形態は円形を呈する。４号土坑は長径２ｍ10cm、短径１ｍ22cm、深さ18cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。５号土坑は長径２ｍ、短径１ｍ58cm、深さ９cmを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。直径40～50cm程度の石が敷かれた状況で確認された。

ピット　　直径25～85cm、深さ19～69cmを測る。調査区中央部で東西、南北方向に一定の規則性が見られるピット列が検出された。

・Ｈ区　溝１条、ピット31基が検出された。

溝　　１号溝は最大幅70cm、深さ25cmを測る。一部に石を残し、西側は調査区外に延長する。

ピット　　直径25～50cm、深さ10～69cmを測る。調査区北側で、ほぼ１ｍ80cm間隔の規則性を持つピット列が検出された。

・Ｉ区　土坑１基、ピット39基、堀跡が検出された。

土　坑　　１号土坑は長径２ｍ35cm、深さ15cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。底部の一角に石が充塡されていた。

ピット　　直径20～85cm、深さ３～52cmを測る。調査区の中央部に東西約５ｍ60cm、南北約２ｍ90cm間隔の規則性をもつ列構成が確認された。

堀　跡　　調査区南側で検出され、最大幅５ｍ30cmを測る。屋敷を画する堀と考えられ、調査区外に延長する。完形のかわらけが出土した（図６－13）。

・Ｊ区　溝８条、河川跡、井戸１基、ピット93基が検出された。

溝　　１号溝は最大幅78cm、深さ27cmを測る。２号溝は最大幅94cm、深さ８cmを測る。３号溝は最大幅60cm、深さ14cmを測る。東側で１号井戸に切られる。４号溝は最大幅１ｍ40cm、深さ32cmを測る。５・６号溝を切り、８号溝に切られる。５号溝は最大幅82cm、深さ10cmを測る。４号溝に切られる。６号溝は最大幅70cm、深さ８cmを測る。途中を４号溝に切られる。７号溝は最大幅40cm、深さ７cmを測る。１号井戸に切られる。８号溝は最大幅２ｍ、深さ５cmを測る。４号溝を切り、１号井戸に切られる。

河川跡　　最大幅７ｍ60cm、深さ46cmを測り、Ｋ区に延長する。平安時代の土師器片が数点出土していることから平安期に存在した小河川の跡と思われ、廃絶後に屋敷が建てられている。

井　戸　　１号井戸は直径１ｍ68cm、深さは確認できた部分で７ｍ50cmを測る。調査区中央部で７・８号溝を切る。完形のかわらけが出土した（図６－14）。

ピット　　直径20～80cm、深さ18～65cm程度を測る。規則性をもつ列構成は見られない。

・Ｋ区　溝２条、土坑１基、河川跡、井戸２基、ピット14基が検出された。

溝　　１号溝は最大幅50cm、深さ９cmを測る。２号溝と直交し、南側は調査区外に延長する。２号溝は最大幅68cm、深さ14cmを測る。

土　坑　　１号土坑は長径１ｍ28cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。

河川跡　　Ｊ区から延長される河川跡である。最大幅６ｍ90cmを測る。

井　戸　　１号井戸は直径１ｍ、深さ１ｍ85cmを測る。２号井戸は直径２ｍ、深さ１ｍ92cmを測る。両者とも素掘りの井戸である。

ピット　　直径20～50cm、深さ18～65cmを測る。規則性をもつ列構成は見られない。

遺　　物

出土遺物の多くは中世のかわらけである（１～15）。いずれもロクロ成形のもので、底部には回転糸切痕を残す。明の染付（16世紀）も出土している（19～23）。底部に所有者を示すためにつけられた線刻が見られるものもある（21・22）。その他では碁石（24）、金属製品では釘（25）、刀子（26）が出土している。27は常滑の甕で、地面に埋置されていた。この他に国産陶器では瀬戸美濃・常滑、輸入陶磁器では青磁・白磁片が出土したが、小片のため図化しなかった。

ま　と　め

本地点は土屋右衛門尉昌次あるいは小山田大学の屋敷跡伝承地であり、調査の成果から、本地点が武田氏の家臣屋敷である可能性が高いことが分かった。Ａ・Ｅ・Ｆ・Ｈ区では一定の規則性が見られるピット列が確認された。Ｉ区では、調査区中央部に建物跡と思われる四方に規則性を持つピット列や、屋敷を画すると考えられる堀跡がセットで確認された。Ｊ・Ｋ区で検出された河川跡は平安期のもので、屋敷は河川が埋まった後に造成されたものである。全体的に遺構が複雑に入り組み、屋敷地内で数回に渡って建物の建て替えなどが行われていたと推測される。井戸は石積のものと素掘りのものがあるが、Ｊ区の井戸は石積で漏斗状を呈する。

自然地形を利用した屋敷造営が特徴的で、東側に掘を設けて屋敷境とし、西側は自然地形の傾斜が強まるラインまでを屋敷地としている。Ｈ区とＪ区の間の段差は、屋敷境であったと考えられる。

この他、明染付・青磁・白磁などの中国製磁器の出土も家臣屋敷の存在を裏づける一つの指標となろう。　　（鈴木由香）

図1　調査区位置図

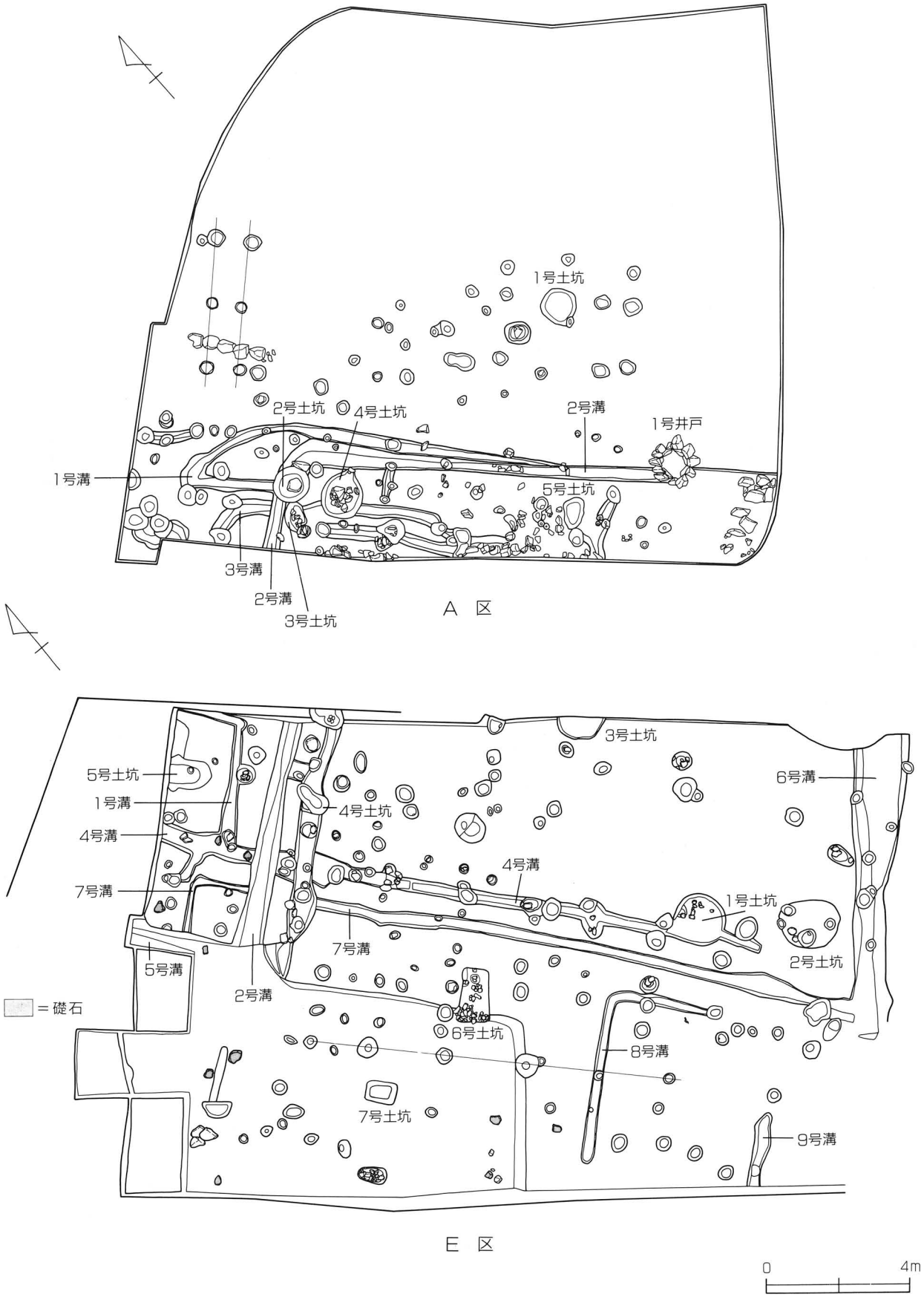

1号土坑
2号土坑
4号土坑
2号溝
1号井戸
1号溝
5号土坑
3号溝
2号溝
3号土坑
A 区
3号土坑
5号土坑
6号溝
1号溝
4号土坑
4号溝
4号溝
7号溝
1号土坑
7号溝
2号土坑
5号溝
2号溝
= 礎石
6号土坑
8号溝
7号土坑
9号溝
E 区
0
4m

図2　A・E 区遺構平面図

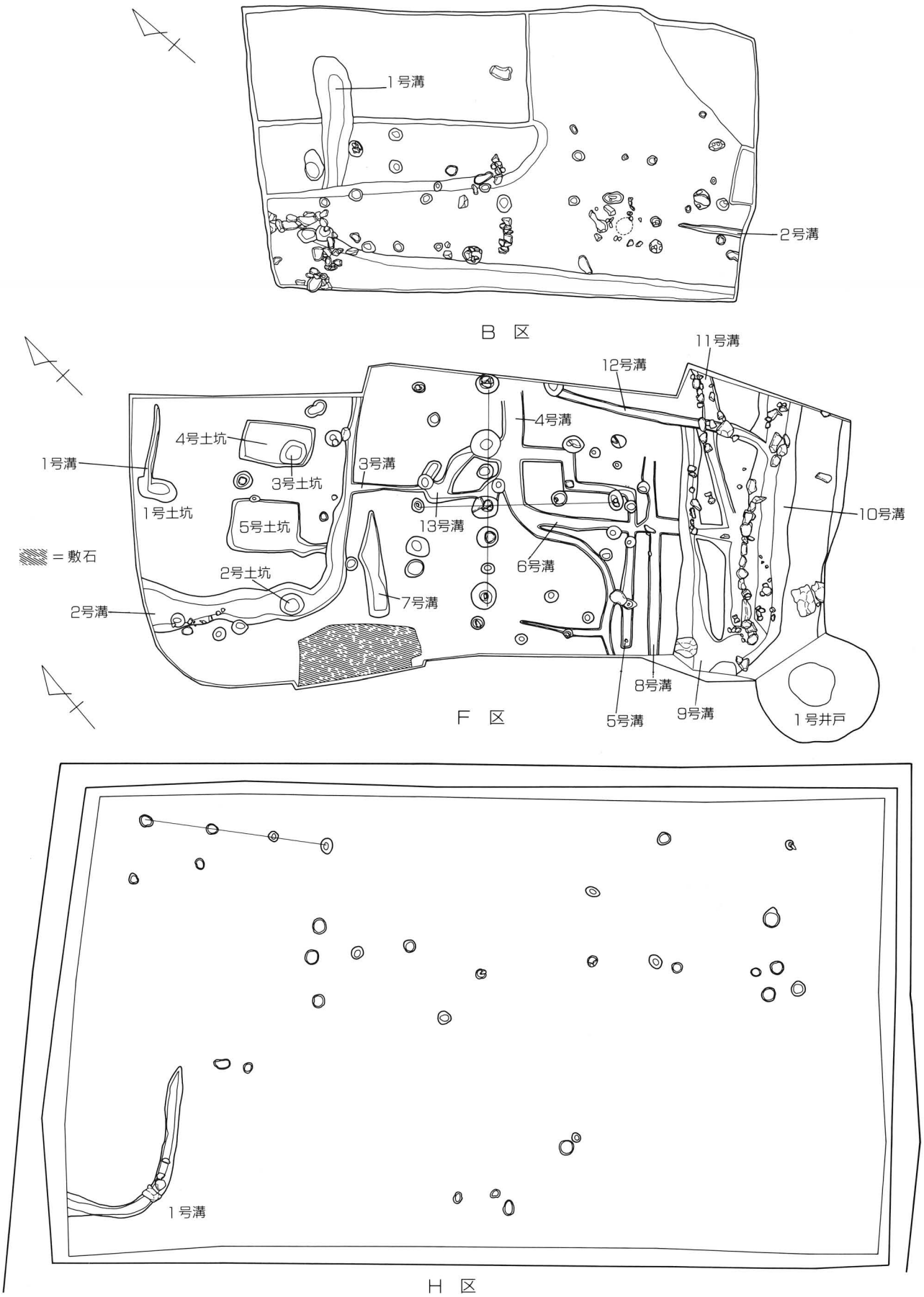


図3　B・F・H区遺構平面図

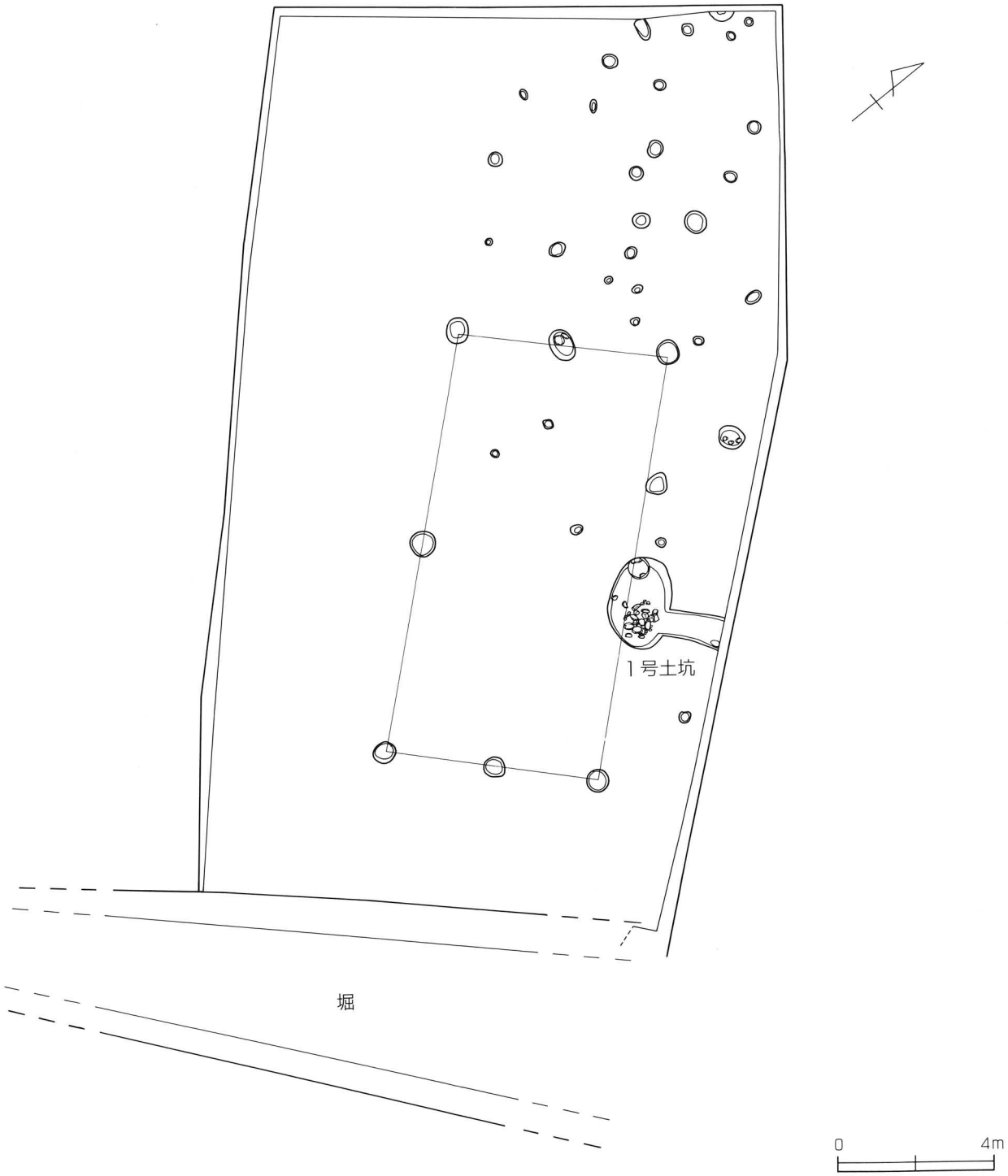


図4　Ⅰ区遺構平面図

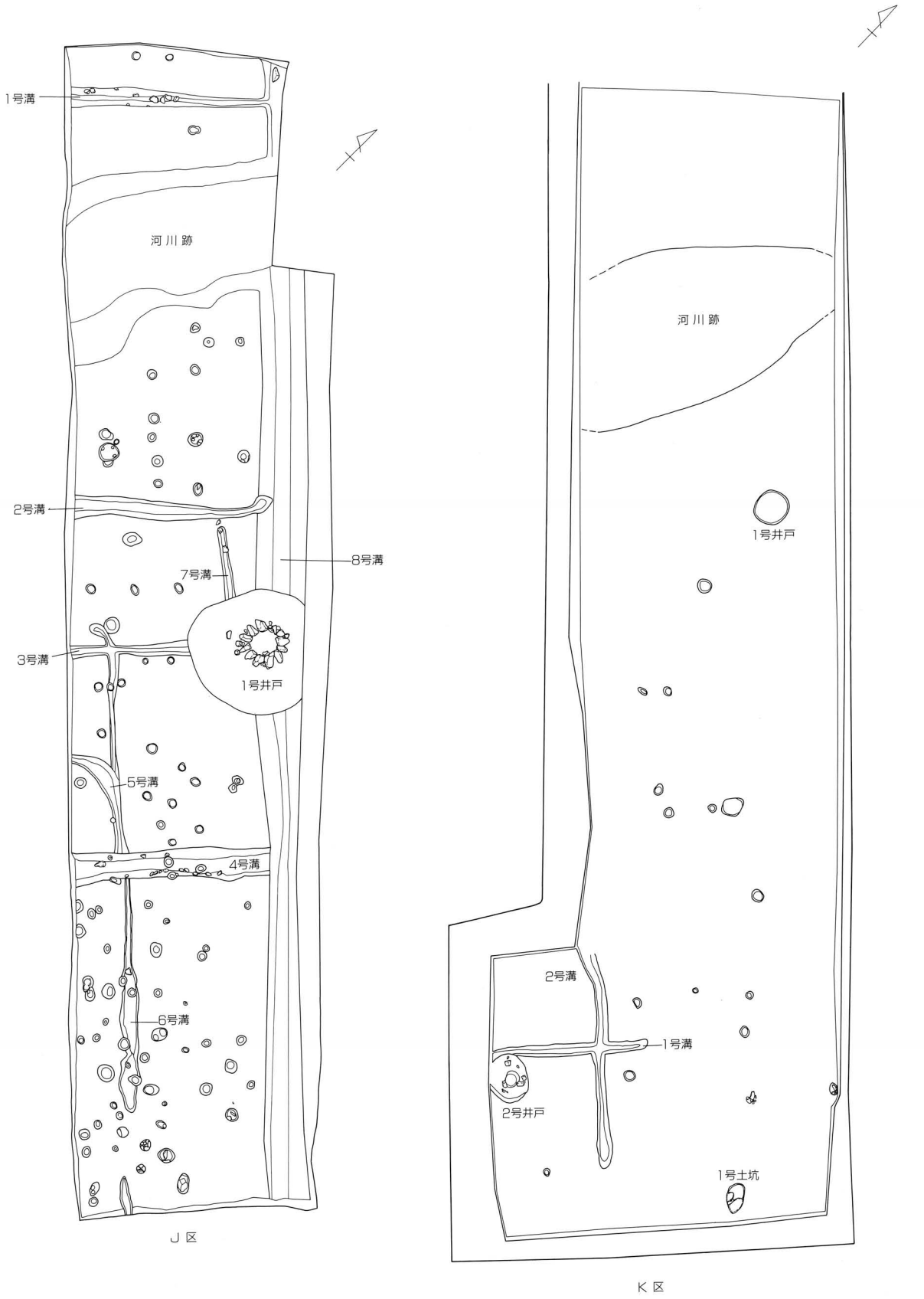

1号溝
河川跡
2号溝
7号溝
8号溝
3号溝
1号井戸
5号溝
4号溝
6号溝
J区
河川跡
1号井戸
2号溝
1号溝
2号井戸
1号土坑
K区
0
4m

図5　J・K区遺構平面図

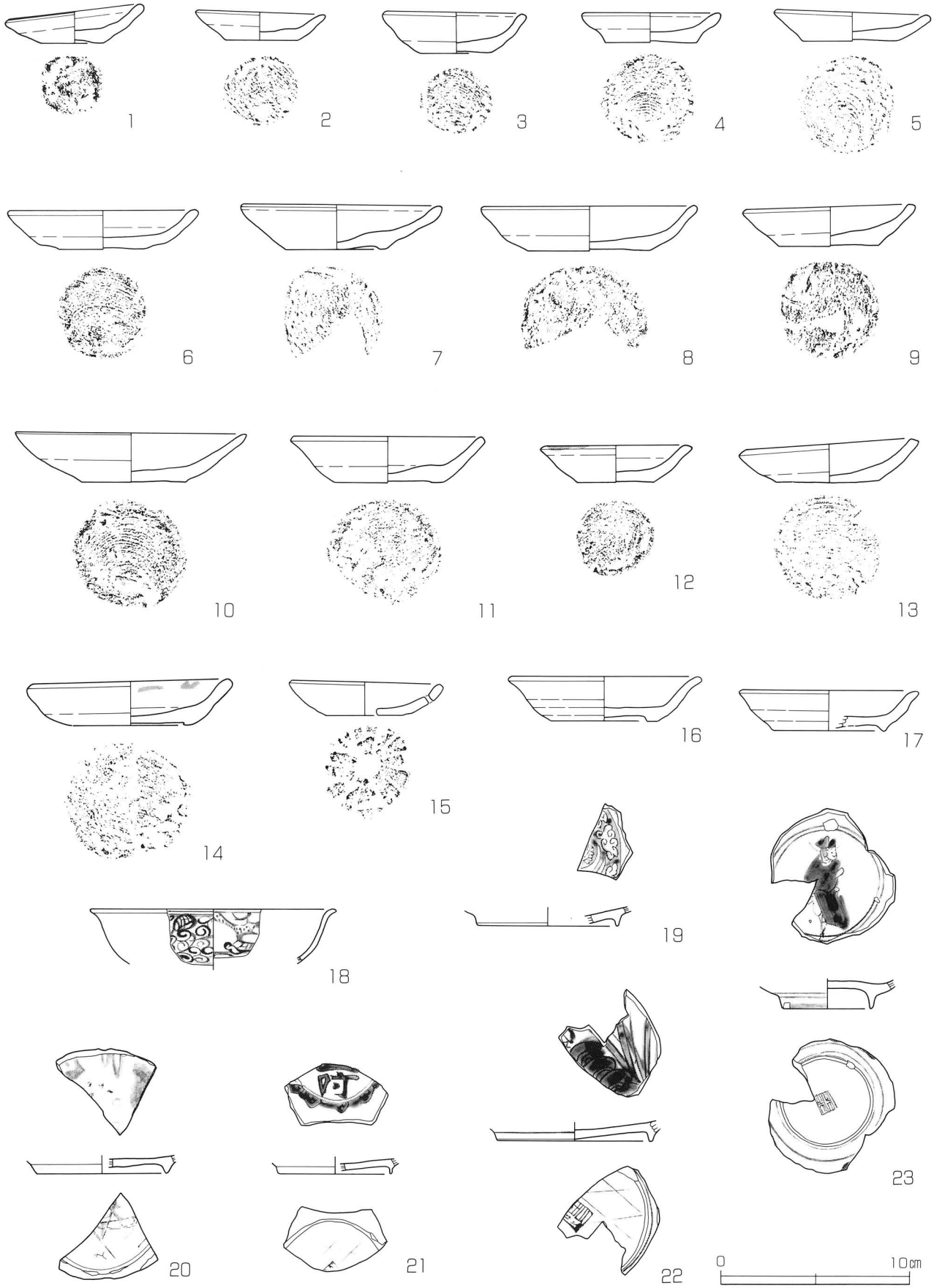


図6　第33次調査出土遺物（1）

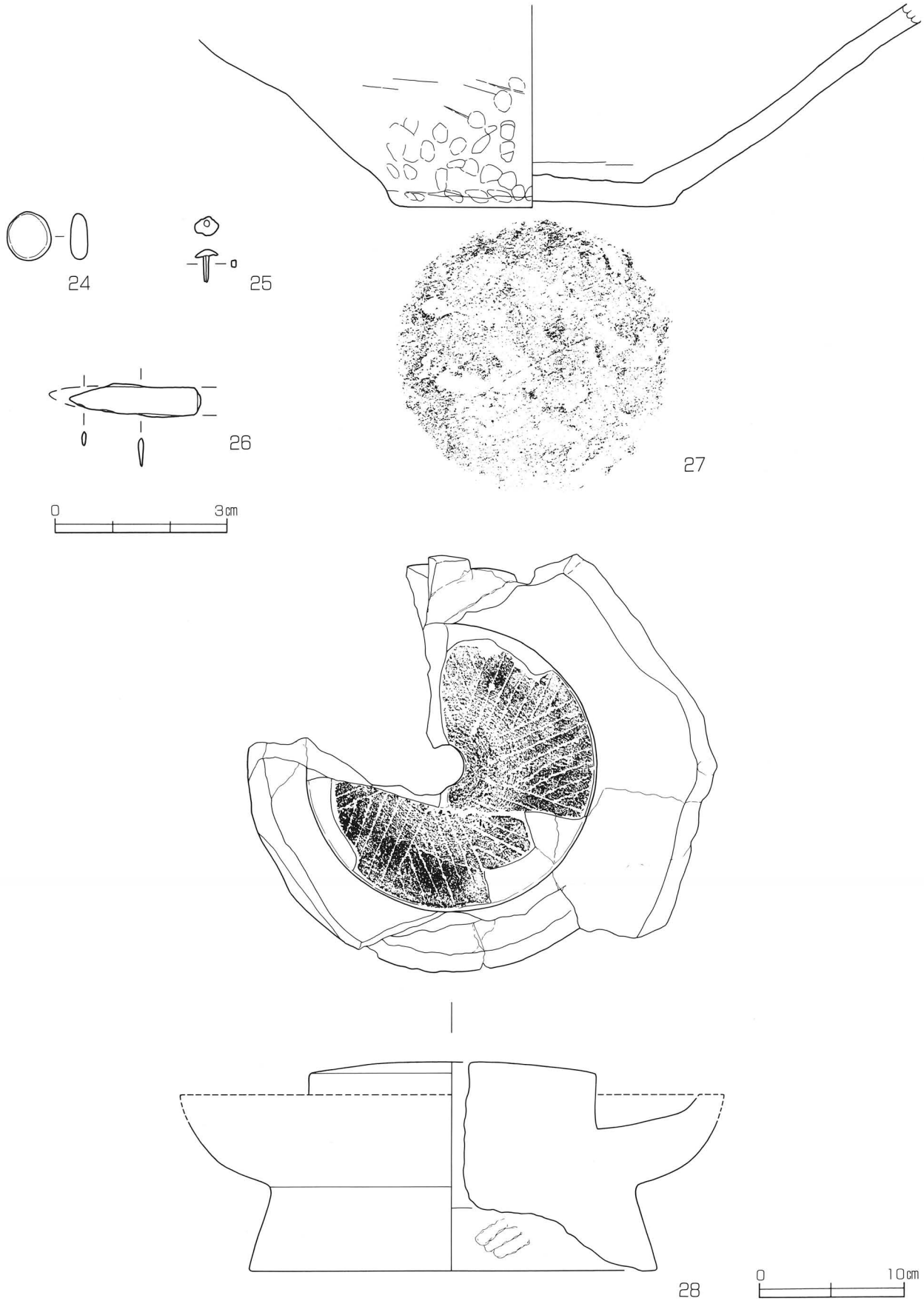


図7　第33次調査出土遺物（2）

表１　第33次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	A区	土器	かわらけ	6.5 ・ 1.5 ・ 3.9	口縁部～底部	ロクロ成形	長石・石英・金雲母	良	にぶい橙 7.5YR7/4	
2	A区	土器	かわらけ	7.1 ・ 1.6 ・ 4.9	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
3	B区	土器	かわらけ	8.0 ・ 1.6 ・ 5.1	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英	良	橙 7.5YR7/6	
4	A区	土器	かわらけ	7.0 ・ 1.7 ・ 3.2	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
5	A区	土器	かわらけ	8.6 ・ 2.1 ・ 5.4	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR6/6	
6	A区	土器	かわらけ	(9.9) ・ (2.1) ・ 4.7	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母	良	橙 7.5YR7/6	
7	B区	土器	かわらけ	(10.0) ・ (2.5) ・ 5.7	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英	良	浅黄橙 7.5YR8/4	
8	A区	土器	かわらけ	(11.2) ・ (2.4) ・ (6.4)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
9	A区	土器	かわらけ	(11.6) ・ (2.6) ・ 6.0	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英	良	橙 7.5YR7/6	
10	B区	土器	かわらけ	12.2 ・ 2.6 ・ 5.6	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
11	A区	土器	かわらけ	10.3 ・ 2.4 ・ 5.3	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	石英・金雲母	良	にぶい橙 7.5YR7/4	
12	E区	土器	かわらけ	7.5 ・ 2.0 ・ 4.2	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母	良	橙 5YR6/8	口縁部炭化物付着
13	I区 東西堀	土器	かわらけ	8.8 ・ 2.1 ・ 5.6	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR7/6	
14	J区 井戸	土器	かわらけ	10.1 ・ 2.4 ・ 6.3	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	黒褐 10YR3/1	内面炭化物付着
15	一括	土器	かわらけ	7.8 ・ 1.8 ・ 4.1	口縁部～底部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良		体部と底部に穿孔
16	B区	陶器	皿	(10.0) ・ (2.4) ・ (5.8)	口縁部～底部	鉄釉	密	良		見込みと底部にトチン痕
17	B区	陶器	皿	(9.3) ・ (2.2) ・ (6.1)	口縁部～底部	緑釉	密	良		大窯第２段階
18	E区 1号土坑	磁器	碗	(12.9) ・ 〈3.0〉 ・ －	口縁部～体部		緻密	良		
19	一括	磁器	皿	－ ・ 〈1.0〉 ・ (7.6)	底部	畳付無釉	緻密	良		明染付
20	一括	磁器	皿	－ ・ 〈0.9〉 ・ 6.0	底部		緻密	良		明染付
21	一括	磁器	皿	－ ・ 〈1.0〉 ・ (7.0)	底部		緻密	良		明染付　底部刻み痕
22	一括	磁器	皿	－ ・ 〈1.1〉 ・ (8.4)	底部	畳付無釉	緻密	良		明染付　底部刻み痕
23	一括	磁器	皿	－ ・ 〈1.6〉 ・ 4.8	底部		緻密	良		明染付
24	一括	石製品	碁石	長さ・幅・厚さ 1.71 ・ 1.53 ・ 0.61						
25	一括	金属製品	釘	長さ・釘頭部・厚さ 1.2 ・ 0.8 ・ 0.25						
26	一括	鉄製品	刀子	長さ・幅・厚さ 〈4.6〉・ 1.1 ・ 0.2						
27	K区	土器	甕	－ ・ 〈14.5〉 ・ 20.0	底部	ロクロ成形後外面ヘラナデ	長石・石英	良		常滑
28	F区 井戸	石製品	石臼	最大径・最大幅・高さ 28.7 ・ 38.5 ・ 14.9	上臼					

写真１　Ａ　区　全　景

写真２　Ａ区１号井戸

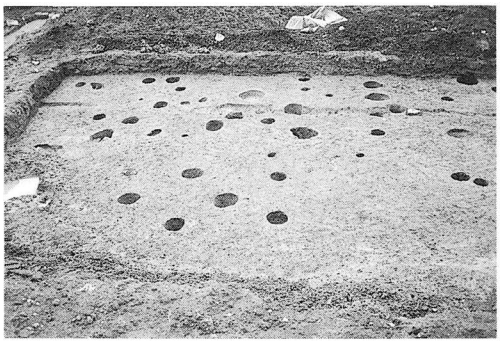


写真３　Ｂ　区　全　景

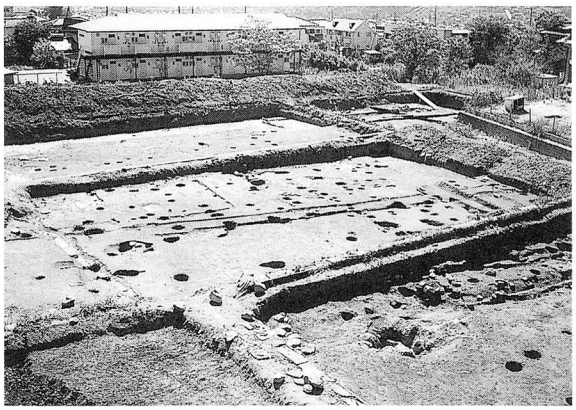


写真４　Ｅ　区　全　景

写真５　Ｆ　区　全　景

写真６　Ｈ　区　全　景

写真７　Ｉ　区　全　景

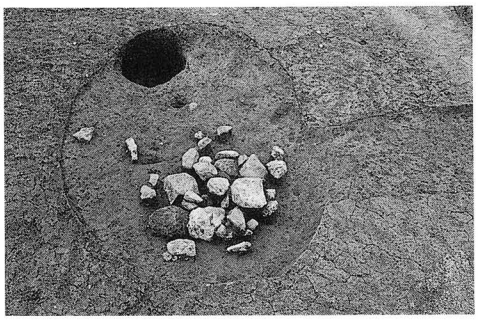


写真８　Ｉ区１号土坑

写真９　Ｊ　区　全　景

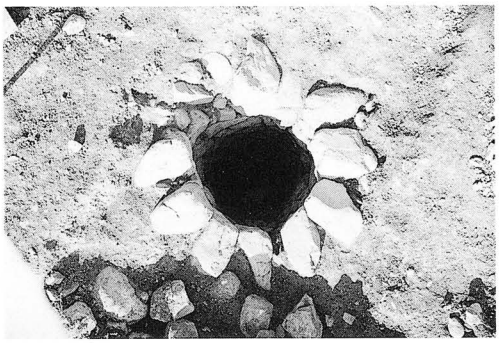
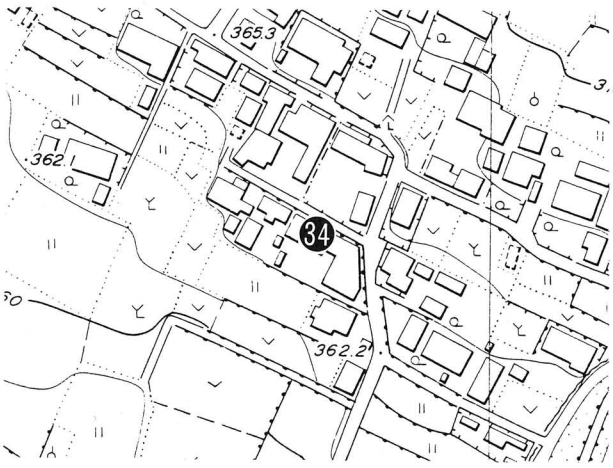


写真10　Ｊ区１号井戸

写真11　Ｋ　区　全　景

写真12　調　査　風　景

武田氏館跡第34次調査



所　在　地　甲府市古府中町2746番地
調査原因　渡辺家住宅改築工事
調査面積　91㎡
調査期間　平成４年５月11日～６月４日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の北東約160ｍに位置し、標高約365ｍを測る。本地点の字名は逍軒屋敷であり、西方に字名の由来である武田信玄の実弟逍遙軒信綱の屋敷伝承地がある。

住宅建替えに伴って行われた調査であり、周辺では第16次調査地点と東接し、北側では第48次調査が行われた。

調査は、住宅建築範囲91㎡を人力により掘り下げて行った。

遺　　構

溝２条・土坑４基・ピット26基、地鎮遺構が検出された。

１号溝　幅60～70㎝、近代の遺構と推測される。西側はやや不明瞭であり、東側は一部石列を伴い、近代建物の礎石として用いられた集石に切られる。

２号溝　幅95～130㎝、中世に比定される。断面はＶ型で、石の混入は少なく、土師質土器が検出された。数基のピットに切られるが、詳細な重複関係は不明である。

１号土坑　近代に比定される。約180㎝四方の隅丸方形で、深さ約10㎝を測る。瓦片・土器片・砥石等が出土している。

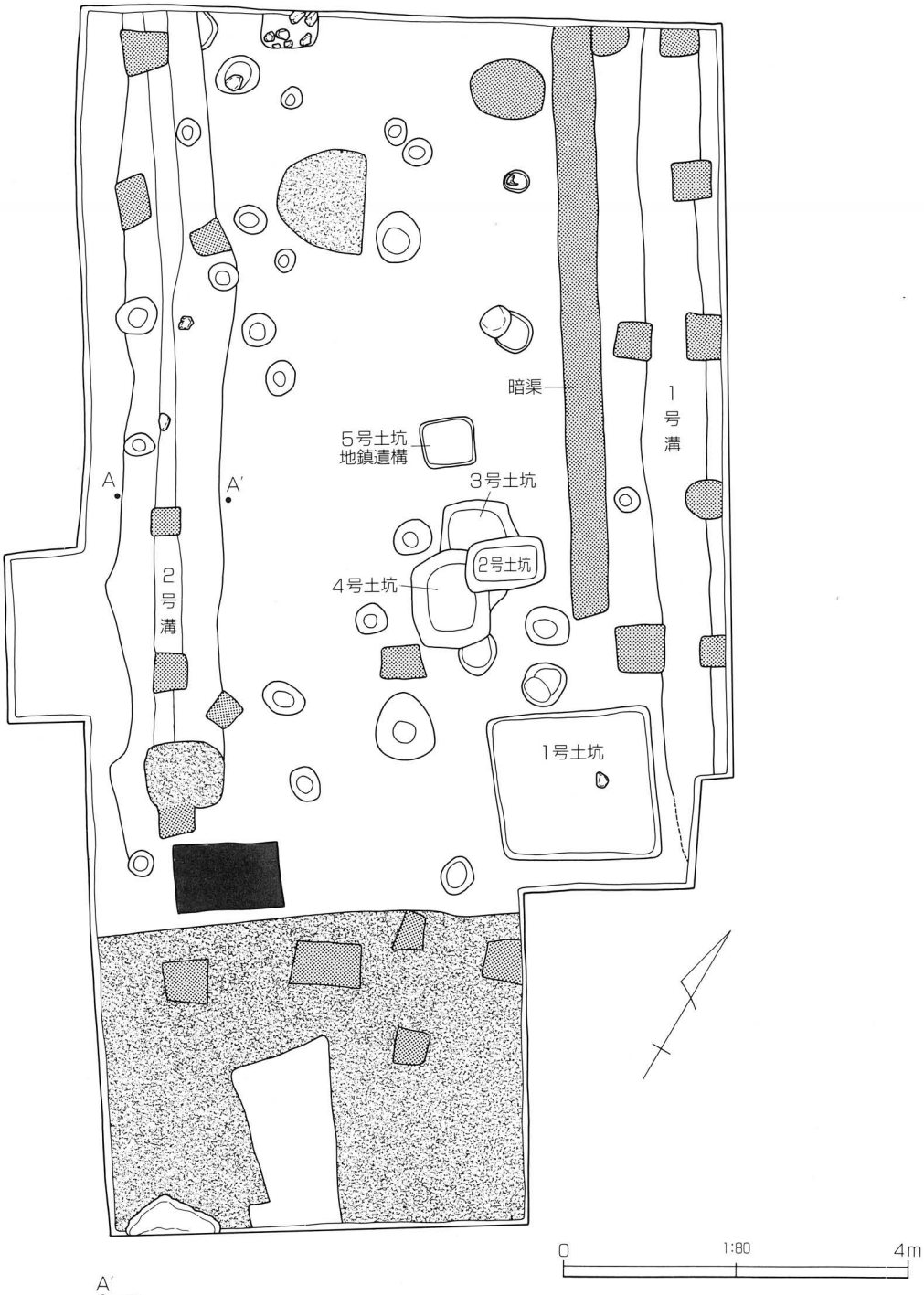
２号土坑　近世に比定される。約85×65㎝の方形で、深さ32㎝を測る。石・瓦片が混入していたものの、鉄釉甕片・寛永通宝等が検出されている。

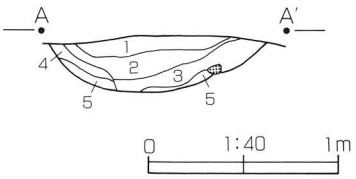
３号土坑　中世に比定される。隅丸長方形を呈し、深さ10㎝を測る。陶磁器片が検出された。２号土坑、４号土坑に切られる。

４号土坑　中世から近世に比定される。90㎝×110㎝の隅丸長方形を呈し、深さ約20㎝を測る。銅製の分銅が検出された。２号土坑に切られる。

ピット　26基が確認された。鉄滓・炭などが検出されたものもあるが、時期や用途についての詳細は不明で、建物柱穴配列の規格性もみられない。

暗　渠　近代に比定される。５～15㎝大の石が用いられ、調査範囲内で長さ約6.8ｍ、幅40㎝を測る。家屋に伴う遺構と推測されるが、詳細は不明である。





1. 暗褐色土層　上部は建物基礎土台の集石。小礫が散在。しまりあり。
2. 茶褐色土層　茶褐色粒子混入。ややしまりあり。
3. 暗褐色土層　炭化物少量含む。しまりあり。
4. 暗茶褐色土層　ややしまり強い。
5. 暗黄褐色土層　地山の黄褐色土が混入。しまり強い。

図1　平面図・2号溝セクション

地鎮遺構

調査区のほぼ中央に位置し、約50cm四方で深さ３～７cmを測る。土坑内より灯明皿・水晶片・瑪瑙片、籾や米等の炭化物が検出された。灯明皿は完形５個体とほぼ完形１個体、残存率１／４に満たない小片１の計７個体で、５つに油受けが付く。各灯明皿の下からは水晶または瑪瑙が検出された。これらは文字が描かれた呪符のような紙に銅粉と伴に包まれており、灯明皿で蓋をしたような状態で検出された。現在一般的に行われている神仏系統の地鎮祭とは様相が異なっているが、紙片からは断片的に「天理」「戊年」「家内」「成就」等の文字が判読でき、建築に伴った地鎮(鎮宅)遺構と推測される。出土した灯明皿から、遺構の時期は近世後期から近代に比定され、住宅建築の際に行われた地鎮に関する遺構と推測される。

写真１　第34次調査出土地鎮遺構

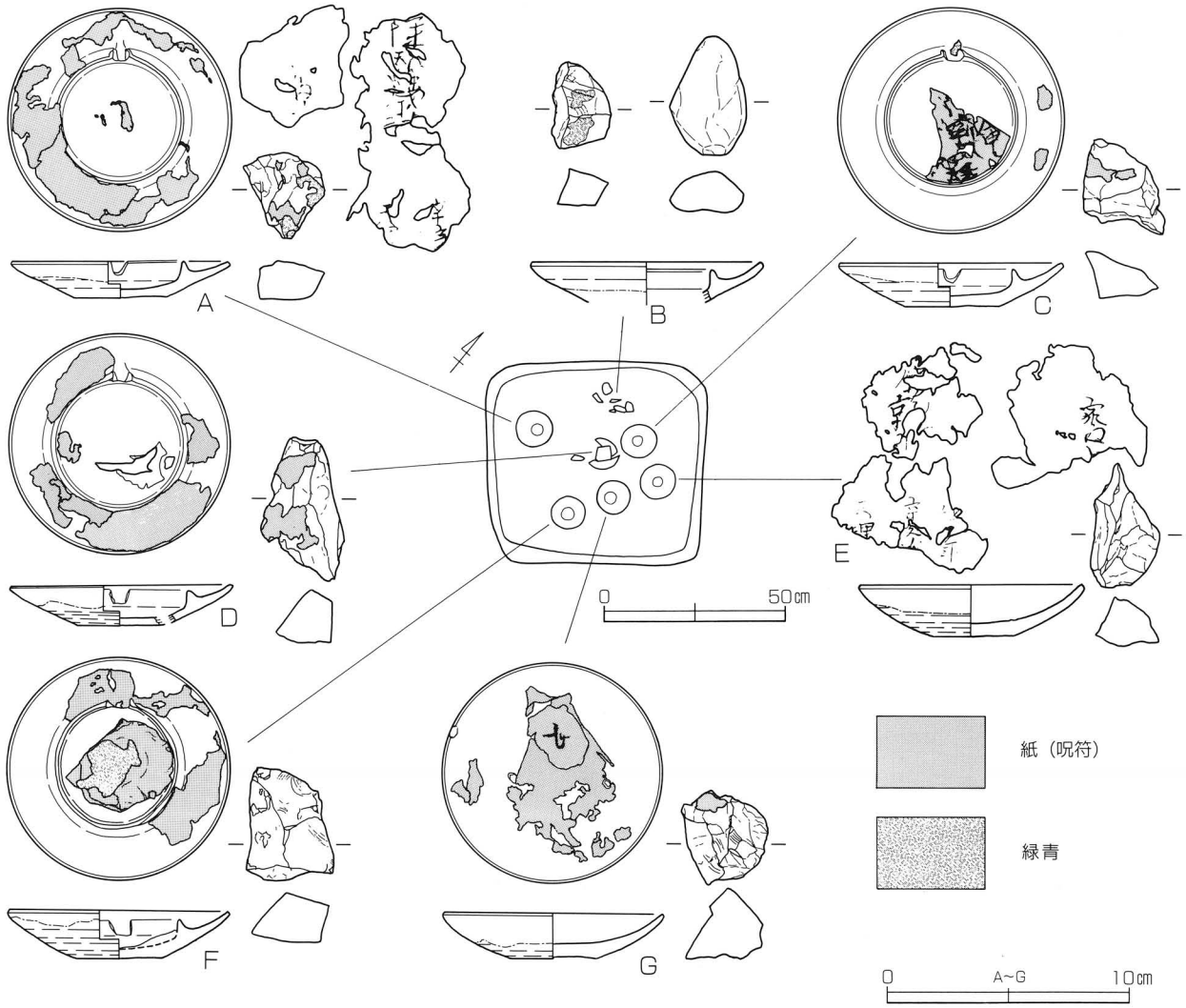


図2　地鎮遺構出土遺物

表１　地鎮遺構出土遺物観察表

番号	灯明皿法量（cm）等		伴出物	
	口径・器高・底径	油受け	石質／g	判読文字
A	9.1・1.6・3.9	有	水晶／19.6	「家内」「天理」
B	(9.7)・－・－	有	水晶／12.5 安山岩？／43.5	－
C	9.4・1.8・3.8	有	瑪瑙／19.9	判読不能
D	9.2・1.7・3.8	有	水晶／41.8	「大」
E	9.4・2.2・3.4	無	瑪瑙／24.4	「家内」「天理」 「成就」「戊○年」
F	9.2・2.0・3.6	有	水晶／36.6	－
G	9.2・1.9・3.6	無	水晶／37.4	判読不能

写真２　遺物出土状況

地鎮遺構の出土例は武田城下町遺跡においては確認されていないものの、甲府城跡の近世段階の鎮壇遺構や、北巨摩郡明野村小笠原でほぼ同時期にあたる類似した遺構が確認されている。本遺跡では、明治期の家屋下より灯明皿４枚、水晶片が検出された。灯明皿４枚のうち２枚は縦に重ねた状態で検出された。伴出した３cm四方の木片には、呪文のような崩した文字が書かれており、その上に足袋のコハゼを置いて灯明皿で蓋をしたように伏せる特徴的な出土状況がみられた。明野村と本調査においての遺構出土例には陰陽五行的要素をみることができる。灯明皿の完形個体数の６、また４の数字、瑪瑙の赤や器面の白などは五行でいう金気を表し、また灯明皿の器形の円は天、土坑の方形は地を表すと解される。土地に金気を取り入れ、また天を意するものを地中へ収めることで天地一体の永久を意図し、家屋の永遠を願っていたと推測される。しかしその方法や形式については、本来の地鎮は『陀羅尼集経』を典拠としており、また、かわらけと共に粥の五穀を埋めよ、などと示される中世の『修験常用秘法集』其の二「地鎮祭法」などが知られるように、各神仏・宗派によって地鎮の方法・形式は多岐にわたり複雑な様相を呈す。さらに江戸時代以降の信仰には一定の系統に止まらず、多種多様な要素を混在させた神仏混合の実益主義的な風潮があり、地域性、もしくは地鎮祭を執り行う者の個々の特異性が色濃く反映された遺構である可能性が考えられる。

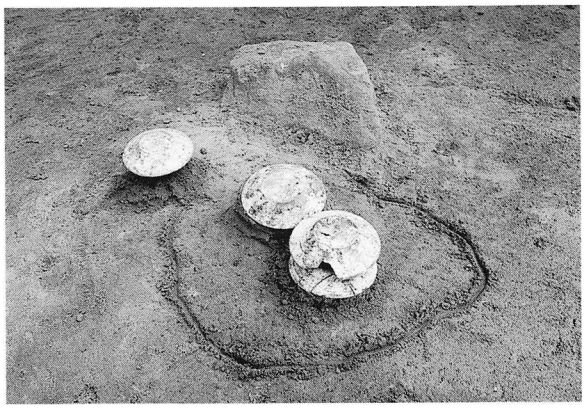


写真３　明野村出土地鎮遺構

写真４　同左　遺物出土状況

遺　　物

調査区からかわらけ・焙烙鍋・羽釜・匣鉢・陶磁器・青白磁・硯・金属製品・分銅が検出され、地鎮遺構では灯明皿、水晶片、瑪瑙片等が出土した。

１～４はかわらけで、いずれもロクロ成形である。１・３は口縁部、２は体部に灯明煤が付着し、外面に指頭痕、底部に回転糸切痕がみられる。５は焙烙鍋で、内耳取手が付き、外面には指頭痕がみられる。６は羽釜でⅩⅤ期に相当し、内外にナデが施され、内面口縁部に煤が付着している。７・８は瀬戸美濃系陶器で、８は瀬戸美濃系丸皿で大窯第２段階に相当する。９は匣鉢であり、近世に比定される。10は瀬戸美濃系の瓶である。11は瀬戸美濃系天目茶碗であり、大窯第３段階に相当する。12はくらわんか茶碗で、18世紀後半と推測される。13は近世の染付碗である。14はＣ群白磁碗である。15は砥石である。他、小片のため図化しなかったが、江戸期の青磁片も出土している。17～20は金属製品で、17・18は釘、19は４号土坑出土の銅製の分銅、20は鎌である。21～25は古銭で、寛永通宝等が出土した。

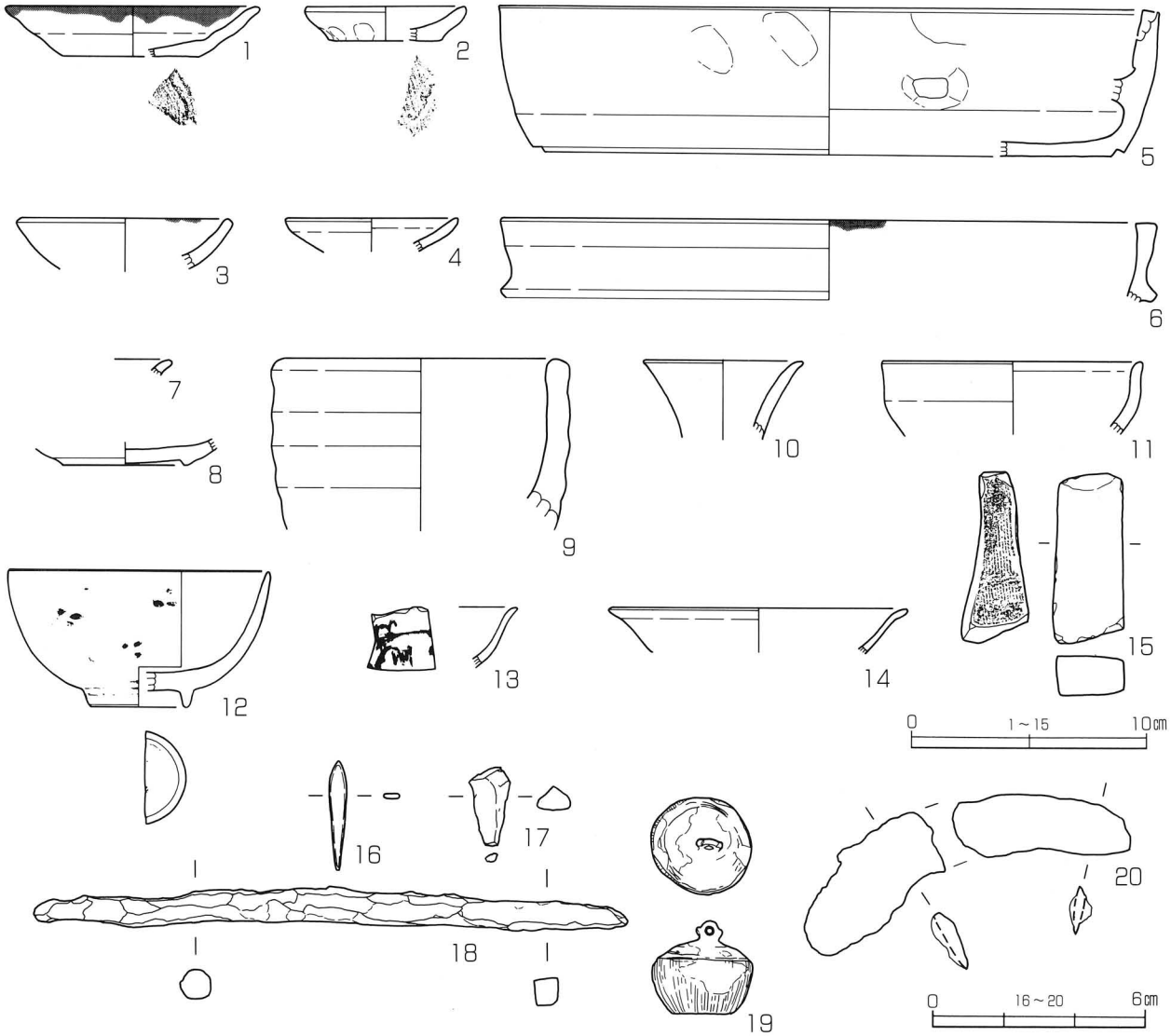


図3　第34次調査出土遺物

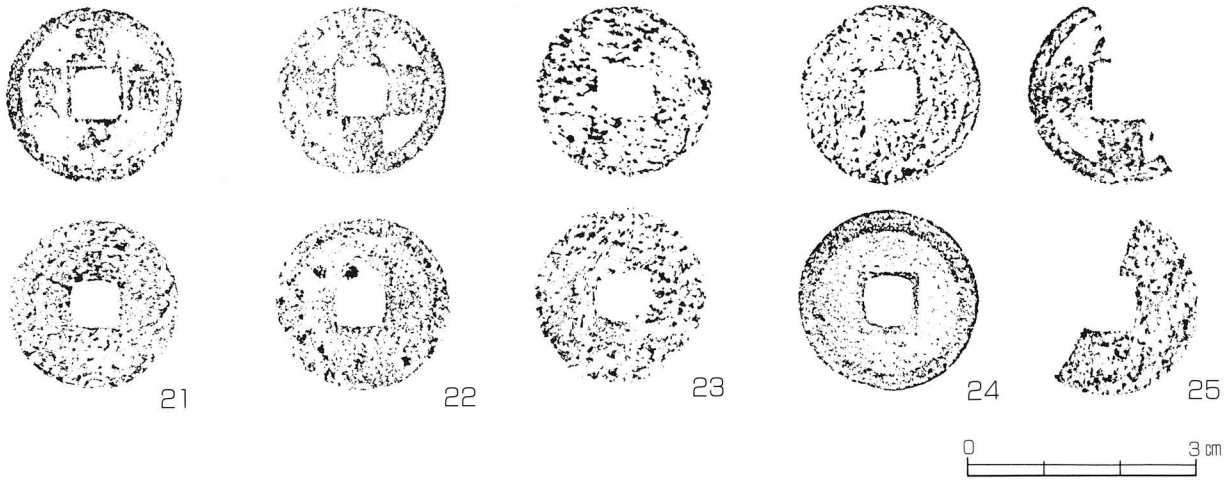


図4　第34次調査出土銭貨

表1　第34次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(10.8)・(2.2)・(5.6)	口縁部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面灯明煤付着
2	土器	かわらけ	(6.7)・(1.5)・(4.8)	口縁部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	赤色粒子・長石・雲母	良	にぶい黄橙 10YR7/4	外面指頭痕
3	土器	かわらけ	(9.2)・〈2.2〉・－	口縁部～体部	ロクロナデ	長石・雲母・赤色粒子	良	にぶい黄橙 10YR7/6	口縁部灯明煤
4	土器	かわらけ	(7.4)・〈1.4〉・－	口縁部～体部	ロクロナデ	長石・雲母・赤色粒子	良	にぶい黄橙 10YR7/4	
5	土器	内耳土器	(28.0)・(6.2)・(24.0)	口縁部～底部	外面指頭痕	赤色粒子・長石・金雲母	良	内/にぶい褐 7.5YR5/3 外/黒 10YR2/1	
6	土器	羽釜	(27.8)・〈3.35〉・－	口縁部～頸部		赤色粒子・長石・金雲母	良	内/にぶい褐 7.5YR5/4 外/橙 5YR6/6	口縁部煤付着
7	陶器	端反皿	－・－・－	口縁部	ロクロナデ	密	良	灰釉	
8	陶器	皿	－・〈1.2〉・(5.4)	体部～底部	ロクロナデ 削り出し高台	やや密	良	灰釉	
9	陶器	匣鉢	(11.4)・〈7.3〉・－	口縁部～底部		やや粗	良		
10	陶器	瓶	(6.8)・〈3.4〉・－	口縁部～体部	ロクロナデ	密	良	鉄釉	
11	陶器	天目茶碗	(10.4)・〈3.1〉・－	口縁部～体部	ロクロナデ	密	良	内外面鉄釉	大窯第3段階
12	磁器	碗	(11.2)・(5.8)・(40.0)	口縁部～底部	ロクロナデ	密	良	外面呉須絵 透明釉	くらわんか茶碗
13	磁器	碗・皿	－・－・－	口縁部	ロクロナデ	密	良	内外面呉須絵 透明釉	
14	白磁	端反皿	(10.4)・〈1.6〉・－	口縁部～体部		密	良		C群白磁碗
15	石製品	砥石	長さ〈6.4〉・幅2.8						
16	金属製品	不明	長さ・幅・厚さ 3.1・0.5・0.2						
17	金属製品	釘	長さ〈2.2〉・幅〈1.1〉						
18	金属製品	釘	長さ〈16.9〉・幅〈0.8〉						
19	金属製品	分銅	横幅・高さ・重さ 〈2.9〉・2.6・74.5g						
20	金属製品	鎌	長さ・幅・厚さ 〈9.9〉・1.8・〈0.6〉						長さ＝〈4.8〉＋〈5.1〉
21	古銭	寛永通宝	直径・穿径・厚さ 2.5・0.7・0.1	完形					
22	古銭	元豊通宝	直径・穿径・厚さ 2.3・0.6・0.1	完形					
23	古銭	解読不能	直径・穿径・厚さ 2.3・0.6・0.2	完形					
24	古銭	解読不能	直径・穿径・厚さ 2.5・0.7・0.2	完形					
25	古銭	解読不能	直径・穿径・厚さ 〈2.4〉・(0.7)・0.2	60%残存					

ま　と　め

調査の結果、中世に比定される遺物は検出されたものの、武田氏に関する遺構は確認できなかった。後世の建物跡や近代の暗渠、ごみ穴等が散見されており、江戸時代後期以降、継続的に居住空間として利用されたことが推測される。地鎮遺構については検出例が少ない現状からは性格や系統等、詳細を明らかにすることはできなかった。しかし、近年は明治期等の近代に比定される遺構についても調査対象として重視される傾向があり、今後比較対照可能な資料の増加が期待される。　　（望月秀和）

写真５　遺構出土状況

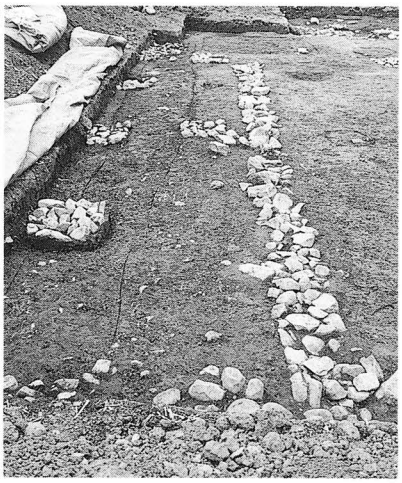


写真８　１号溝検出状況

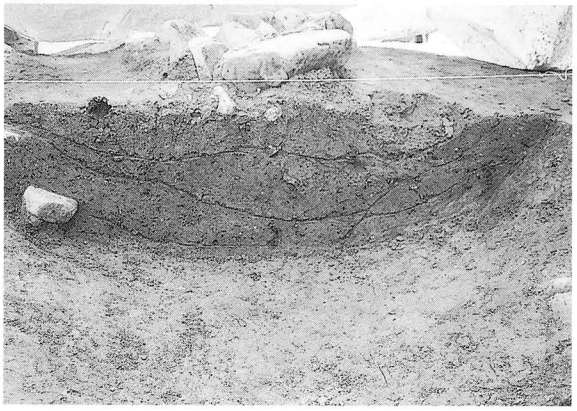
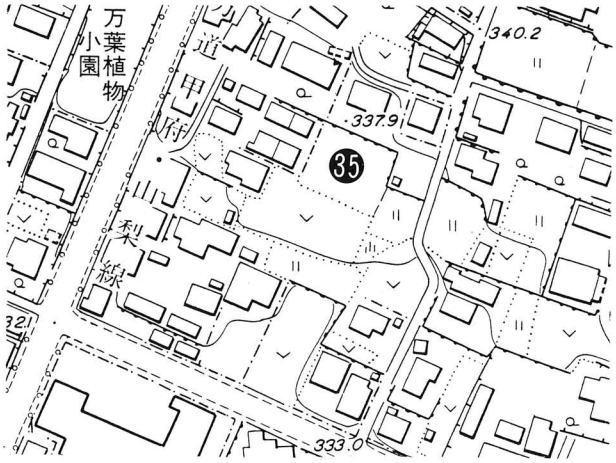


写真６　２号溝セクション

写真９　２号溝検出状況

写真７　地鎮遺構出土呪符片

武田氏館跡第35次調査



所　在　地　甲府市大手三丁目3684
調査原因　水口家住宅新築工事
調査面積　70㎡
調査期間　平成４年６月23日～７月８日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の南約300ｍ、標高336.8ｍを測る。第15・40・49次調査地点と隣接する。調査地点は水田として耕地利用していた場所である。調査区北側には石積があり、切り土による整地が行われていることが推測される。

調査は、住宅建設範囲約70㎡を人力により掘り下げて遺構確認を行った。

遺　　構

自然石が多く混入する層のなかに、いくつかの柱穴の存在を確認できたが、時期や遺構の性格を特定することはできなかった。

遺　　物

かわらけ・灯明皿・陶器皿、近代の甕または鉢等が出土した。１はロクロ成形のかわらけである。磨耗が著しいため、底部の糸切痕は確認できなかった。口縁部には灯明煤が付着している。他、数点出土しているが、小片のため図化しなかった。２は灯明皿で、内外面に鉄釉が施され、外面は口縁部を残し拭取りされている。３は志野丸皿であり、外面はロクロケズリされ、内外面に長石釉が施されている。４は近代の甕または鉢であり、輪積み成形で内外面鉄釉が施されている。

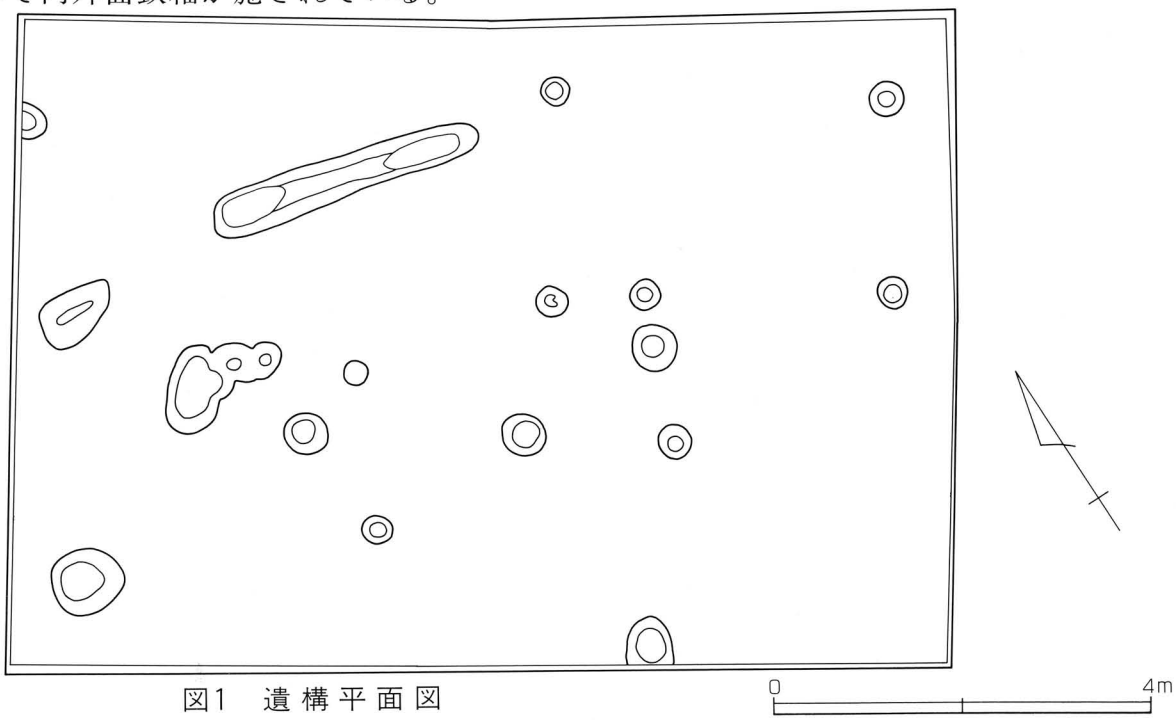


図1　遺構平面図

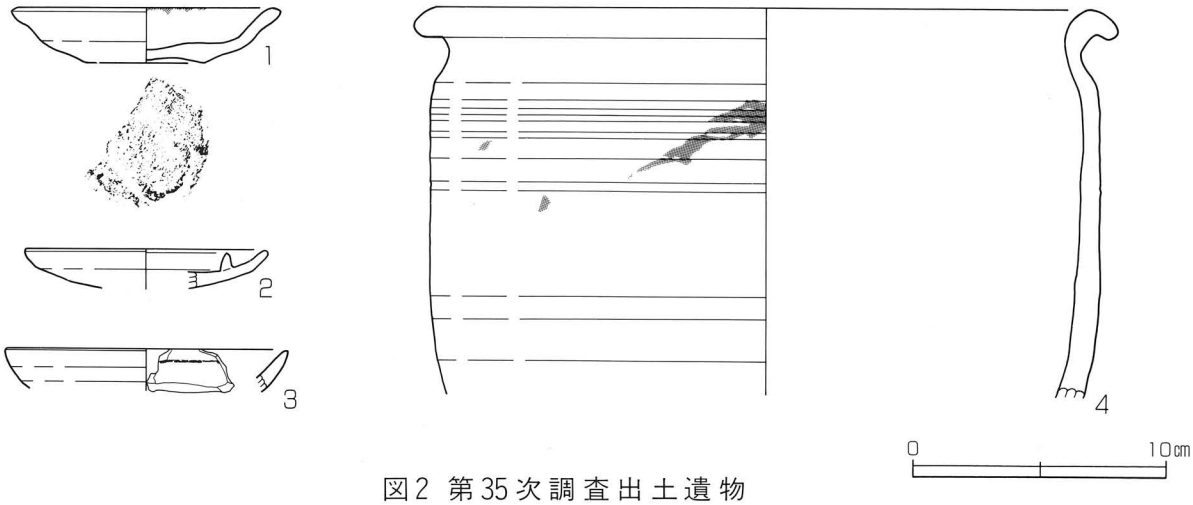


図2 第35次調査出土遺物

表1　第35次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(10.6)・2.2・4.8	口縁部～底部	ロクロナデ	赤色粒子・金雲母・石英・長石	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部タール付着
2	陶器	灯明皿	(9.6)・1.6・－	口縁部～体部	油受け貼付 外面釉拭取り	やや密	良	鉄釉	
3	陶器 志野	皿	(11.6)・1.6・－	口縁部～体部	ロクロケズリ	やや密	良	長石釉、貫入、内面鉄絵	
4	陶器	鉢	(37.4)・－・－	口縁部～体部	輪積み	やや密	良	鉄釉	

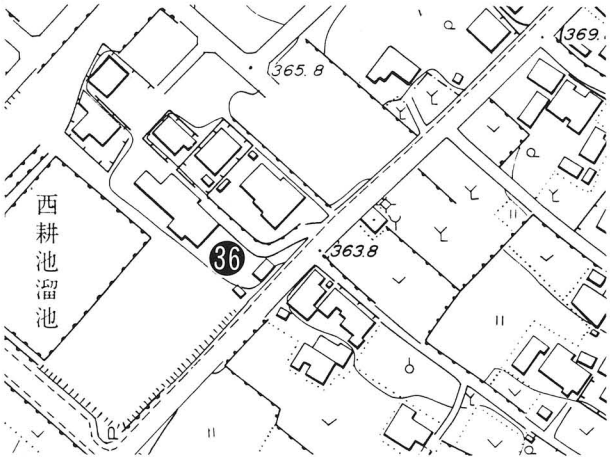
ま　と　め

本地点の表土下は、耕地化に伴い整地が行われ、調査区一面に細かい石が多量に混入している。柱穴以外の遺構は確認できず、また遺物も整地の際に混入した可能性があるため、遺構の時期や性格などの詳細を明らかにすることはできなかった。　（望月秀和）

写真1　調査区全景

写真2　ピット検出状況

武田氏館跡第36次調査



所　在　地　甲府市古府中町2617
調査原因　古府中町土地区画整理事業
調査面積　5 m²
調査期間　平成4年9月2・3日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査区は武田氏館跡の北約330ｍ、標高約330ｍを測る。西側には西耕地溜池があり、南側で第25次調査と道路をはさんで隣接する。

調査は道路整備に伴い、1×2ｍと、1×3ｍのトレンチを設定し、人力による掘り下げを行った。

遺構・遺物

調査トレンチでは遺構は検出されず、遺物も土器小片2点のみの出土であるため、ここでは図化しなかった。

ま　と　め

本地点は逍軒屋敷の小字境にあたり、屋敷に関する遺構の検出が予想されたが、遺構は検出できず、遺物の出土もわずかであった。　（望月秀和）

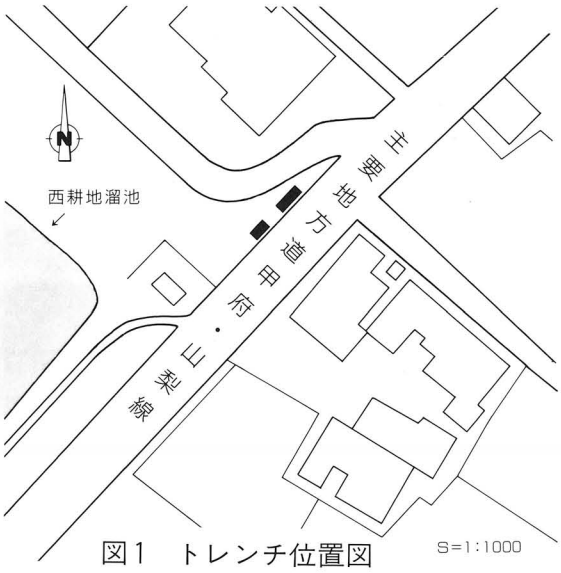


図1　トレンチ位置図

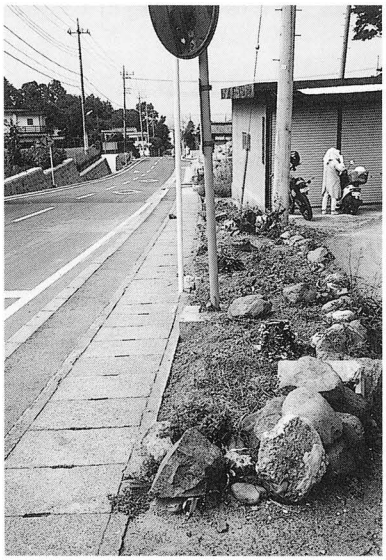


写真1　調査前風景

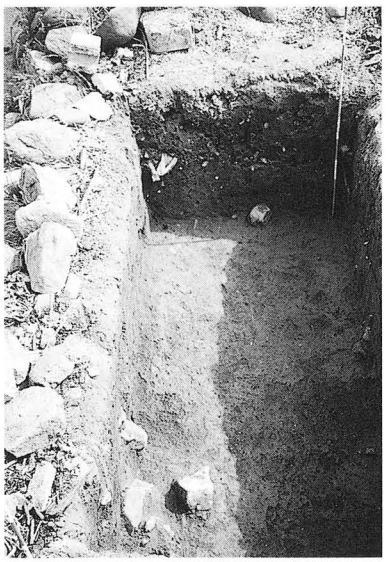


写真2　調査トレンチ(1×2m)

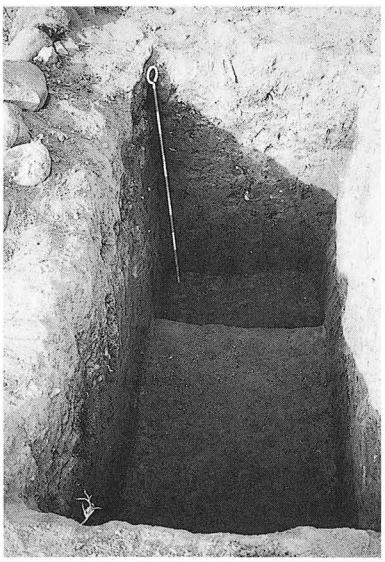
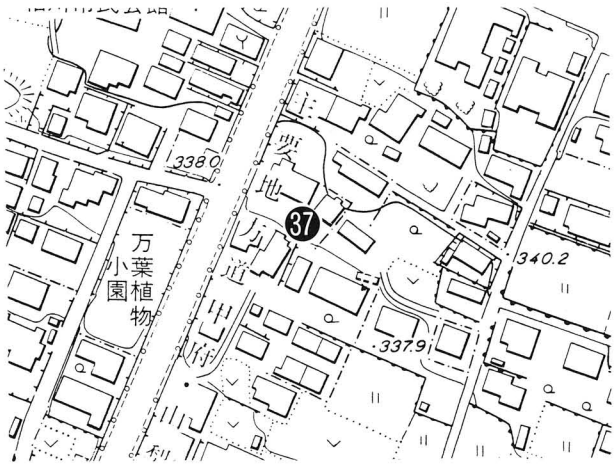


写真3　調査トレンチ(1×3m)

武田氏館跡第37次調査



所　在　地　甲府市大手三丁目3675－14
調査原因　菊島家住宅新築工事
調査面積　42㎡
調査期間　平成４年９月21日～10月23日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の南側約170ｍ、標高約336ｍを測り、「古府中村絵図」（中沢泉氏所蔵）において穴山氏・馬場氏等武田氏重臣の家臣屋敷と記される地域に位置する。近隣では第８・９・14・15・26・35次調査を行っている。

調査は住宅建設範囲を人力によって掘り下げ、地表下60㎝～100㎝で遺構を検出した。

遺　　構

土　　坑　　調査区東側に位置し楕円形の掘り込みで、確認された範囲で長径2.85ｍ、短径1.70ｍを測る。廃棄場のような用途が推測され、覆土に混入する礫に伴って中世に比定される１・15・19等が検出された。建物の柱穴と推測されるピットの一つが重複する。

ピ　ッ　ト　　22基のピットを検出した。調査区中央で検出したＮ－58°－Ｅの方向に3基ずつ並列する６基のピットは、建物の柱穴である可能性を示す。調査範囲からは建物の性格・規模・時代等の詳細を確認することはできなかったが、ピットの並列方位と位置より北への広がりが推測される。

遺　　物

中世から近世に比定されるかわらけ、擂鉢、灰釉陶器、鉄釉陶器、磁器、白磁片、硯、鉄製品、小柄（こづか）、古銭（永楽通宝）などが出土した。

かわらけは、いずれもロクロ成形である。１・２・６・７は底部に糸切痕がある。10は尖底、１・６には底部にトチン状の貼り付けがみられる。１は口縁部にタール状の付着物があり、６は内面に灯明煤が付着している。14は在地の擂鉢である。13は火鉢の口縁部で、花菱押文がみられる。12は耳皿で、磨耗しているが、糸切痕がわずかに残る。15・16は同一個体と思われる灰釉陶器の端反皿であり、付け高台で印花文がみられ、大窯第１段階に比定される。19は中国天目茶碗である。20は白磁である。21は赤絵の蓋であり、中世に比定される。22は中国製磁器の呉須絵皿で15世紀後半～16世紀中頃に比定される。23は硯の一部で、磨り面がわずかに残る。24は小柄で、刀の鞘に指しそえる副子（そえご）と通称する小刀に付ける柄である。細工が施される工芸品であるが、出土品は半面が欠損し、腐食が著しいため、細工の有無は確認できなかった。25～28は角釘である。その他、炭化米や流れ込みと思われる黒曜石片が出土している。

ま と め

本地点では、盛土による整地層上に耕作土層が形成されたため、遺構は良好な状態で遺存していた。検出した遺構や釘等の出土遺物から、建物の存在が推測されるものの、確認した範囲では家臣屋敷に関わる遺構と断定するのは難しい。しかし、硯や小柄が出土したことは、この一帯が家臣屋敷地であった可能性を示唆している。　（望月秀和）

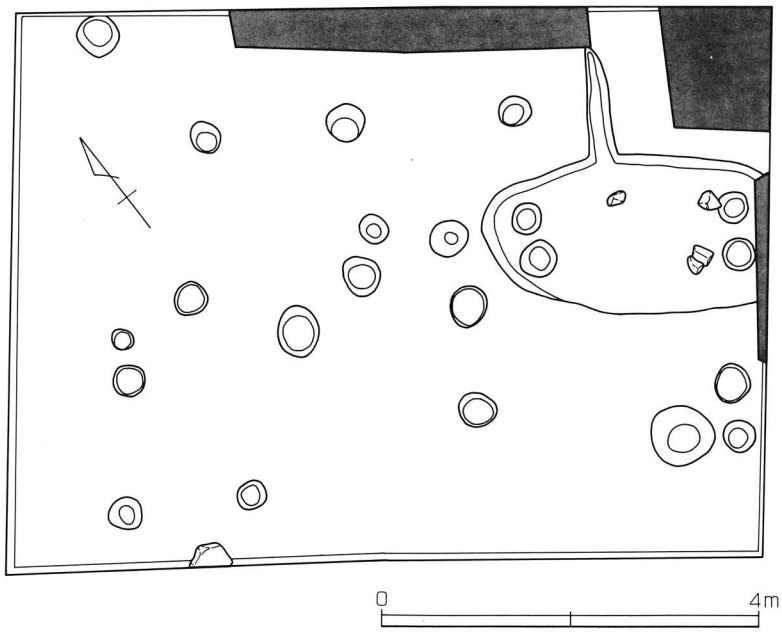


図1　遺構平面図

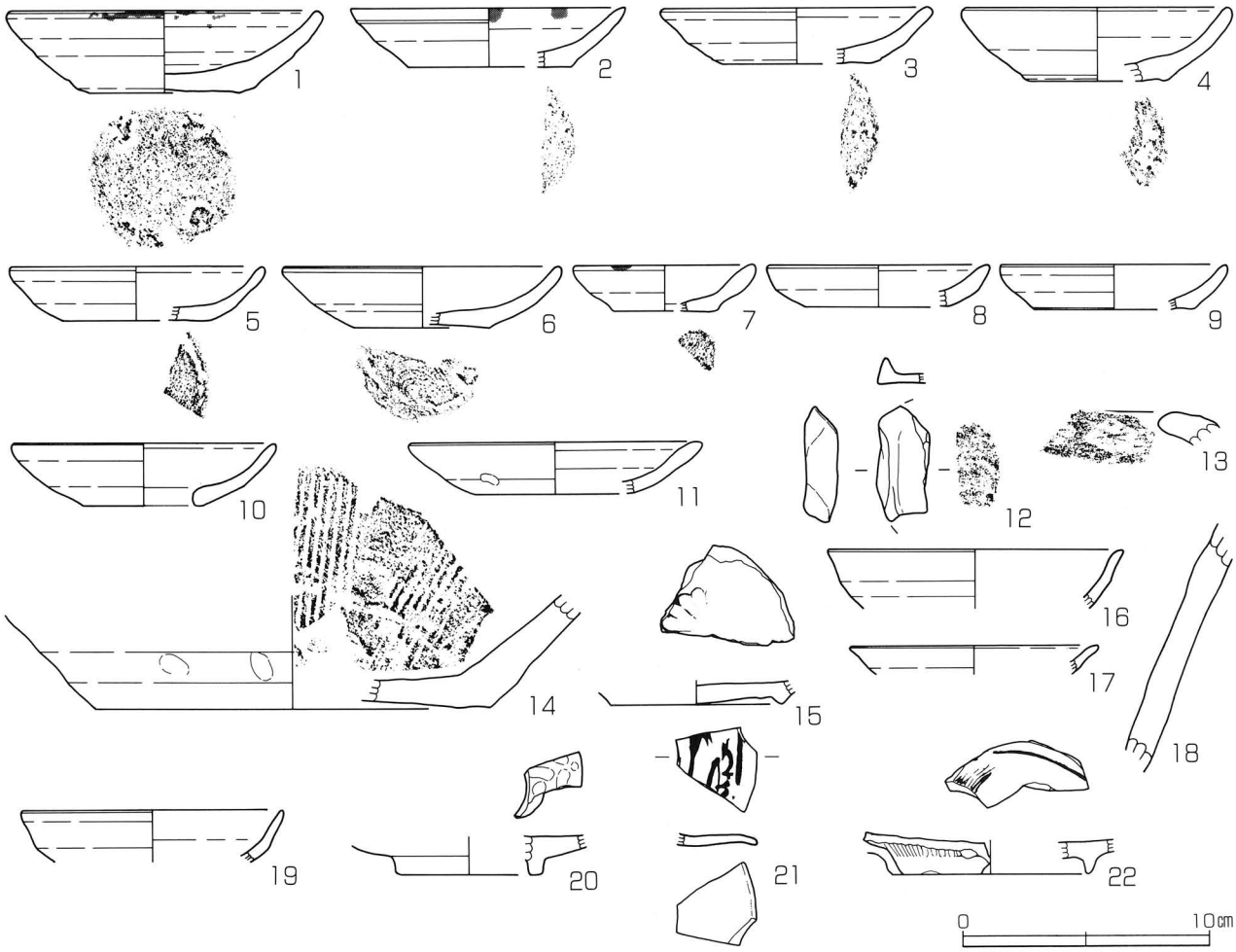


図2　第37次調査出土遺物（1）

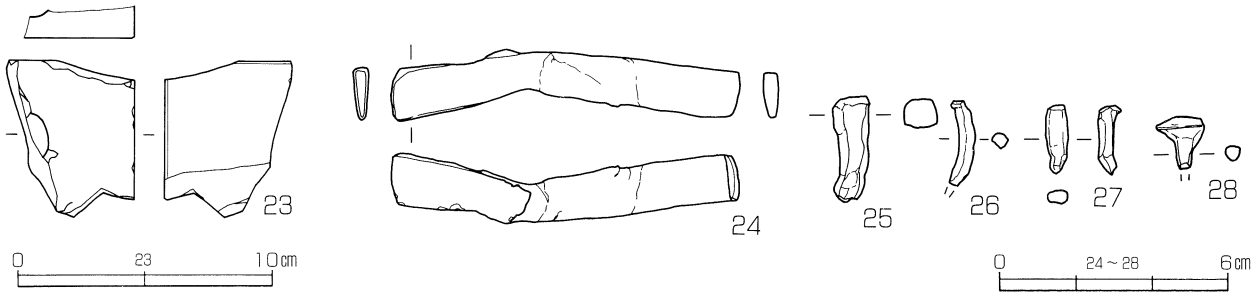


図3　第37次調査出土遺物（2）

表1　第37次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(12.8)・3.3・(6.6)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・金雲母・長石	良	橙 2.5YR6/8	口縁部にタール状付着物
2	土器	かわらけ	(11.2)・2.5・(6.4)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・長石・雲母	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部横ナデ灯明媒付着
3	土器	かわらけ	11.1・2.3・6.0	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・長石・金雲母	良	橙 7.5YR7/6	
4	土器	かわらけ	(11.0)・3.0・(5.5)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
5	土器	かわらけ	(10.4)・2.2・(5.8)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
6	土器	かわらけ	(11.4)・2.5・(3.4)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・長石・金雲母	良	黒色	内面に灯明媒付着
7	土器	かわらけ	(7.2)・1.8・(4.2)	口縁部～底部	ロクロナデ	金雲母・長石	良	橙 5YR6/6	口縁部に炭化物付着
8	土器	かわらけ	(9.1)・1.7・(5.8)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・金雲母	良	橙 7.5YR6/6	
9	土器	かわらけ	(9.2)・1.8・(6.4)	口縁部～底部	ロクロナデ	長石・雲母	良	橙 7.5YR6/6	
10	土器	かわらけ	(10.8)・2.5・(4.8)	口縁部～底部	ロクロナデ	長石・雲母	良	黒色	底部穿孔
11	土器	かわらけ	(11.6)・2.1・6.4	口縁部～底部	ロクロナデ	長石・雲母	良	にぶい橙 7.5YR6/4	
12	土器	耳皿	(6.0)・－・(4.2)	口縁部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	石英・金雲母	良	橙 7.5YR7/6	
13	土器	火鉢	－・－・－	口縁部		雲母	良	橙 7.5YR7/6	花菱押型文
14	土器	擂鉢	－・－・(16.0)	体部～底部	おろし目		やや不良	にぶい黄橙 10YR6/3	
15	陶器 瀬戸美濃	端反皿	－・－・(7.0)	底部	付け高台 印花文	密	良	灰釉	16と同一個体
16	陶器 瀬戸美濃	端反皿	(12.0)・－・－	口縁部		密	良	灰釉	17と同一個体
17	陶器	皿	(10.2)・－・－	口縁部		密	良	灰釉	
18	陶器	甕	－・－・－	体部	指頭痕	密	良	無釉 焼きしめ	大窯第2段階
19	中国製 陶器	皿	(10.7)・－・－	口縁部～体部		密	良	鉄釉	
20	磁器	皿	－・－・－	底部	削り出し高台		良		
21	磁器	蓋	－・－・－	口縁部		密	良	赤絵	
22	磁器	皿	－・－・(8.0)	底部	削り出し高台	密	良	呉須絵 透明釉	
23	石製品	硯	長さ・幅・厚さ 〈6.1〉・〈4.9〉・〈0.8〉						
24	金属製品	小柄	長さ・幅・厚さ 9.3・1.2・0.4						腐食が著しい
25	金属製品	釘	長さ〈1.9〉・太さ0.5						腐食が著しい
26	金属製品	釘	長さ〈2.2〉・太さ0.4						腐食が著しい
27	金属製品	釘	長さ〈2.8〉・太さ0.8						腐食が著しい
28	金属製品	釘	長さ〈1.5〉・太さ0.4						腐食が著しい

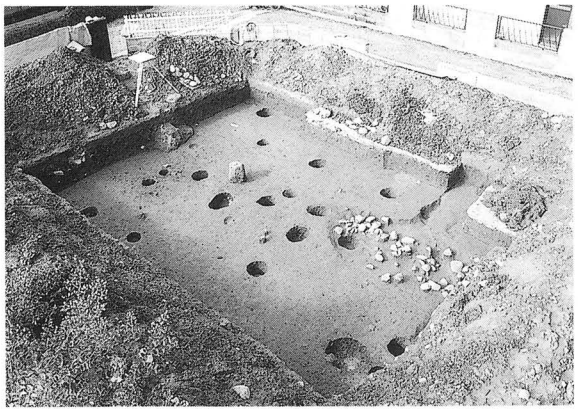


写真１　調査区全景

写真２　調 査 風 景

写真３　遺構出土状況(西から)

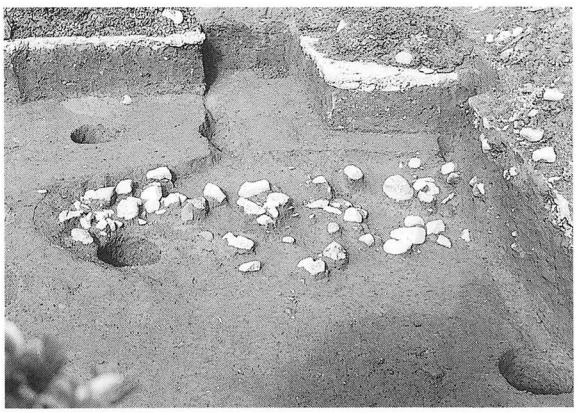


写真４　土坑出土状況

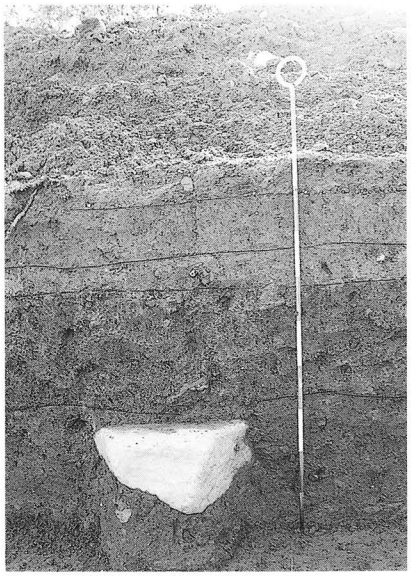
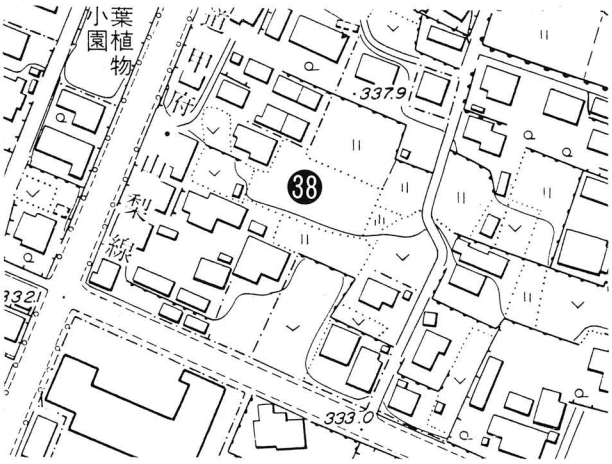


写真５　南壁セクション

写真６　遺物出土状況

武田氏館跡第38次調査



所　在　地　甲府市大手２丁目3680
調査原因　小宮山家住宅新築工事
調査面積　66㎡
調査期間　平成５年５月19日～６月17日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の南側約210ｍ、標高約336ｍを測る。本地点は南北基幹街路である広小路と鍛冶小路に挟まれた地域に位置しており、「古府中村絵図」（中沢泉氏所蔵）で馬場美濃守屋敷跡と示される家臣屋敷推定地域にあたる。近隣では第15・35・37次調査が行われており、本地点の調査区全体が耕地化、または宅地化に伴う掘削・整地・埋め立て等の攪乱がみられ、多量の礫が混入する。

調査は、住宅建築範囲全体を人力により掘り下げた。調査区のほぼ中央から遺構を検出した。

遺　　構

武田氏時代に比定される土坑１基と近代の暗渠が検出された。

土坑は、調査区の中央付近で検出された。内部には礫と焼土を伴う。壁面には粘土が貼られ、最厚５㎝を測る。底面に近づくにしたがって粘土はなくなり、底面は不明瞭となる。全体的に火を受けており、とくに南壁面が赤変している。カマド跡である可能性もあるが、柱穴などの住居に関わる遺構は確認できず、詳細を明らかにすることはできなかった。

遺　　物

かわらけ・土鍋・陶器・須恵器片が出土している。

かわらけはいずれもロクロ成形で、１・３には回転糸切痕がみられる。４は土鍋で中世に比定される。５は土製擂鉢で、口唇部に凹みが入っている。６は須恵器片であり、内外面と一側面を砥石に転用した痕跡がみられる。７は近世に比定される内外面鉄釉の擂鉢である。８は常滑甕で、内面に指ナデ、外面に指頭痕がみられる。９は近代の暗渠上面で検出した瀬戸美濃系天目茶碗で、遺構構築時に混入したものであろう。10は瀬戸美濃系鉄釉皿で、底部に砂目、削り出し高台、内面に重ね焼きによるトチン痕がみられる。大窯第２または第３段階に位置づけられる。11は18世紀の肥前系染付碗である。

ま　と　め

調査区は後世の整地や暗渠の構築に加え、重機によって大きな石を埋め込んだ痕跡があり、大半が掘削されている。中世に比定される遺物の出土から、周辺に居住空間が存在していたと推測できる。しかしながら、本地点では耕地化や宅地化に伴う掘削が行われているため、遺構の遺存状況が悪く、馬場美濃守屋敷跡とする伝承を裏付けることはできなかった。

（望月秀和）

図1　トレンチ・土坑位置図

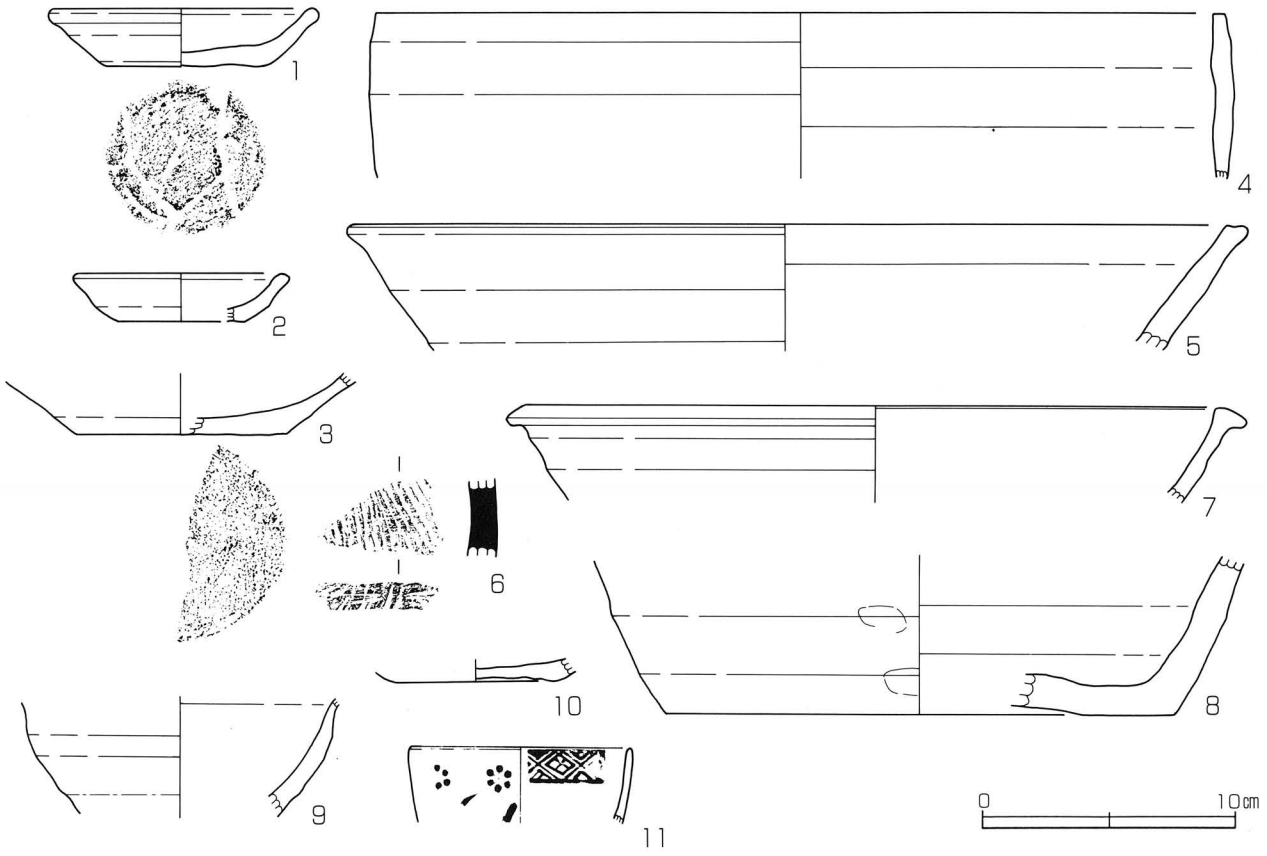


図2　第38次調査出土遺物

ま　と　め

本地点の表土下は、耕地化に伴い整地が行われ、調査区一面に細かい石が多量に混入している。柱穴以外の遺構は確認できず、また遺物も整地の際に混入した可能性があるため、遺構の時期や性格などの詳細を明らかにすることはできなかった。　　（望月秀和）

表１　第38次調査出土遺物観察表

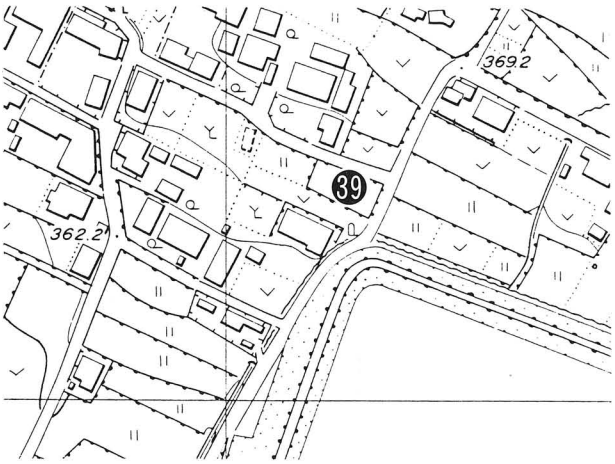
（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量（cm）口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	10.6・2.3・6.0	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・長石・雲母	良	橙 5YR6/6	
2	土器	かわらけ	(8.6)・(1.9)・(5.1)	口縁部～底部	ロクロナデ	石英・長石・雲母	良	橙 7.5YR6/6	
3	土器	かわらけ	－・－・8.0	体部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	石英・雲母	良	にぶい黄橙 10YR7/4	
4	土器	土鍋	42.2・－・－	口縁部～胴部	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	灰黄褐 10YR5/2	
5	土器	擂鉢？	(34.6)・－・－	口縁部～胴部	ロクロナデ	石英・長石・雲母	良	橙 7.5YR7/6	
6	須恵器	壺 or 甕	－・－・－	体部	叩き目	石英	還元硬質	灰白色／N	側面に擦痕　砥石に転用
7	陶器	鉢	29.9・－・－	口縁部～胴部	全面施釉	やや粗　小石を含む	良	内外面鉄釉	
8	陶器	鉢	－・〈6.3〉・(20.0)	底部～体部	指ナデ	やや密　石英	良	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	焼きしめ、指頭痕
9	国産陶器 瀬戸美濃	天目茶碗	－・－・－	体部	内面下部 茶筅すり	やや粗	良	鉄釉	大窯第２段階
10	国産陶器 瀬戸美濃	皿	－・－・(6.2)	底部	砂目 削り出し高台	密	良	鉄釉 サビ釉	内面重ね焼痕、底面砂痕
11	陶器	碗	8.8・－・－	口縁部～胴部	呉須絵	密	良	内外面呉須絵	

写真１　調査区完掘状況

写真２　土坑完掘状況

武田氏館跡第39次調査



所　在　地　甲府市古府中町3547
調査原因　保坂家住宅増築工事
調査面積　3㎡
調査期間　平成6年7月12日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

調査地点は、標高約365mを測り、大正6年に造られた竜ヶ池の北西側に位置する。本地点は高塀の字名が残る。南北基幹街路の一つである古籠屋小路の北端付近に位置しており、「古府中村絵図」（中沢泉氏所蔵）では高木氏屋敷の伝承地と隣接する。

調査は、敷地に1×3mのトレンチを設定し、手掘りにより確認調査を行った。

遺構・遺物

遺構は確認できなかった。遺物は、トレンチ中央部の地表下約60cmで焼土を含むブロック状の土中より数点を検出した。1は瓦質土器で、焼成はやや不良であるが、鉢または鍋と思われる。2は江戸期の染付碗または皿で、内面見込み付近に1条の染付ラインが入る。その他は小片のため、図化しなかった。

ま　と　め

本地点の表土下は黄褐色の水田床土層、褐色粘質土層、整地等による掘削で多量の砂礫が混入する層、黒褐色土層となり、約65cmで礫が突出する地山層に至る。出土遺物は、後世の耕作や宅地造成等で混入したと考えられる。調査状況からは、家臣屋敷の伝承に関係する遺構・遺物は確認できなかった。

（望月秀和）

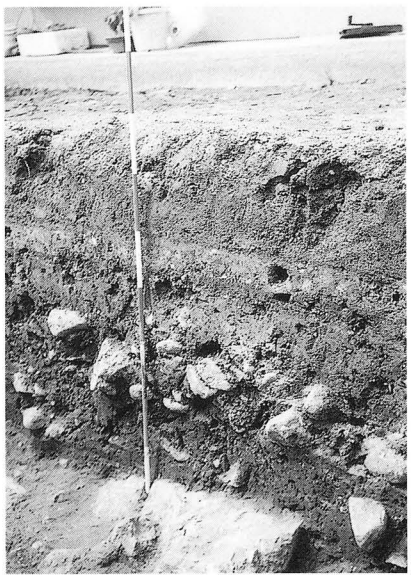


写真1　土層堆積状況

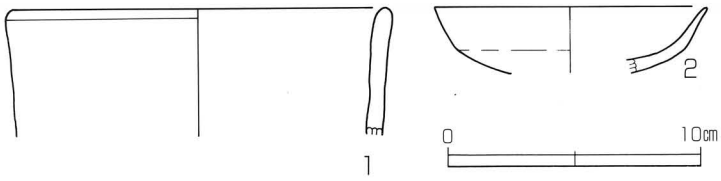


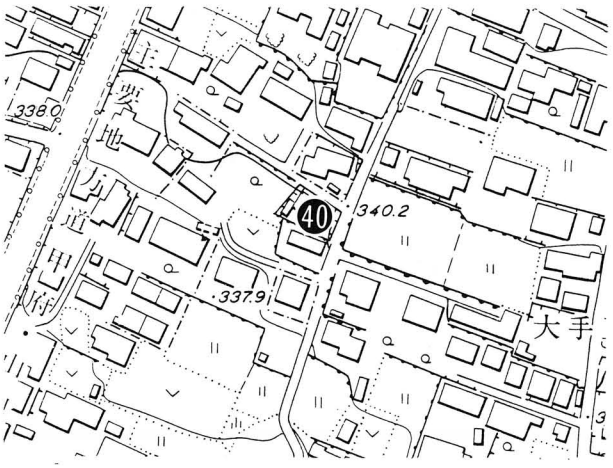
図1　第39次調査出土遺物

表1　第39次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	土鍋	(10.4)・－・－	口縁部～体部	ロクロナデ	金雲母・赤色粒子	良	褐灰色 10YR5/1	
2	中国製陶器	碗	(10.6)・－・－	口縁部～体部					明染付

武田氏館跡第40次調査



所　在　地　甲府市大手三丁目3685-3
調査原因　山本家住宅増築工事
調査面積　13.5㎡
調査期間　平成７年12月５日～８日
調査担当者　平塚洋一

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の南側約190ｍに位置し、標高約340ｍを測る。「古府中村絵図」（中沢泉氏所蔵）において武田氏重臣の真田弾正、馬場美濃守、高坂弾正等の家臣屋敷跡と記されている地域に位置する。第15次調査地点に隣接し、近隣で14・35・41次調査を行っている。

調査は、既存建物の南西部に約33×4.5ｍのトレンチを設定して調査を行った。

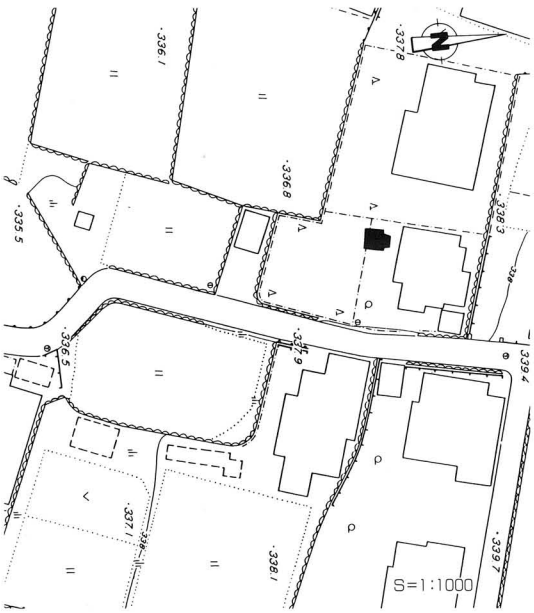
遺構・遺物

家臣屋敷等に関係する遺構の検出が期待されたが、遺構・遺物ともに検出できなかった。

ま　と　め

本地点は家臣屋敷の伝承地であるが、後世に耕地化または宅地化に伴う約１ｍの盛土・整地が行われた痕跡がみられる。盛土下をさらに30cmほど掘り下げて遺構確認を行ったが、伝承から予想される屋敷、または屋敷境の溝等を検出することはできなかった。

（望月秀和）



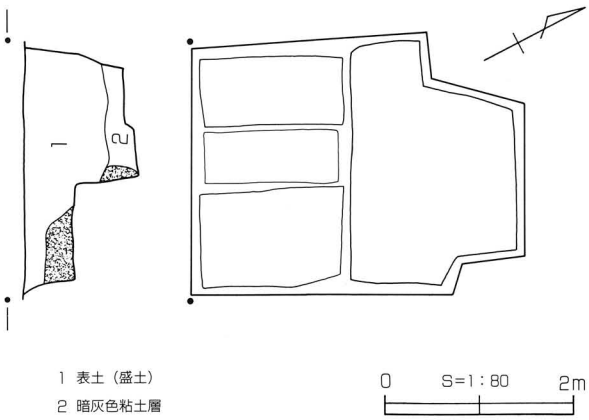
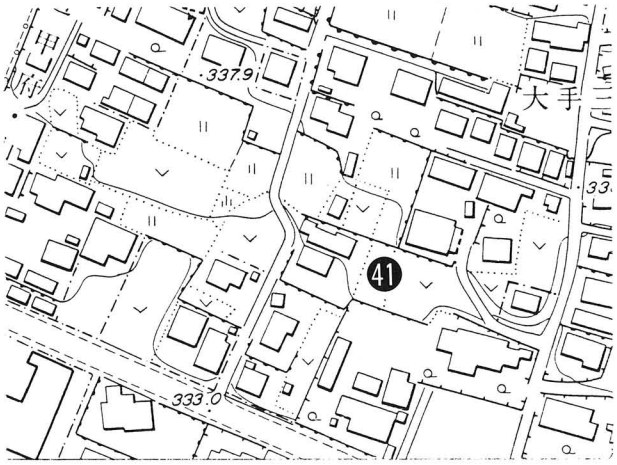


図１　トレンチ位置図・セクション、平面図

武田氏館跡第41次調査



所　在　地　甲府市大手二丁目3688
調査原因　神宮寺家住宅新築工事
調査面積　42㎡（40㎡＋2㎡）
調査期間　平成７年12月５日～８日
調査担当者　平塚洋一

調査の概要

調査区は武田氏館跡の南側、南傾する字大手下の中央付近に位置し、標高約336ｍを測る。本地点は調査時まで水田として耕地利用されていた場所であるが、「古府中村絵図」（中沢泉氏所蔵）では真田弾正、馬場美濃守、高坂弾正等の名前が記される家臣屋敷の伝承地にあたる。近隣では第14・30次調査が行われている。

調査地点北側住宅建設範囲の10.5×７ｍ対して、西半分に東西４ｍ×南北６ｍ、これに接する東半分に２×５ｍ、調査地点南側に位置する進入路部分に１×２ｍのトレンチを設定した。層序確認のため、住宅建設範囲の一部を地表から約１ｍの深掘りを行った。

層　　序

進入路部分では耕作土層下に礫を多量に含む層がみられ、礫を含む暗褐色土層となる。一方、住宅建設範囲では地表下約30㎝の耕作土層直下で、砂礫を含む非常に堅くしまった地山層となり、耕地化の際に南傾する地山面を掘削して整地した状況が窺える。

遺構・遺物

両トレンチともに遺構は確認されなかった。遺物は、進入路部分からは流れ込みによって混入したと推測される縄文土器片、住宅建設範囲からは現代の陶器片などを検出した。いずれも小片のため、ここでは図化しなかった。

ま　と　め

調査の結果、本地点は耕地化に伴う整地によって地山層まで掘削されており、家臣屋敷の伝承を示唆する遺構を確認することはできなかった。また、調査地点北側の石積や遺物が検出されなかったことから、本地点は切り土による整地で大量の土砂が移動されている可能性が考えられる。　（望月秀和）

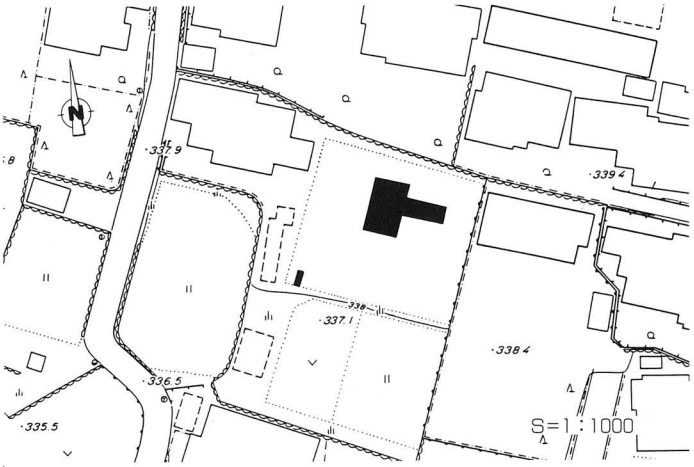


図１　トレンチ位置図

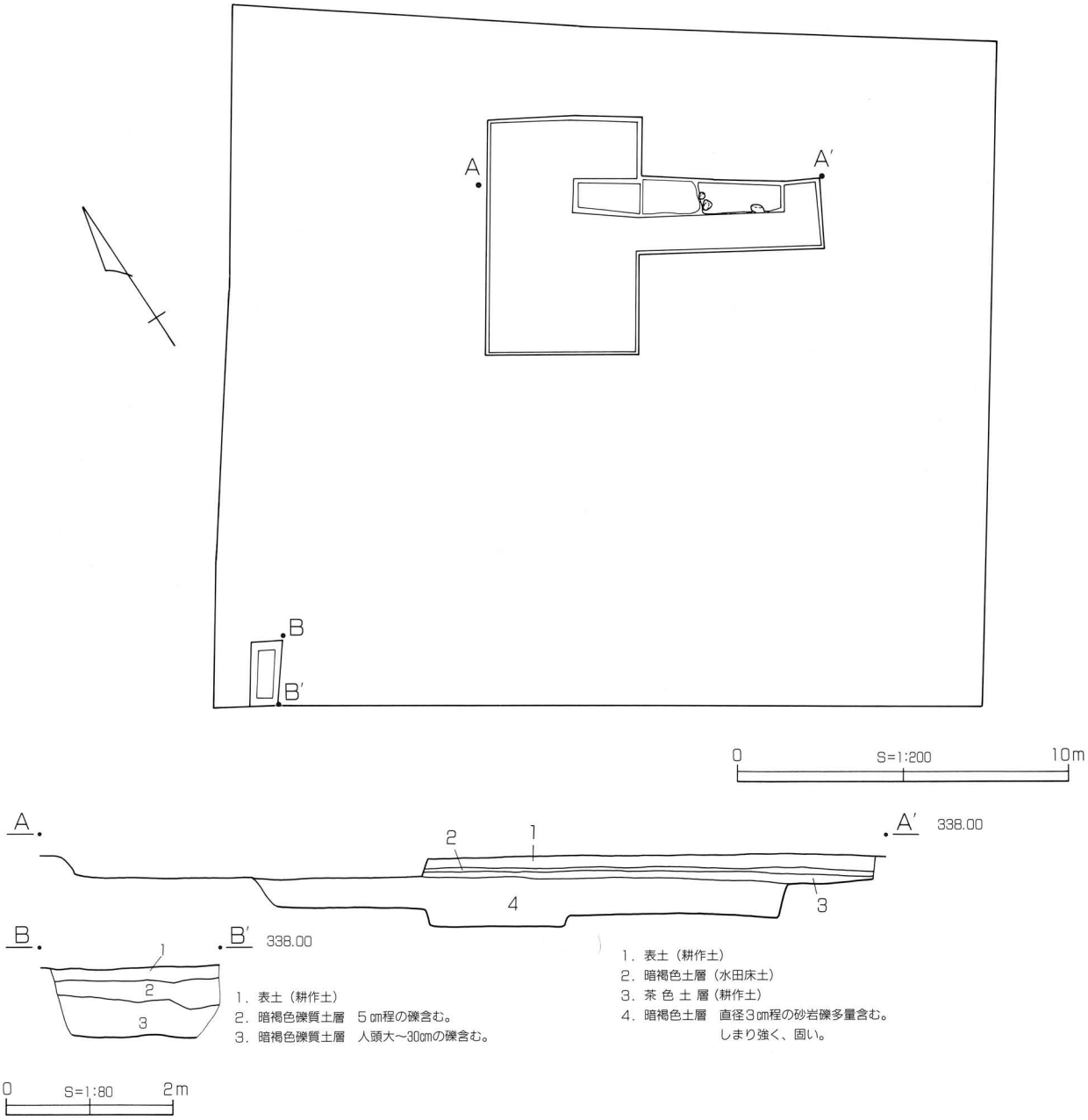
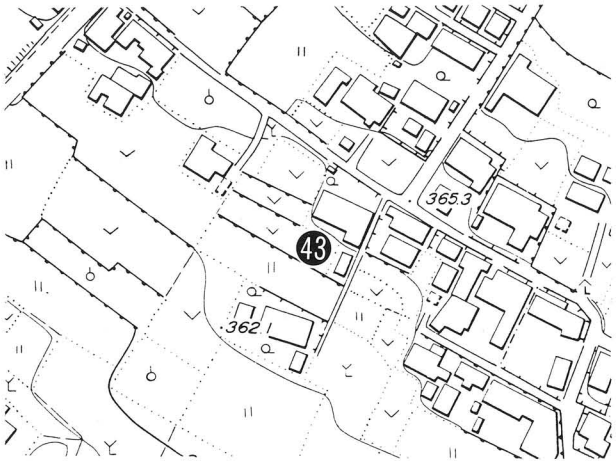


写真1　北トレンチセクション

写真2　南トレンチセクション

武田氏館跡第43次調査



所　在　地　甲府市古府中町2727
調査原因　渡辺家駐車場・
　　志村家住宅新築工事
調査面積　48㎡
調査期間　平成７年12月11日～21日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査地点は武田氏館跡の北側約200ｍ、標高約363ｍに位置する。本地点は武田逍遙軒信綱屋敷の伝承地に東接する。字名は逍軒屋敷であり、現在は道軒屋敷とも表記される。本地点北のクランク状の路や、東接する館方向に延びる路は「古府中村絵図」(中沢泉氏所蔵)にも示されおり、昔ながらの地割が窺える。本地点南は緩斜面を利用して耕地が形成され、これに伴う用水路は無名曲輪と御隠居曲輪を画する南北方向の堀跡へ注いでいる。また、用水路の護岸石組みには五輪塔や石祠の屋根等が用いられており、屋敷地等の廃絶後に耕地化した状況が窺える。周辺では第16次、第18次調査が行われている。

調査は敷地の南側、東接する道路より約７ｍに位置する住宅建築範囲に、５×８ｍのグリッドと、敷地の北側に位置する駐車場造成地に２×２ｍのトレンチを２ヶ所設定した。

遺　　構

駐車場造成地のグリッドからは、遺構は検出されず、約１ｍで礫を含む地山層を確認した。住居建築範囲のグリッドからは、溝３条と石列が確認された。

１号溝　幅約40㎝、深さ約30㎝を測り、Ｎ－32°－Ｅに軸をもつ。側石を伴い、グリッド西側を縦断する。近世から近代にかけて使用した水路、または暗渠と推測される。東側の側石は大きさが不均等で部分的に欠落がみられるものの、西側の側石は東側より小さめの長径約30㎝の均等な石材が用いられており、再構築または転用による規格変化の形跡がみられる。覆土からは土馬や近世～近代の瓦等が出土した。

２号溝　Ｎ－47°－Ｅに軸をもち、幅約1.3ｍ、深さ約45㎝、長さ2.5ｍを測る。グリッド東側から検出された。中世に比定されるかわらけ・陶器片などが出土した３号溝と重複し、後世の方形の掘り込みに切られている。重複、または併設する遺構との関係等、詳細は不明であるが、溝底面に砂質の堆積がみられ、流水していた可能性が考えられる。

３号溝　Ｎ－48°－Ｗに軸をもち、幅約60㎝、長さ１ｍを測る。２号溝と中央部の落ち込みの間で検出した。底面で砂質の堆積がみられたが、遺物は出土せず、重複する２号溝との関係や時期などの詳細については不明である。

石　列　Ｎ－45°－Ｅに軸をもつ。長径約25㎝の自然石が約2.7ｍに渡って２号溝と平行するものの欠落が多く、一部のみ残存しているため、性格や時代、２号溝との関

連・重複関係等、詳細について明らかにできなかった。

その他、グリッド西側に方形に掘り込まれた土坑と、これに重複する溝が西側壁面で確認された。重複関係については溝が土坑を切っていたものと思われるが、胎土がはっきりせず、性格・年代等詳細を明らかにすることはできなかった。土坑は底面に粘土質の堆積が確認され、調査時の所見では、底面に砂質の堆積がみられた2号溝と一体の遺構であり、庭園に伴う水利遺構の一部になる可能性がある。グリッド中央部の落ち込みは、調査範囲外で立ち上がり、溝となる可能性が推測できる。遺物は中世に比定されるかわらけ・陶器片等が自然石下部より出土しており、溝廃絶段階で伴に廃棄され、埋め立てたものと考えられる。

遺　　物

遺物駐車場造成地のトレンチでは、かわらけが数点検出されたが、いずれも小片のため、ここでは図化しなかった。

住居建設範囲の調査区からは、かわらけ、土馬、陶器、擂鉢、甕、青磁、白磁、金属製品、古銭（寛永通宝）等、主に16世紀代と近世の遺物が検出された。かわらけは、関東系で一般的に主流であったロクロ成形技法による1～5と、関西系の手づくね成形技法による6が出土している。6は外面に手づくね成形痕はみられるものの、はっきりとした指頭痕はなく、底部は工具で軽くナデ調整され、口縁部～内面にかけても布や皮革によるナデ調整が施されている。とくに、口縁部内側と見込み部は強いナデが入り、くぼみがみられる。

7は香炉型土器片であり、底部は回転糸切痕を残したまま脚を付けている。9は土馬で、頭部と脚部は欠落するが、タテガミと鞍が表現されている。10は二次被熱により陶器化したかわらけである。11・12は灰釉陶器で、11は付け高台で大窯第2段階、12は時期の詳細まで明らかにできなかった。13・14は瀬戸美濃擂鉢で、内外面に鉄釉が施される。13は古瀬戸後Ⅳ期新段階にあたる。15は天目茶碗の高台部分で大窯第3段階である。16は青磁香炉の体部片で中国龍泉窯産とみられる。17は白磁の端反碗である。18は近世～近代の鎌で腐蝕が著しい。19・20は煙管である。他、釘も出土しているが、腐蝕が著しいため図化しなかった。

ま　と　め

調査区から出土した手づくね成形によるかわらけは、平安京近郊の土器生産集団が有した技法でつくられ、主に京を中心に畿内で流通していたもので、都との関係を示唆するといえる。これまでに館跡主郭部から2点出土しているが、主郭部以外の武田氏城下町遺跡からの出土例はなく、希少品であって上級家臣などが使用していた可能性が窺える。また、庭園等の水利遺構の存在が推測されることから、本地点が家臣屋敷の一角であった可能性が高い。

（望月秀和）

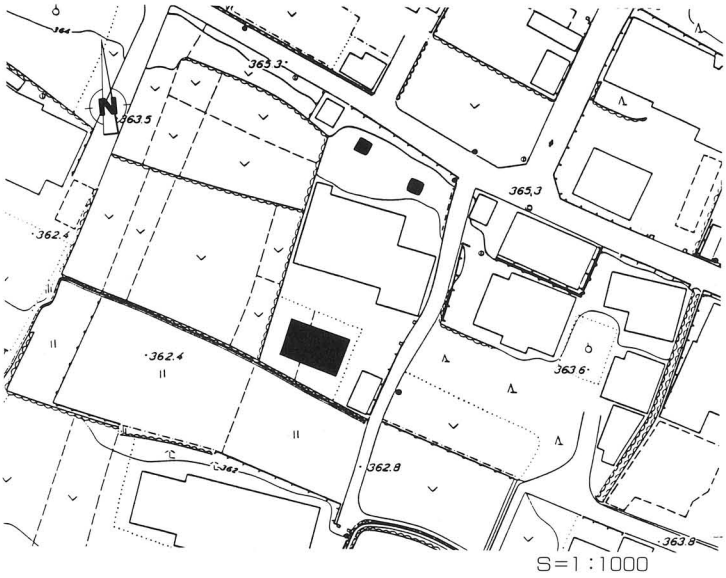
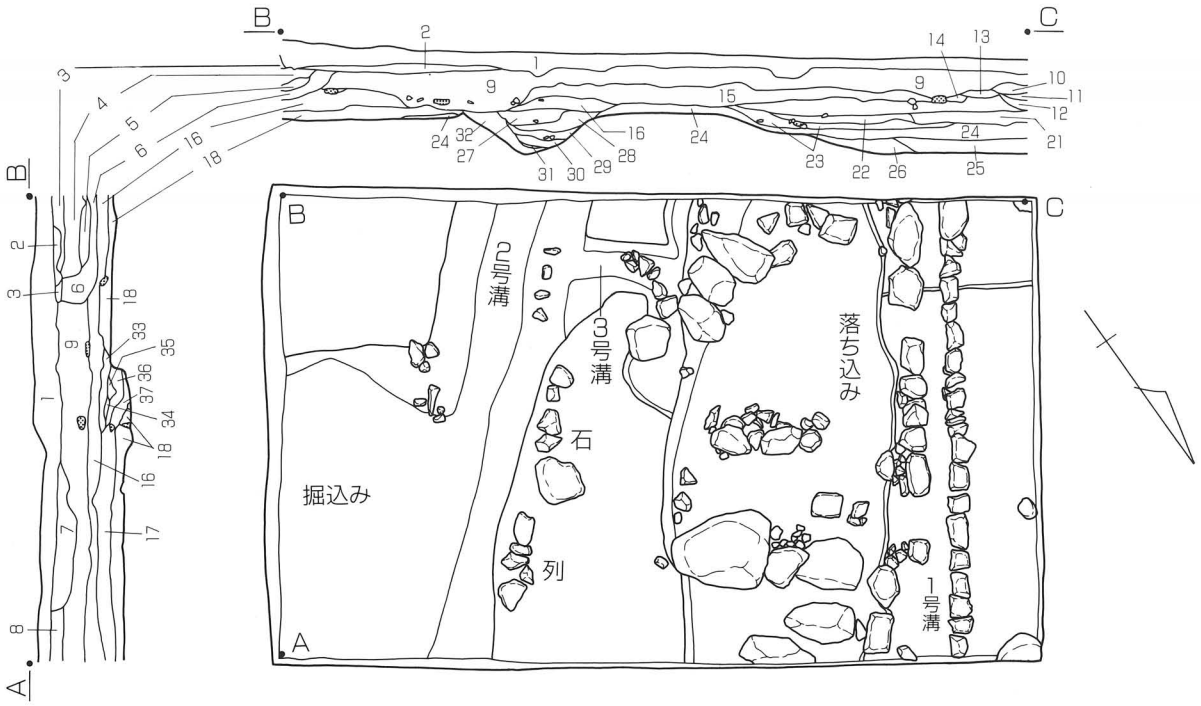
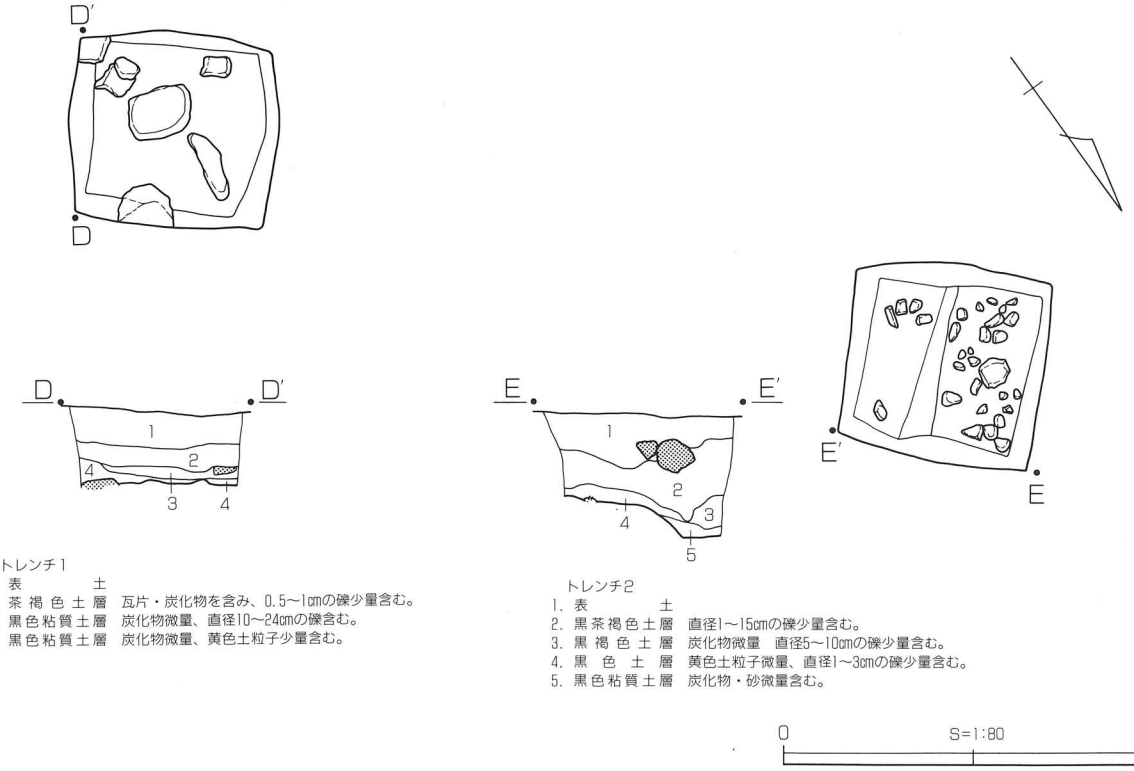


図1　グリッド・トレンチ位置図



1. 表　　土
2. 黒 褐 色 土 層　炭化物少量含む。
3. 明茶黄褐色土層　炭化物・焼土少量含む。
4. 灰赤褐色土層　焼土・瓦片少量含む。
5. 黒 褐 色 土 層　炭化物多量含む。
6. 暗赤褐色土層　桟瓦片少量、焼土多量含む。
7. 黒 褐 色 土 層　直径1～2cmの礫少量、炭化物多量含む。
8. 茶 褐 色 土 層　炭化物・直径1cm程の礫少量含む。
9. 黒 褐 色 土 層　直径0.5～3cmの礫少量含む。
10. 暗黒灰褐色土層　炭化物微量含む。
11. 暗黒灰褐色土層　10層に比べ、炭化物をやや多く含む。
12. 暗黒茶褐色土層　炭化物微量、直径0.5～1cmの礫少量含む。
13. 黒 灰 色 土 層　炭化物微量含む。
14. 黒 褐 色 土 層　直径1～2cmの礫多量含む。
15. 黒 褐 色 土 層　直径0.3～3cmの礫少量含む。
16. 明茶褐色土層　炭化物微量、直径0.3～1cmの礫少量含む。
17. 黒灰色粘土層　炭化物微量含む。
18. 黄黒褐色土層　黄色土粒子含む。
19. 暗黒灰褐色土層　炭化物微量、直径7～10cmの礫少量含む。
20. 黒茶褐色土層　炭化物微量、黄褐色土粒子少量含む。
21. 茶 褐 色 土 層　炭化物微量、直径1～4cmの礫少量含む。
22. 黒 褐 色 土 層　炭化物・黄褐色土粒子微量、直径1～3cmの礫少量含む。
23. 茶 褐 色 土 層　炭化物微量含む。
24. 暗茶褐色土層
25. 黒 褐 色 土 層
26. 黄 黒 色 土 層　黄色土ブロック多量含む。
27. 黒 褐 色 砂 質 層　炭化物微量含む。
28. 茶 黒 褐 色 土 層　炭化物微量含む。
29. 黒茶褐色砂礫層　炭化物微量含む。
30. 暗 褐 色 砂 礫 層
31. 黄 褐 色 砂 層
32. 灰褐色粘質土層　砂少量含む。
33. 暗黒茶褐色土層　炭化物微量含む。
34. 灰黒茶褐色砂質層
35. 灰 黄 茶 砂 層
36. 暗灰色粘土層　炭化物微量含む。
37. 黒灰色粘土層　炭化物微量含む。

図2　住宅建築部遺構平面図・セクション



トレンチ1
1. 表　　土
2. 茶 褐 色 土 層　瓦片・炭化物を含み、0.5～1cmの礫少量含む。
3. 黒色粘質土層　炭化物微量、直径10～24cmの礫含む。
4. 黒色粘質土層　炭化物微量、黄色土粒子少量含む。

トレンチ2
1. 表　　土
2. 黒茶褐色土層　直径1～15cmの礫少量含む。
3. 黒 褐 色 土 層　炭化物微量　直径5～10cmの礫少量含む。
4. 黒　色　土　層　黄色土粒子微量、直径1～3cmの礫少量含む。
5. 黒色粘質土層　炭化物・砂微量含む。

図3　駐車場造成部、平面図・セクション

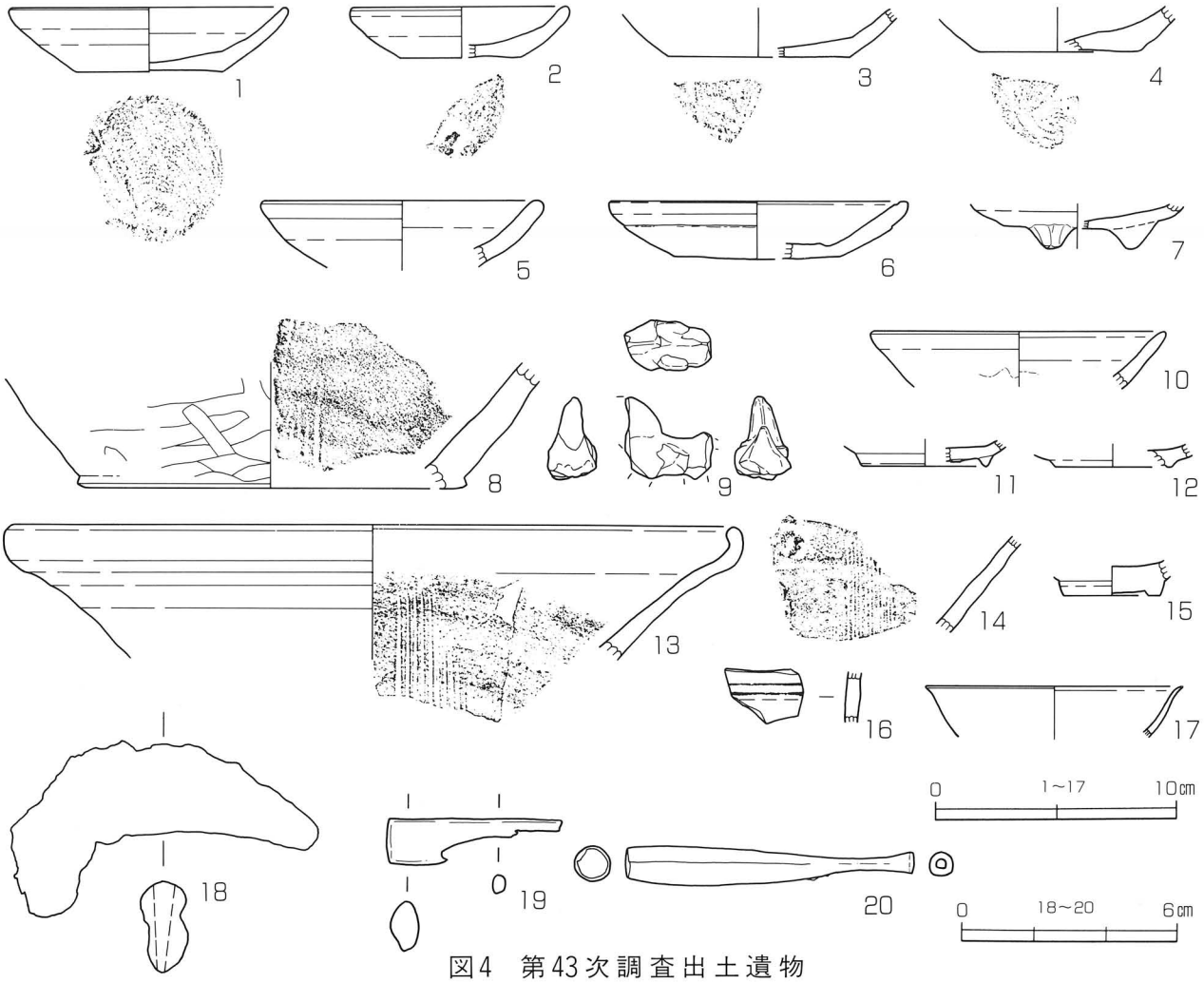


図4　第43次調査出土遺物

表1　第43次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	11.6・2.7・6.0	口縁部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	石英・金雲母	良	にぶい黄橙 10YR7/3	
2	土器	かわらけ	(9.1)・2.1・(5.0)	口縁部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	石英・金雲母	良	浅黄橙 10YR8/4	
3	土器	かわらけ	－・－・(7.4)	体部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	金雲母・赤色粒子	良	灰褐色 10YR4/2	
4	土器	かわらけ	－・－・(6.0)	体部～底部	ロクロナデ 回転糸切痕	金雲母・長石	良	内/橙 2.5YR6/6 外/橙 7.5YR7/6	
5	土器	かわらけ	(11.6)・－・－	口縁部～体部	ロクロナデ	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR6/4	
6	土器	かわらけ	(12.3)・2.4・(6.8)	口縁部～底部	手づくね	石英・金雲母	良	浅黄橙 7.5YR8/4	
7	土器	香炉型土器	－・－・(6.2)	底部	ロクロナデ 回転糸切痕	石英・長石・金雲母	良	橙 5YR7/6	
8	土器	擂鉢	－・－・(16.0)	底部	ナデ 条痕	石英・長石・金雲母	良	橙 5YR7/6	
9	土器	土馬	－・－・－	胴体	粘土貼り付け	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR7/4	
10	土器	かわらけ	(12.2)・－・－	口縁部～体部	－	密　長石	良	二次被熱 自然釉	
11	陶器 瀬戸美濃	皿	－・－・(5.0)	底部	付け高台	やや粗	良	灰釉	大窯第2段階
12	陶器 瀬戸美濃	皿	－・－・(4.8)	底部	付け高台	やや密	良	灰釉	大窯
13	陶器 古瀬戸	擂鉢	(30.6)・－・－	口縁部～体部	条痕	やや粗　石英	良	内外面サビ釉	古瀬戸後IV期新
14	陶器	擂鉢	－・－・－	体部	条痕	密　長石	良	内外面サビ釉	
15	陶器	天目茶碗	－・－・－	底部	削り出し高台			内/鉄釉 外/無釉	
16	青磁	香炉片？				密	良		
17	白磁	端反皿	(10.6)・－・－	口縁部		密	良		
18	金属製品	鎌	長さ・幅1.0						
19	金属製品	煙管	長さ・幅・厚さ 4.9・1.3・0.8						
20	金属製品	煙管	長さ8.0・幅1.1						

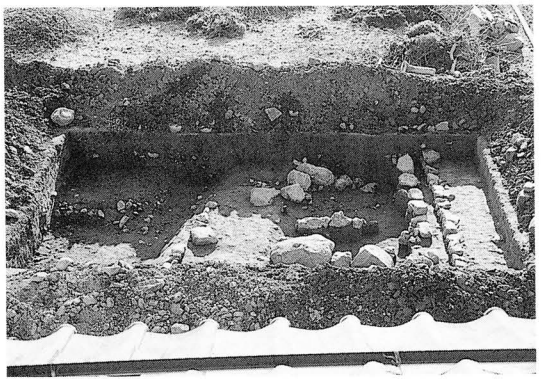


写真１　住宅建築部グリッド全景

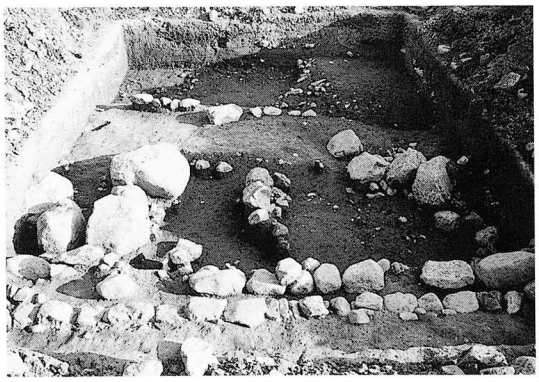


写真２　グリッド完掘状況(1)

写真３　グリッド完掘状況(2)

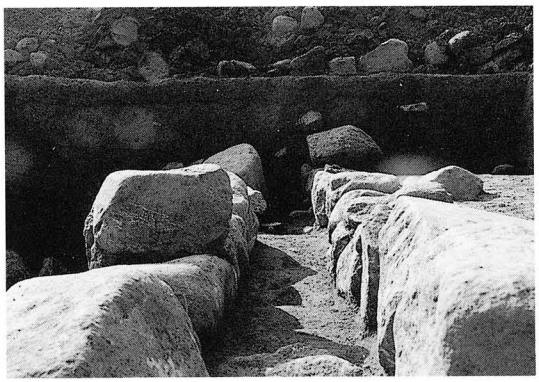


写真４　１　号　溝

写真５　駐車場造成部トレンチ１

写真６　駐車場造成部トレンチ２

武田氏館跡第44次調査

所　在　地　甲府市古府中町3567番地
調査原因　長田家住宅改築工事
調査面積　16㎡
調査期間　平成８年４月４日～４月15日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査地点は御隠居曲輪に道路を挟んで東接し、標高約359ｍを測る。北側約70ｍには第16次調査地点、道路を挟んで西側約25ｍには第18次調査地点が位置している。本地点は「古府中村絵図」(中沢泉氏所蔵)によると、横田備中守屋敷跡伝承地の南側にあたる。現在、周辺は水田や畑が残る住宅地となっている。

調査地点は武田氏館跡指定地内にあり、住宅の全面改築工事に伴い試掘調査が行われた。調査は、建物位置の中央部に幅２ｍ、東西８ｍのトレンチを設定し人力により掘り下げを行った。

遺　　構

基本土層は７層で構成される。第５層で遺物包含層となり、第６層は炭化物を多く含みピット13基が確認された。直径15～30㎝を測り、底部に石を据えたものもあるが、調査区が狭いため、建物跡の形状や規模を確認するまでには至らなかった。

遺　　物

遺物の多くは中世のかわらけ片であるが、擂鉢（８）・陶器（９）・古銭（10）も出土している。９はピット13から出土した完形の端反皿で、大窯第２段階に比定される。口縁部に炭化物の付着が見られる。

ま　と　め

調査地点は、横田氏屋敷跡伝承地に隣接することなどから、遺構の検出が予想された。調査の結果、溝とピットが確認され、出土遺物から中世の遺構と判断された。

（鈴木由香）

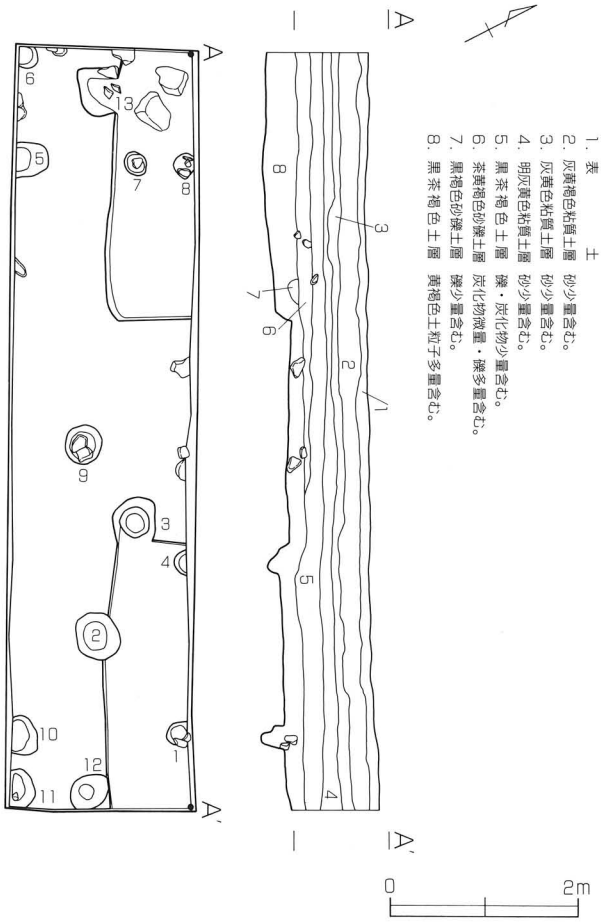


図１　平面図・北壁セクション

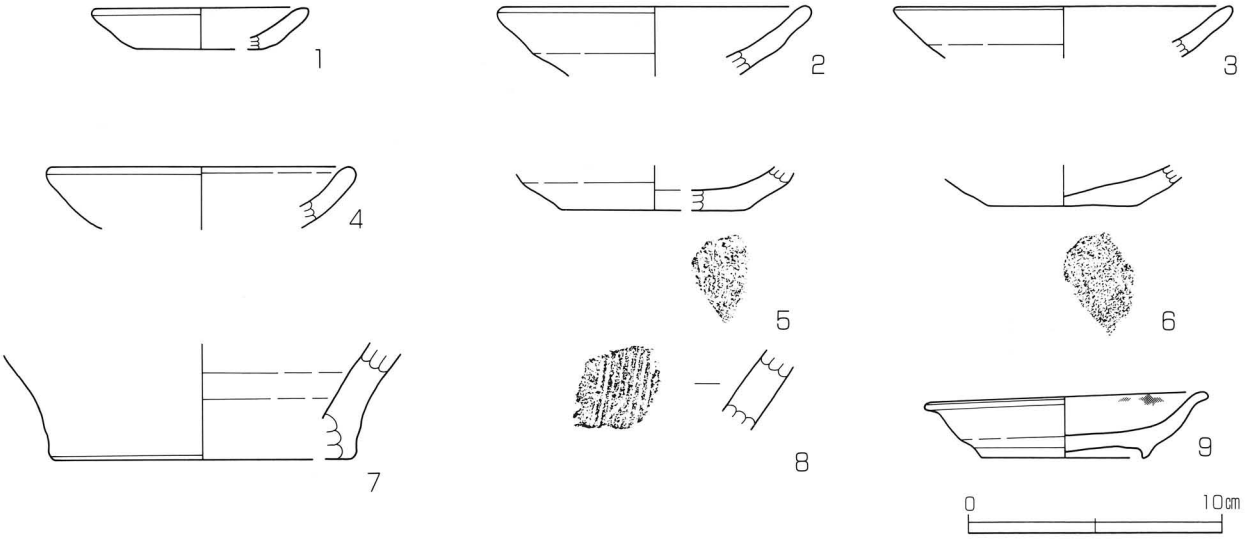


図2　第44次調査出土遺物

表1　第44次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	8.6・－・1.6	口縁部～底部	ロクロ成形	長石・金雲母	良	橙 7.5YR7/6	
2	土器	かわらけ	12.4・－・－	口縁部～体部	ロクロ成形	長石・金雲母	良	橙 7.5YR7/6	
3	土器	かわらけ	(13.0)・〈2.1〉・－	口縁部～体部	ロクロ成形	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR6/6	
4	土器	かわらけ	(12.0)・〈2.4〉・－	口縁部～体部	ロクロ成形	長石・金雲母	良	にぶい褐 7.5YR7/4	
5	土器	かわらけ	－・－・(7.8)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英	良	内/にぶい橙 7.5YR7/4 外/浅黄橙 7.5YR8/4	
6	土器	かわらけ	－・－・(6.0)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	にぶい橙 7.5YR7/4	
7	土器	不明	－・〈4.6〉・(12.0)	底部	ナデ成形	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR6/6	
8	土器	擂鉢	－・－・－	体部			良	にぶい褐 7.5YR5/3	
9	陶器	端反皿	10.8・2.4・6.6	完形	ロクロ成形		良	緑釉	

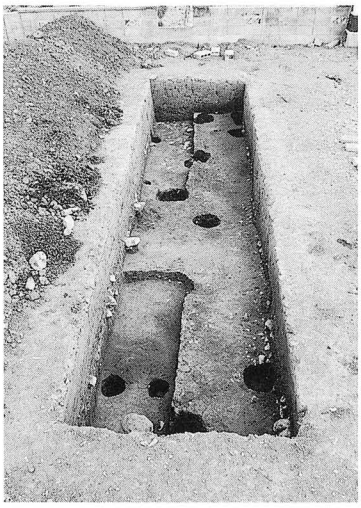
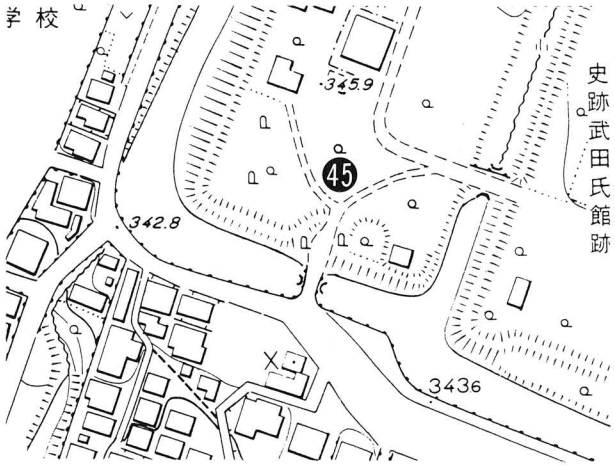


写真1　トレンチ全景

写真2　遺物出土状況

武田氏館跡第45次調査



所　在　地　甲府市古府中町2614
調査原因　武田神社トイレ改築工事
調査面積　1.9㎡
調査期間　平成８年９月26日～27日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査地点は西曲輪南側桝形虎口の北側に隣接し、標高約345ｍを測る。

武田神社境内における仮設トイレ排水管の設置に伴い、試掘調査が行われた。幅30～40㎝、長さ5.4ｍのトレンチを設定し、排水管を敷設する20～25㎝の深さまで人力により掘り下げた。

遺構・遺物

調査において遺構の存在は確認できず、中世に位置付けられるかわらけ片が数点出土したのみである。小片のため、図化できたものは１点のみである。

ま　と　め

西曲輪南側桝形虎口に隣接する場所であるが、遺構の存在は確認されず、遺物についてもかわらけ片が数点出土したのみであった。　（鈴木由香）

表１　第45次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(11.8)・〈2.4〉・－	口縁部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	にぶい黄橙 7.5YR7/4	

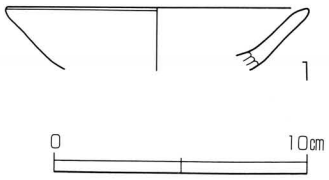


図１　第45次調査出土遺物

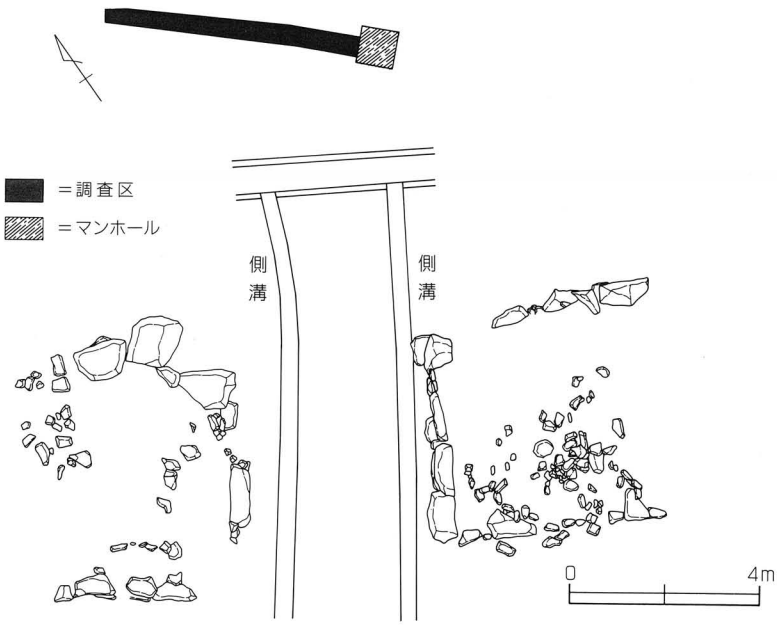
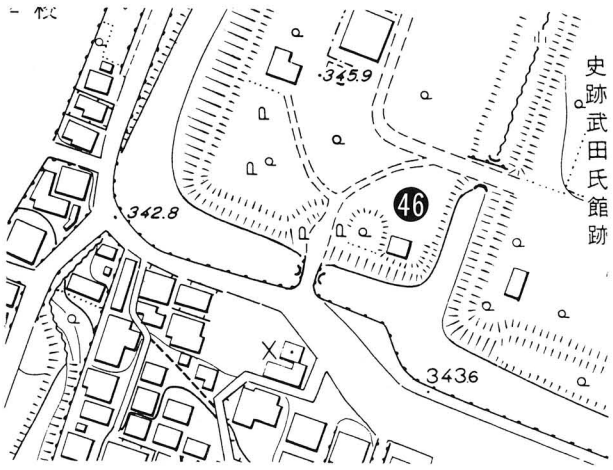


図２　トレンチ位置図

武田氏館跡第46次調査



所　在　地　甲府市古府中町2614
調査原因　武田神社トイレ改築工事
調査面積　35㎡
調査期間　平成８年10月７日～16日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査地点は西曲輪南東隅に位置し、標高約345ｍを測る。本地点の東側は笹堀を隔て主郭部、西側には桝形虎口の土塁が隣接する。

調査はトイレ全面改築工事に伴うもので、５×７ｍの範囲を表土下30～40cmまで重機により剝ぎ取り、その後人力により掘り下げた。

遺　　構

土層は10層から構成され、第７層で拳大から直径80cm程度の自然石が部分的に敷かれている状況が確認された。その中には、平坦面を有する礎石状の石も存在した。

遺　　物

出土遺物は、かわらけを主体に陶器が少量混入する程度で、小片のため図化できたものは７点と少ない。４は破片内面に溶融物が付着する。口縁部には指頭の痕跡があり、とりべとも考えられる。陶器では常滑と思われる甕の破片（６）や、大窯第２段階に比定される瀬戸美濃片（７）が出土している。

ま　と　め

調査により確認された自然石は、礎石を思わせる平坦面を持つものも確認されている。しかし、調査区域が非常に狭いため、礎石であるか確定するには至らなかった。

（鈴木由香）

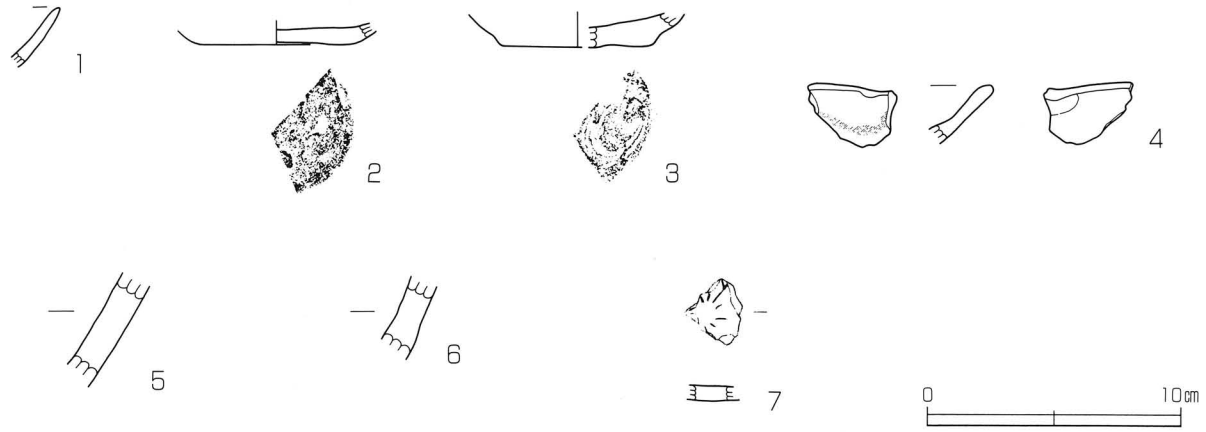


図１　第46次調査出土遺物

表１　第46次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

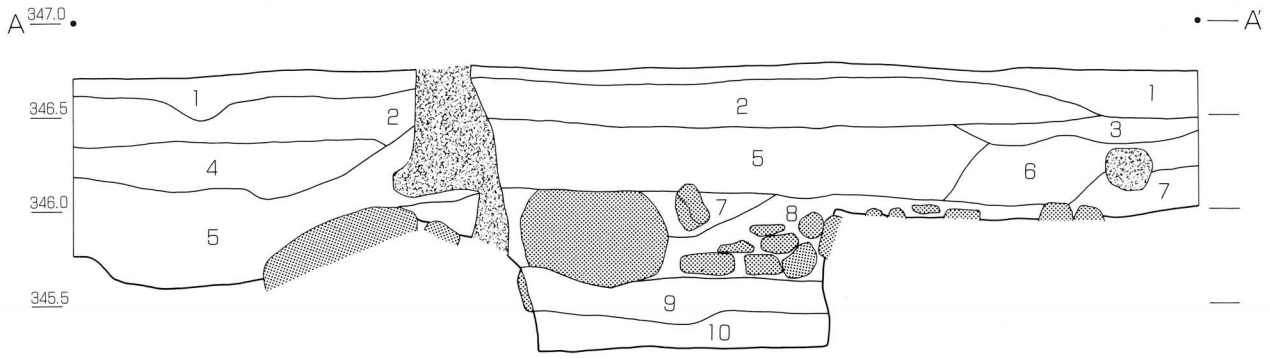
番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	－・－・－	口縁部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 7.5YR6/6	
2	土器	かわらけ	－・〈0.9〉・(6.0)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕		良	にぶい黄橙 10YR6/4	
3	土器	かわらけ	－・〈1.3〉・(6.0)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕		良	にぶい黄橙 10YR7/4	
4	土器	とりべ	－・〈2.2〉・－	口縁部	ロクロ成形	長石・石英	良	灰黄褐 10YR6/2	内面溶融物付着
5	陶器	甕	－・－・－	体部			良	－	常滑か？
6	陶器	甕 or 壺	－・－・－	体部			良	－	
7	陶器	皿？	－・－・－	底部			良	－	大窯第２段階

写真１　調査前風景

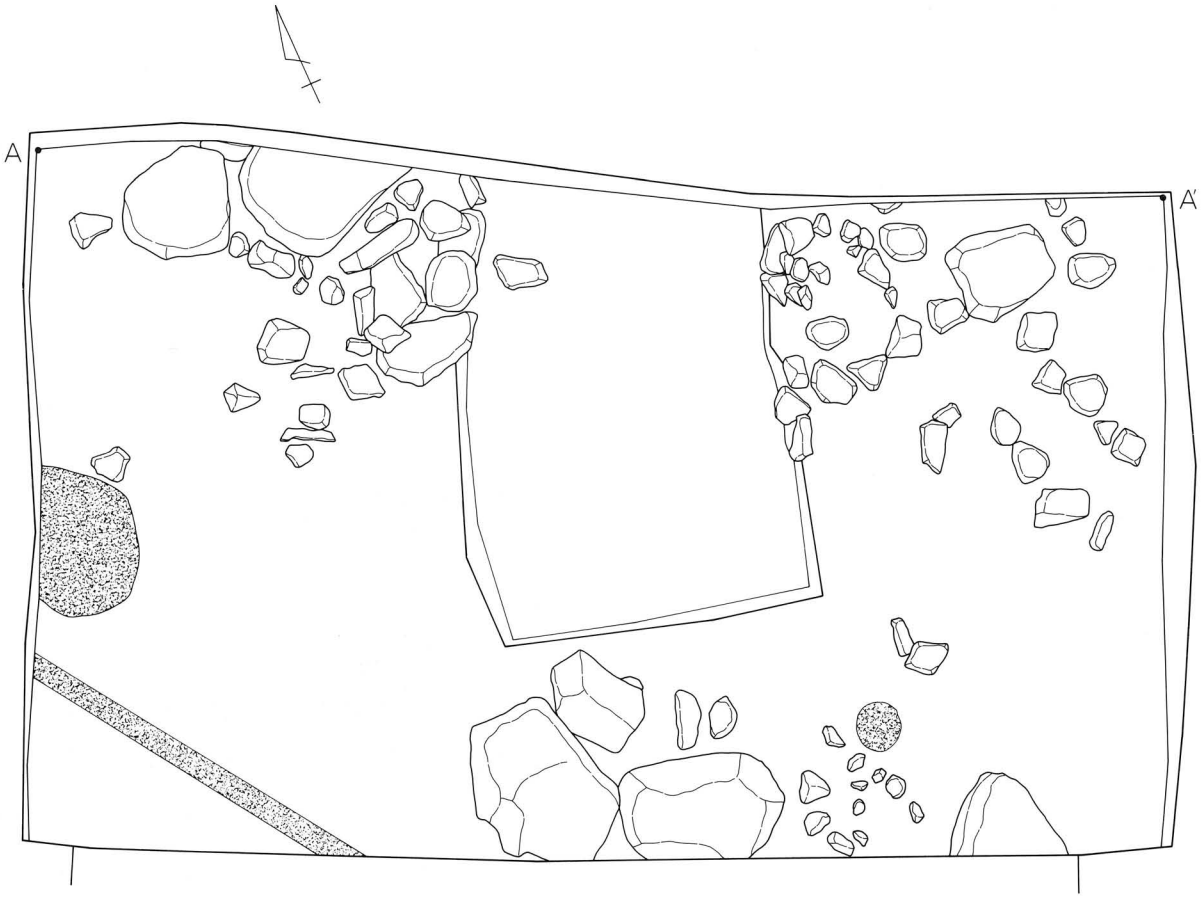
写真２　敷石検出状況

写真３　トレンチ全景

写真４　自然石検出状況



1. 表　　土
2. 黒褐色土層　5YR 3/2　炭化物・焼成粘土塊少量含む。しまり緩い。レンガ混入。
3. 2層と同じ。
4. 暗褐色土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子微量、直径1～10cmの礫少量含む。
5. 黒褐色土層　10YR 2/3　炭化物・焼土粒子微量、直径1～10cmの礫少量含む。（4層に比べ、やや少ない。）
6. 暗赤褐色土層　5YR 3/2　直径1～2cmの礫少量含む。しまり緩い。
7. 暗褐色土層　10YR 3/4　直径1～8cmの礫少量含む。しまり強い。
8. 集　石　層　直径10～30cmの楕円形礫が堆積。
9. 褐色土層　10YR 4/4　炭化物・焼土粒子、直径0.5～2cmの砂礫少量含む。しまり強い。
10. 黒褐色土層　10YR 3/1　炭化物・焼土粒子少量含む。9層に比べ砂礫若干多く含む。しまり強い。

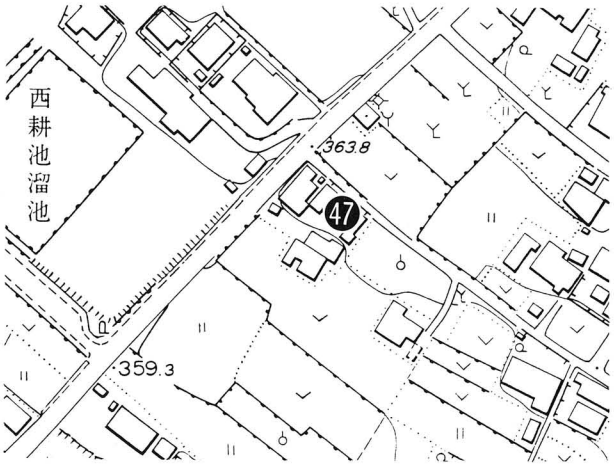


＊平面図は一部の石を除去した段階

0　1m

図2　遺構平面図・北壁セクション

武田氏館跡第47次調査



所　在　地　甲府市古府中町2619
調査原因　保坂家住宅改築工事
調査面積　18m²
調査期間　平成８年９月２日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査地点は味噌曲輪の北側約250ｍに位置し、標高約364ｍを測る。第25次調査地点に隣接し、西側には戦国期に設定された「もがり（虎落）小路」が南走する。一帯の小字は「逍軒屋敷」で、信玄実弟の武田逍遙軒信綱屋敷跡と伝えられる。南西側には「土屋敷」の小字も残り、調査地一帯が家臣屋敷地であったことを傍証している。

調査は、住宅解体の後に幅1.4～２ｍ、東西約10ｍの範囲を重機によって掘り下げ、人力により精査を行った。

遺構・遺物

基本土層は３層から構成され、地表下55cmで地山層となる。調査区北壁際に、東西４ｍに渡り石積が検出された。径25～30cmの自然石が２段積まれており、石積の前面に杭が１本確認された。落とし積の技法が見られ、近世から近代の石積と考えられる。遺物は未検出であった。

ま　と　め

本地点は、武田逍遙軒信綱の屋敷跡伝承地であり、遺構の検出を予期したが、調査においては検出に至らなかった。

（鈴木由香）

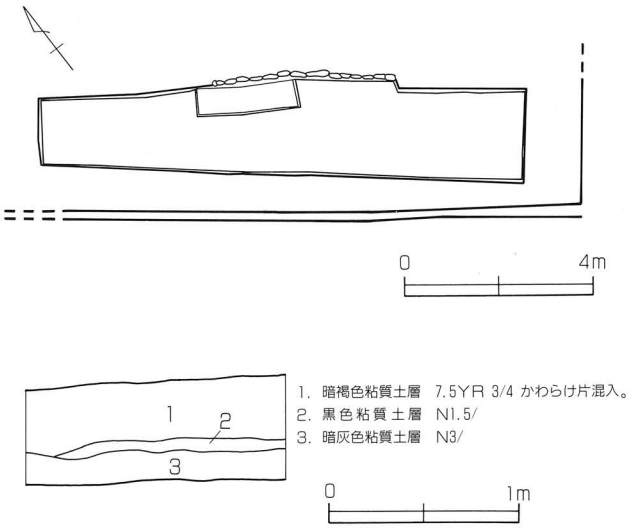
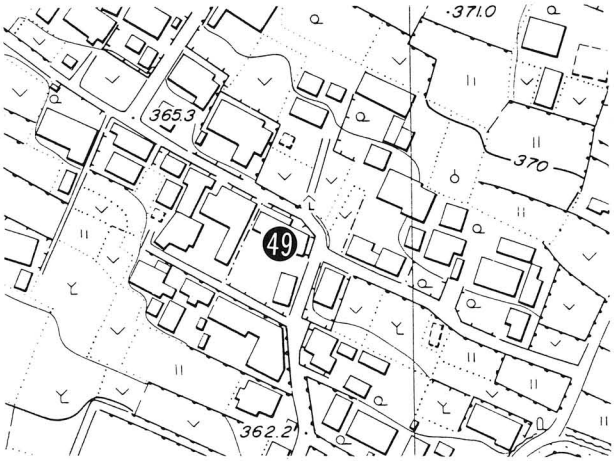


図１　トレンチ位置・基本土層図

写真１　石積検出状況

武田氏館跡第49次調査



所　在　地　甲府市古府中町2744
調査原因　谷川家住宅改築工事
調査面積　62㎡
調査期間　平成９年６月12日～23日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査地点は、武田氏館跡の北側約200ｍに位置し、標高約365ｍを測る。史跡範囲の北端に位置し、第16・34次調査地点に隣接する。本地点は小字が「逍軒屋敷」であり、武田氏関係の家臣屋敷地であったと推定される。調査区を囲むように入り組む街路は「古府中村絵図」（中沢氏所蔵）にも見え、武田氏時代の地割の名残と考えられる。周辺は水田や田畑が残り、甲府盆地を一望できる暖傾斜地となっている。

調査は家屋と土蔵を撤去した後に、南北５ｍ、東西13ｍの範囲を重機により15～30㎝掘り下げ、その後人力による精査を行った。溝と掘立柱跡が検出されたため、さらにトレンチを拡張して調査を行った。

遺　　構

調査の結果、井戸１基、土坑１基、溝２条、ピット51基が確認された。

井　戸　　径2.6ｍ、深さ約1.3ｍを測り、かわらけ・擂鉢・古銭（皇宋通宝）等が出土した。埋める際に入れたと思われる竹片も確認している。

土　坑　　長径１ｍ、深さ約55㎝を測り、内部には直径30㎝から人頭大の石が塡充されている。遺物は未検出であった。

溝　　１号溝はＮ－50°－Ｅに軸を持つ。幅1.2ｍ、深さ30㎝を測り、溝内には礫質土が堆積し、かわらけ片が１点出土した。
２号溝はＮ－35°－Ｗに軸を持つ。北側に向かって落ち込んでおり、溝の立ち上がりが調査区外に続いていると考えられる。幅1.3ｍ、深さ約40㎝を測り、粘質土が堆積していた。溝内から、かわらけ片・緑釉陶器片などが出土した。

ピット　　直径20～30㎝、深さ10～50㎝を測り、ピット１～５・７からは、かわらけ片が出土した。底部に石を有するものもあるが、調査区が狭いため建物跡の形状は不明である。

遺　　物

中世から近代に比定される、かわらけ（１～３・５）・土器（６）・陶器（７～10）・磁器（11～15）・碁石（16・17）・古銭（18・19）が出土した。４・７は瀬戸美濃系擂鉢である。８は灯明油受け皿である。内面は灰釉、外面は鉄釉を施した後拭取りしたものである。９は瀬戸美濃系丸皿の底部である。10は瀬戸美濃系陶器であるが、器種は不明である。外面

に鉄釉を施している。11は近代の汽車土瓶である。外面の「松」字から、松川または松本で売られていたものと推定される。12は江戸染付の小坏で19世紀に比定される。13は碗である。瀬戸の所産であり19世紀に比定される。14は皿の底部である。底部に「仲」の染付文字が見られる。15は肥前所産の皿である。見込み部には手描「五弁花文」が施されている。

ま と め

調査区は「逍軒屋敷」の小字であることや、周囲にクランク状の街路が見られることから、武田氏関係の家臣屋敷地であった可能性が十分に考えられる場所である。調査で確認された井戸・土坑・溝・ピットは、出土遺物から中世に位置付けられる。調査範囲が限られており、建物跡の全容把握や1号溝と2号溝の新旧関係など、詳細を明らかにすることはできなかった。

出土遺物の中には近世や近代のものが混入していたが、家屋取り壊しの際に混入したものであろう。

（鈴木由香）

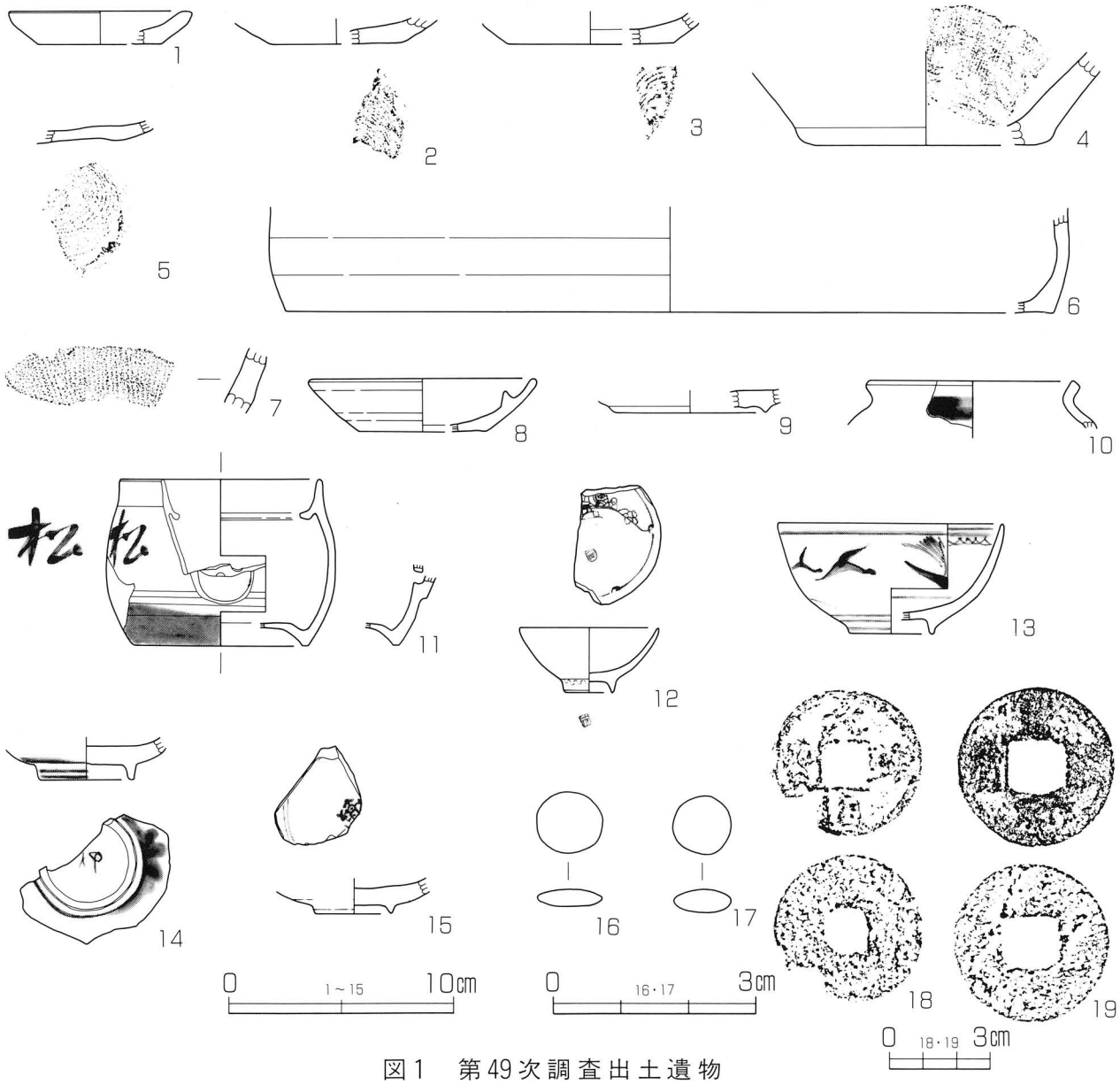


図1　第49次調査出土遺物

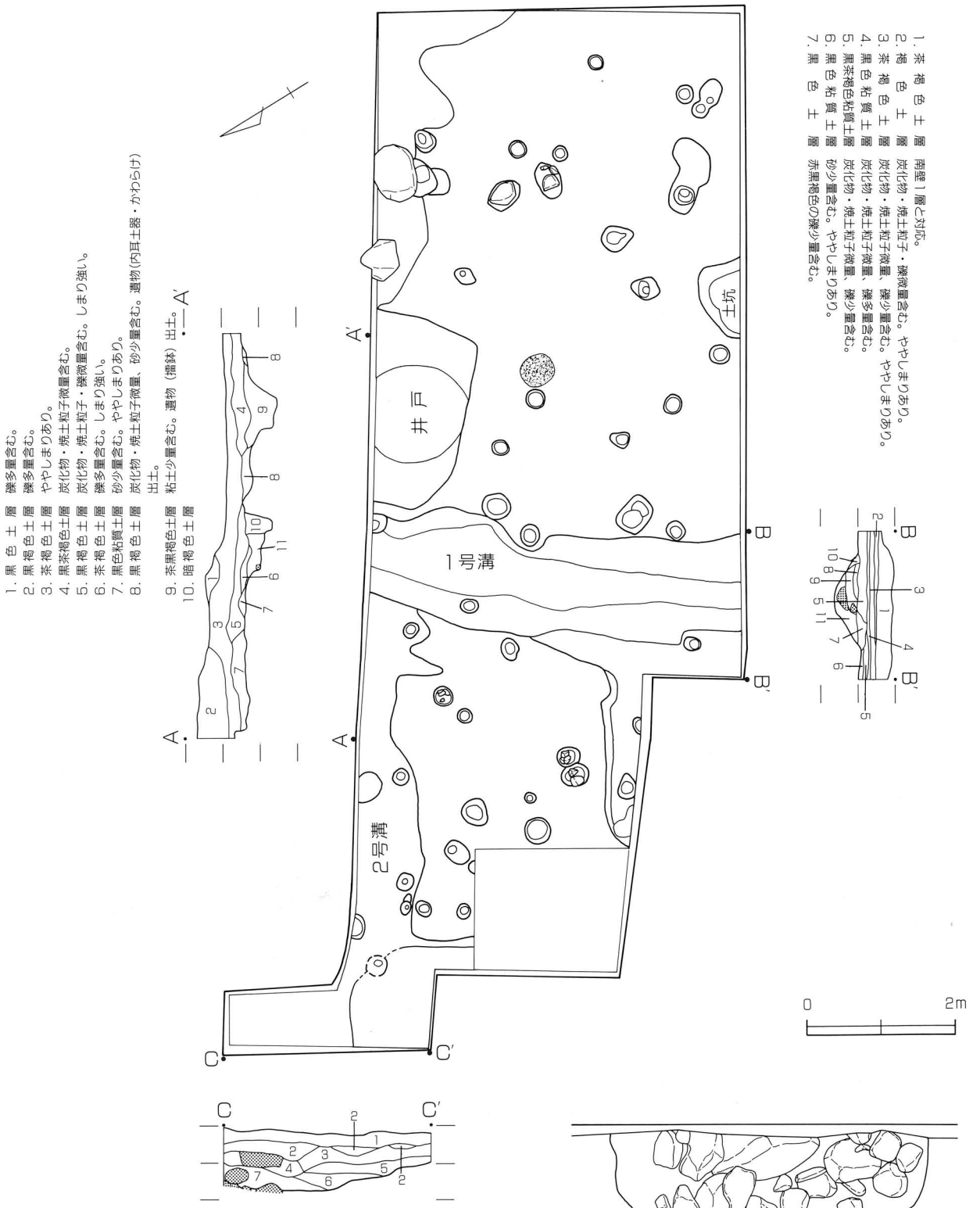
表１　第49次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(8.2)・1.5・(5.4)	口縁部～底部	ロクロ成形	長石・石英・金雲母	良	にぶい黄橙 10YR7/3	
2	土器	かわらけ	－・－・(5.6)	底部	ロクロ成形	長石・石英・金雲母	良	内/にぶい橙 7.5YR7/4 外/灰白 7.5YR8/1	
3	土器	かわらけ	－・－・(7.4)	底部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR6/6	
4	陶器	擂鉢	－・－・(10.0)	底部		やや密	良		
5	土器	かわらけ	－・－・－	底部	ロクロ成形	雲母・金雲母	良	にぶい黄橙 10YR7/4	
6	土器	土鍋	－・－・(34.2)	底部	不明	長石・金雲母・赤色粒子	良	内/にぶい橙 7.5YR5/4 外/黒 10YR1.7/	外面炭化物付着
7	陶器	擂鉢	－・－・－	体部		密	良		被熱
8	陶器	灯明皿	－・－・(5.6)	口縁部～底部	外面鉄釉拭取り	密	良		
9	陶器	丸皿	－・－・(6.6)	底部		密	良		輪ドチ痕
10	陶器	不明	(5.6)・－・－	口縁部	鉄釉	密	良		
11	陶器	土瓶	(8.3)・7.3・(7.8)	口縁部～底部		密	良		「松川」or「松本」の文字
12	磁器	小坏	(6.2)・(2.9)・(2.2)	口縁部～底部		緻密	良		江戸染付
13	磁器	碗	10.0・4.9・3.8	口縁部～底部		緻密	良		瀬戸19世紀
14	磁器	碗	－・－・4.2	底部		緻密	良		底部「仲」の文字
15	磁器	碗	－・－・(3.4)	底部		緻密	良		見込み手描き五弁花文
16	土製品	碁石	直径19.9・厚さ5.65(mm)	完形		密	良		
17	土製品	碁石	直径17.45・厚さ7.05(mm)	完形		密	良		
18	古銭	元祐通宝	直径22.5・穿径6.1(mm)						
19	古銭	皇宋通宝	直径24.3・穿径8.3						

写真１　調査区全景

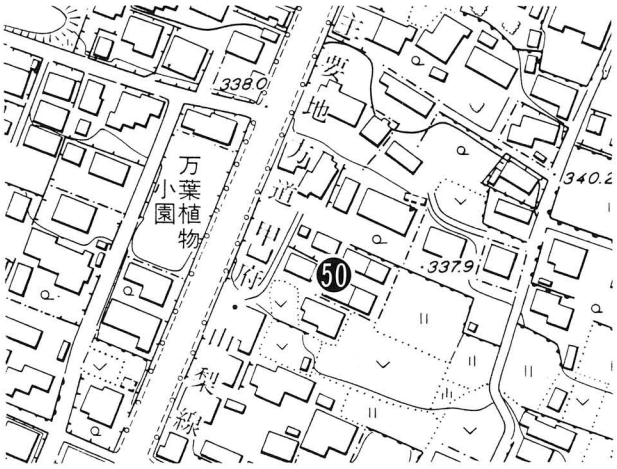
写真２　１号溝検出状況



1. 茶 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子少量、砂多量含む。
2. 褐 色 土 層　炭化物少量含む。
3. 黄褐色礫質土層　炭化物微量、花崗岩・砂岩多量含む。
4. 黒褐色砂質土層　礫少量含む。
5. 茶 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子微量、礫少量含む。しまり強い。
6. 暗 褐 色 土 層　砂礫微量、炭化物・焼土粒子多量含む。しまり強い。
7. 茶褐色礫質土層　しまり強い。
8. 茶黄褐色土層　炭化物・焼土粒子微量、砂少量含む。しまり強い。
9. 茶黄褐色土層　焼土粒子微量含む。しまり強い。
10. 黒 褐 色 土 層　焼土粒子微量、砂少量含む。しまり強い。
11. 黒色礫質土層　礫多量含む。しまり強い。

図2　平面図、北壁・南壁セクション

武田氏館跡第50次調査



所　在　地　甲府市大手三丁目3675-5
調査原因　日原家住宅増築工事
調査面積　23.5㎡
調査期間　平成９年９月１日～３日
調査担当者　志村憲一・伊藤正彦

調査の概要

調査地点は、武田氏館跡の南側約150ｍに位置し、標高約337ｍを測る。史跡範囲内の南端に位置し、第35・38次調査地点と隣接している。本地点は、近世の絵図によると馬場美濃守信春の屋敷跡と伝えられる場所である。

調査は、調査区の中央部に５ｍ四方のトレンチを設定し、遺物包含層までは重機による掘り下げを行った。その後は人力により精査を行いつつ、地山まで掘り下げた。

遺構・遺物

土層は12層から構成される。地表下約50cmの暗褐色土層では直径30～50cmの礫石が調査区東側に集中し、まばらに敷かれている状況が確認された。また、ここからは中世に位置付けられるかわらけ片数点が出土したが、小片のため図化できたものは１点のみである。

ま　と　め

馬場美濃守信春の屋敷跡と伝えられる地点であることから、遺構の検出が期待されたが、調査の結果、まばらに敷かれた石を確認したのみで、出土遺物もかわらけ片が数点出土したのみであった。

（鈴木由香）

表１　第50次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

番号	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(10.2)・〈1.5〉・－	口縁部	ロクロ成形	長石・金雲母	良	橙 5YR7/6	

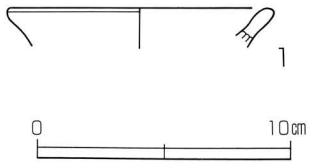
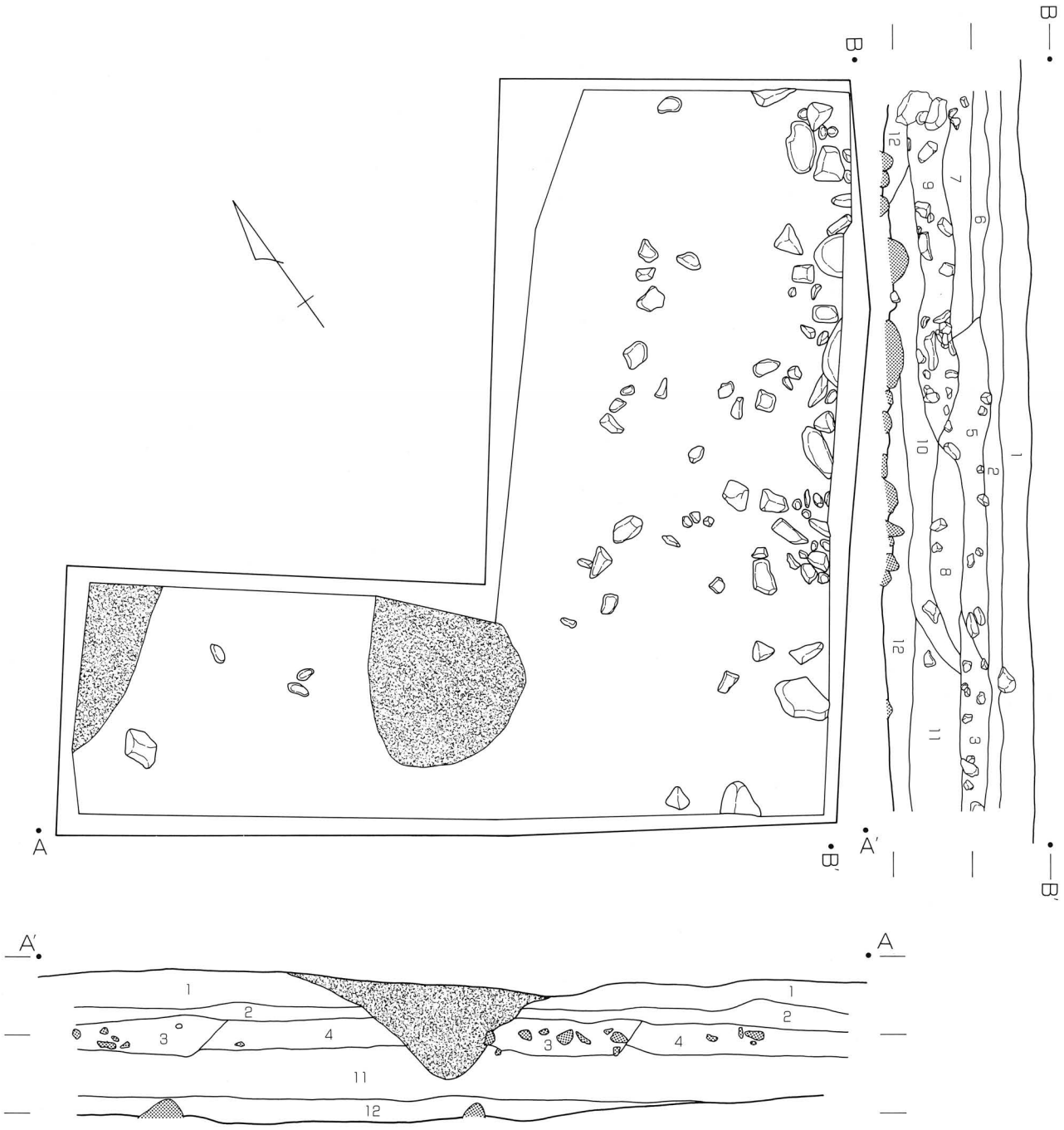


図１　第50次調査出土遺物

写真１　調査状況

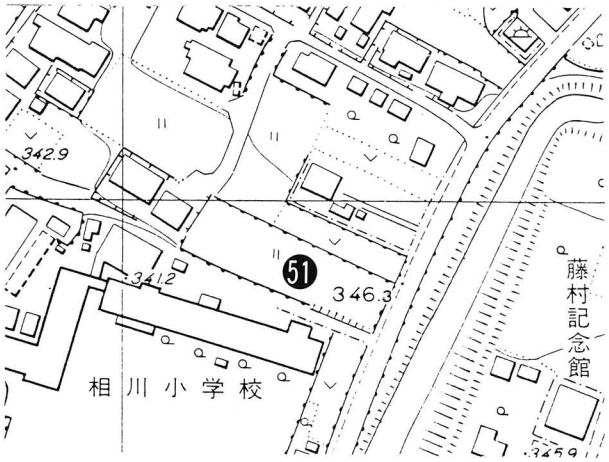


1. 灰 色 土 層
2. 灰褐色土層
3. 暗褐色土層　灰色土・黄褐色土が比較的上層に認められる。拳大の礫が均一に混入し、炭化物・焼土含む。しまりなく、粘性ややあり。
4. 黄褐色土層　白色粒子・灰色・黒褐色粘質土が混入。炭化物・焼土粒子少量含む。
5. 茶褐色土層　上層に灰褐色土が混入。礫少量、砂多量含む。全体的に固くしまる。
6. 暗茶褐色土層　炭化物・焼土粒子・礫微量含む。粘性・しまりあり。
7. 茶褐色土層　炭化物・焼土粒子微量、砂多量含む。粘性・しまりあり。
8. 明褐色土層　炭化物・焼土粒子微量、砂多量含む。幼児頭大の礫混入。
9. 明褐色土層　8層に比べ、礫の混入が多い。粘性強い。
10. 暗茶褐色土層　炭化物・焼土微量、砂少量含む。粘性非常に強い。
11. 暗褐色土層　（遺物包含層）炭化物・焼土粒子微量含む。粘性・しまりあり。
12. 明茶褐色土層　地山

0　2m

図2　平面図、南壁・西壁セクション

武田氏館跡第51次調査



所　在　地　甲府市古府中町1507、
　　1514-1、1515-1
調査原因　武田神社駐車場造成工事
調査面積　1.475㎡
調査期間　平成９年11月６日～12月９日
調査担当者　志村憲一

調査の概要

調査区は武田氏館跡西曲輪の西側に位置し、標高約346ｍを測る。東側には戦国期に設定された「もがり（虎落）小路」が南走する。本地点には「古八幡」の字が残されており、その由来については『甲斐国志』の中に「承久石和五郎信光石和ノ郷ニ勧請ス国衙八幡宮ト称シ武田家代々ノ鎮守氏神ナリ」との記述が見られる。また、「永正十六卯己年左京大夫信虎府ヲ躑躅カ崎ニ遷ス時社地ヲ館西ニ転シ新タニ社壇ヲ造営シテ此ニ移シ」とあり、現在、甲府市立相川小学校体育館南側の峰本自治会館内に古八幡神社の小祠が残されている。

本地点は調査前まで畑として使用されており、北側上段の1514番地、一段下がった1515番地、最西端に位置する1507番地の３箇所に７本のトレンチを設定して調査を行った（図４）。

遺　　構

トレンチ１　土坑１基、石列２本が検出された。

土　　坑　１号土坑はトレンチ外に延長し、直径約92㎝、深さ約42㎝を測る。内部には石が充塡されていた。

石　　列　１号石列はＮ－44°－Ｅに、２号石列はＮ－37°－Ｅに軸をもつ。セクションから、２号石列が埋まった後に１号石列が機能したことが窺えるが、トレンチ外に延長し、詳細については不明である。青磁片が１点出土している。この他、東端で直径約60㎝程度の平坦面を有する自然石が確認された。

トレンチ２　北隅に直径約20～45㎝程度の自然石が集中して検出された。また、セクション観察により、ピットが確認された。

トレンチ３　深さ約1.5ｍまで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

トレンチ４　２号溝下の石列によって上段と下段に分かれ、溝３条、土坑１基、石組遺構1基、ピット22基が検出された。また、石組遺構から南側にかけて、炭化物・焼土が集中して確認された。

溝　　１号溝はＮ－33°－Ｗに軸をもち、最大幅約37㎝、深さ約18㎝を測る。２号溝はＮ－35°－Ｗに軸をもち、最大幅約46㎝、深さ約７㎝を測る。３号溝はＮ－40°－Ｗに軸をもち、最大幅約25㎝、深さ約11㎝を測る。石組遺構に接して

検出され、西側は調査区外に延長する。

土　　坑　　１号土坑は幅約１ｍ10cm、深さ約36cmを測り、平面形態は不整楕円形を呈する。東側は、調査区外に延長する。

石組遺構　　直径35cm程度の自然石を配し、３号溝に接して検出された。東側は調査区外に延長するため、詳細は不明である。

ピ　ッ　ト　　合計22基検出された。直径15～77cm程度、深さ８～60cm程度を測る。ここでは、規則性をもつ列構成は見られない。

トレンチ５　溝４条、暗渠１条、ピット12基が検出された。

溝　　１号溝はＮ－55°－Ｅに軸をもち、最大幅約58cm、深さ約13cmを測る。２号溝はＮ－27°－Ｅに軸をもち、最大幅40cm、深さ約８cmを測る。３号溝はＮ－43°－Ｅに軸をもち、最大幅約44cm、深さ約13cmを測る。ここからは、中世の土器片が数点出土している。セクションから、これらの変遷は２号溝→１号溝→３号溝の順で機能していたことが分かる。４号溝はＮ－55°－Ｅに軸をもち、最大幅約80cm、深さ約18cmを測る。ピットと重複し、この廃絶後に溝が機能したことが分かる。また、これと接して深さ５cm程度の溝状の落込みが検出されたが、性格は不明である。

暗　　渠　　１号暗渠はＮ－62°－Ｅに軸をもち、最大幅約55cm、深さ約19cmを測る。セクションにより、暗渠の上を石で塞ぎ、幅約40cmの間を流水していたことが分かる。時期は、近世～近代のものと考えられる。

ピ　ッ　ト　　合計12基が検出された。直径17～48cm程度、深さ６～29cm程度を測る。ここでは、規則性をもつ列構成は見られない。

トレンチ６　ピット11基が検出された。直径７～47cm程度、深さ８～30cm程度を測る。規則性をもつ列構成は見られない。

トレンチ７　トレンチ北側で井戸１基が検出された。

井　　戸　　１号井戸はトレンチ外に延長し、確認された部分で径１ｍ05cmを測る。底に至るまで掘ることが困難であったため、深さは不明である。また、トレンチ最南端で、自然石が集中している状況が確認された。西側に向かい低くなるが、トレンチ外に延長し、性格は不明である。

遺　　物

大別すると、かわらけ（１・２・４～14・16・17・26～32・34・41～47・49～51・54～56)、土器（18・19・33・35・36・40・48)、国産陶器（15・20～24・37・38・52・53)、中国製磁器（３・25・39)、鉄製品（57～62)、古銭（63～68）である。

かわらけは、ロクロ成形と手づくね（14・16）が出土した。いずれも口径10cm、底径５cm前後を測るものである。土器は18が三脚香炉である。底部に回転糸切り痕を残し、脚部は貼り付けである。19・33は擂鉢片と思われる。35・36は甕の底部と思われるが、時期は

不明である。40・48の器種は不明であるが、40は内面に印花文が施されている。国産陶器は15が大窯第２段階に比定される灰釉皿である。20は瀬戸美濃系の皿で、見込み部にトチン痕を残す。21・22は天目茶碗、23は茶入である。24は緑釉皿である。37は器種不明であるが、内面に溶融物が付着している。38は丸皿で輪ドチ痕を残す。52は丸皿の底部片と思われる。53は丸皿で、大窯第１段階に比定されよう。中国磁器は３・39が青磁、25が白磁片である。39は龍泉窯の碗であるが、他は器種不明である。鉄製品については用途不明である。古銭は63が元豊通宝、64は宣徳通宝、65は天禧通宝、66は祥符通宝、67は永楽通宝、68は宣和通宝である。

ま　と　め

本地点は、北側に土屋右衛門尉昌次の屋敷伝承地である「土屋敷」の小字が現在でも残されており、武田氏家臣屋敷の存在が予想される地域にある。また、南接する相川小学校の敷地は、武田氏館跡の造営に伴い八幡神社が建設された場所にあり、調査地点がその一角を占めていた可能性もある。

トレンチ調査という限定された範囲の中にも、溝・暗渠・土坑・井戸・石列・石組み遺構・ピットの存在を確認することができた。溝は屋敷を区画するものであったと考えられ、セクション観察により変遷を追うことができる。ピットは全体で34基検出されたが、建物の存在を示唆できるような、規則性を持つ列構成を確認するには至らなかった。遺物は中世に位置付けられるもので、青磁・白磁などの輸入磁器の出土からも、武田氏時代（16世紀）の屋敷が存在した可能性が高い。

（鈴木由香）

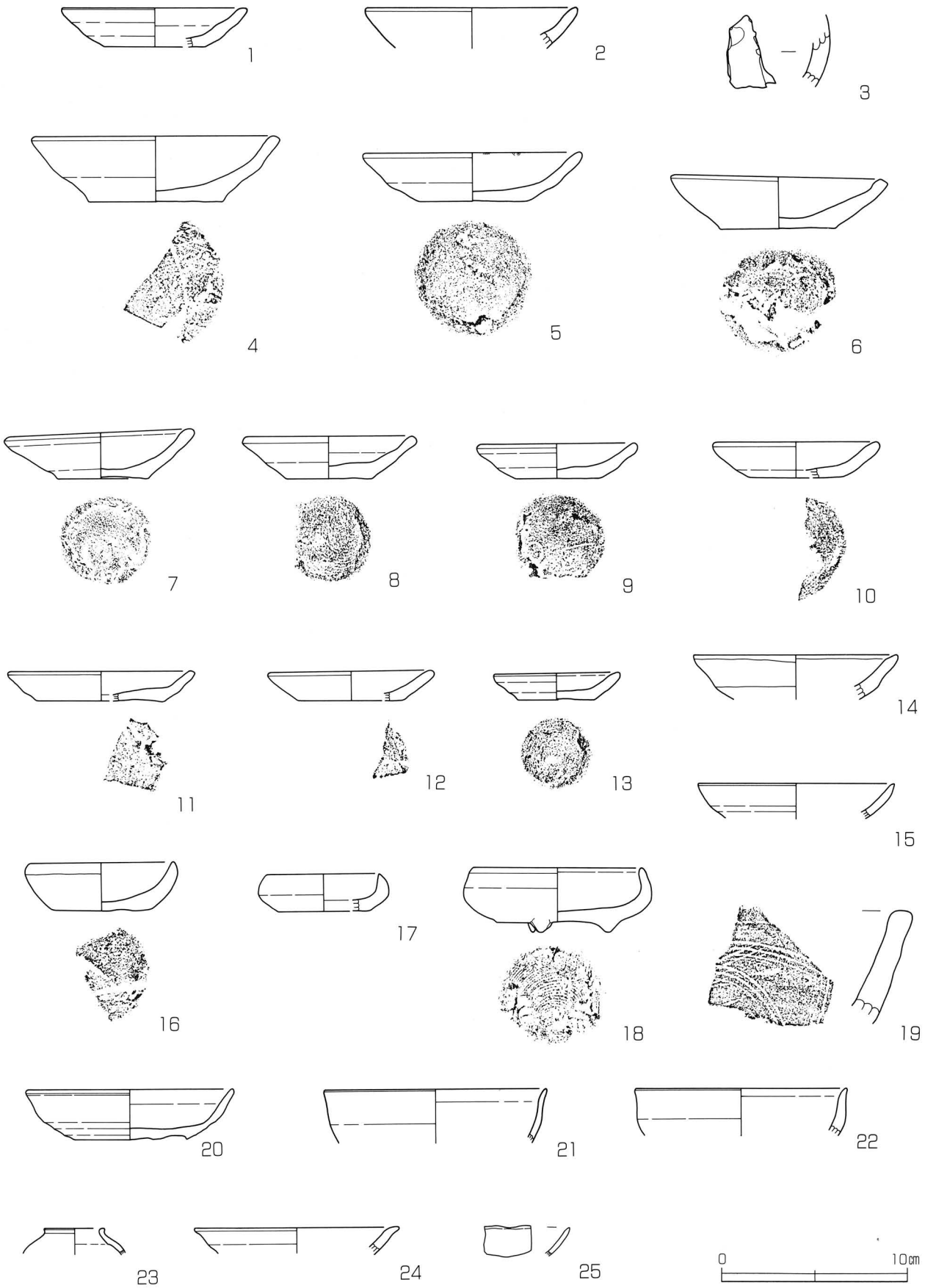


図1　第51次調査出土遺物（1）

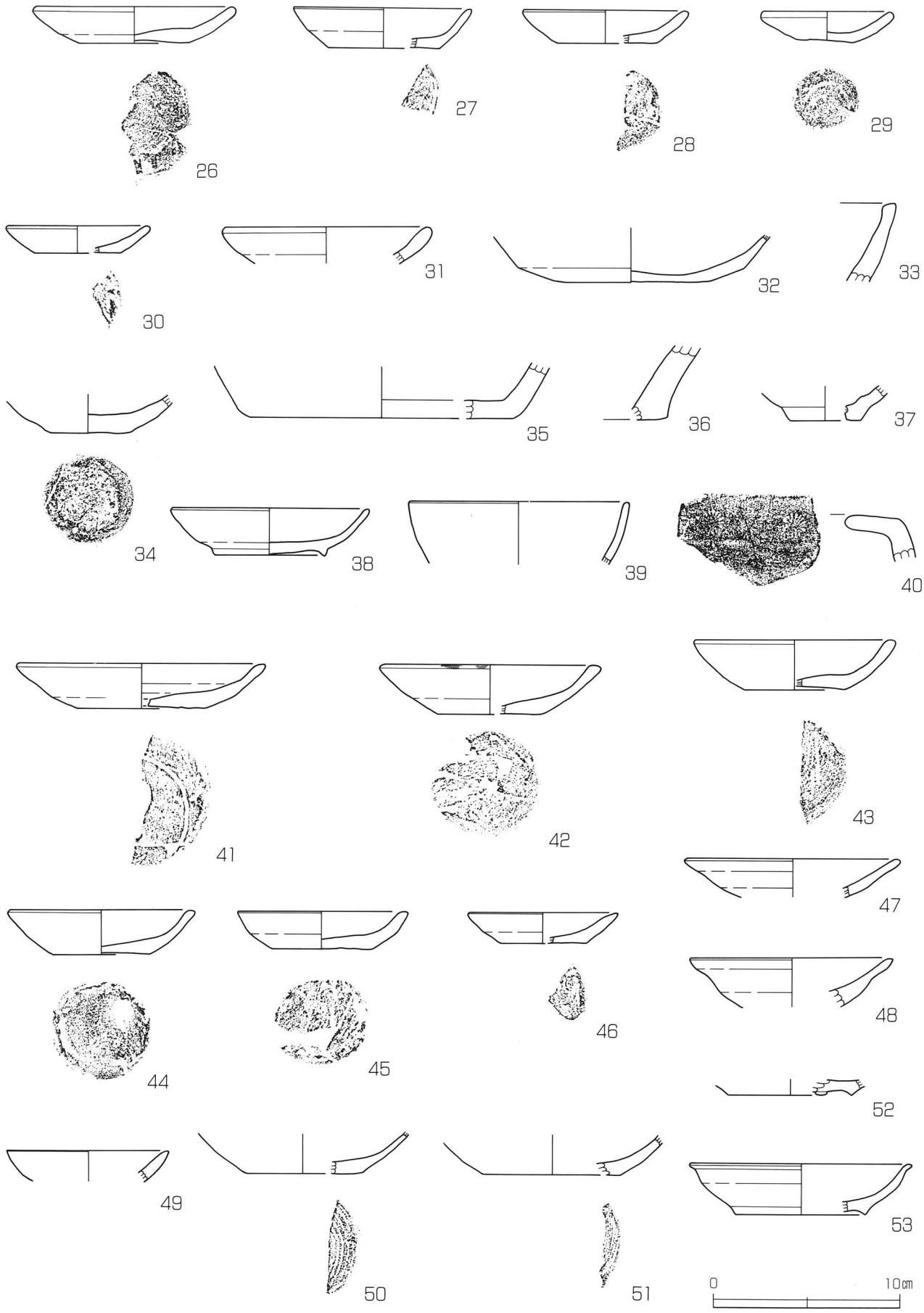


図2　第51次調査出土遺物(2)

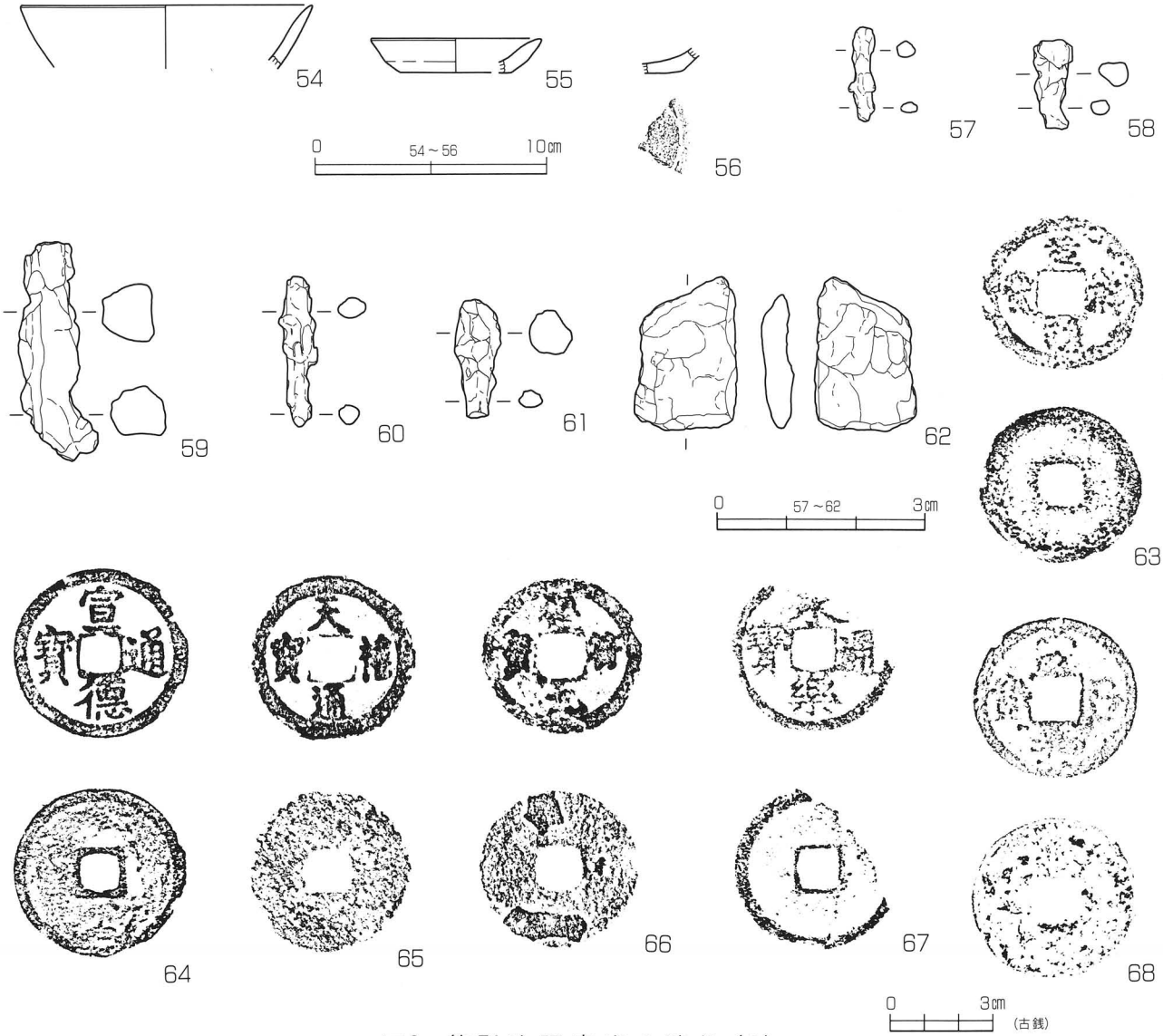


図3　第51次調査出土遺物（3）

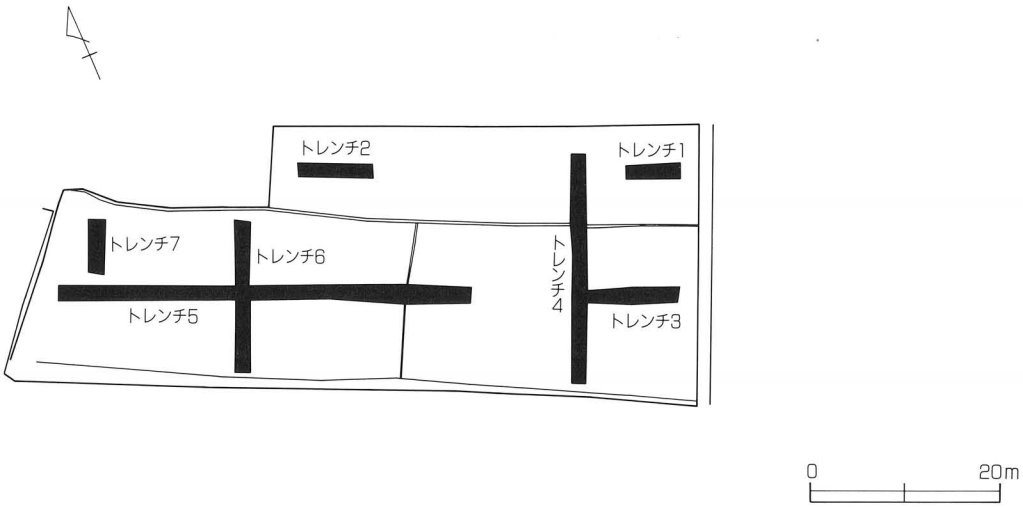


図4　トレンチ位置図

表１　第51次調査出土遺物観察表

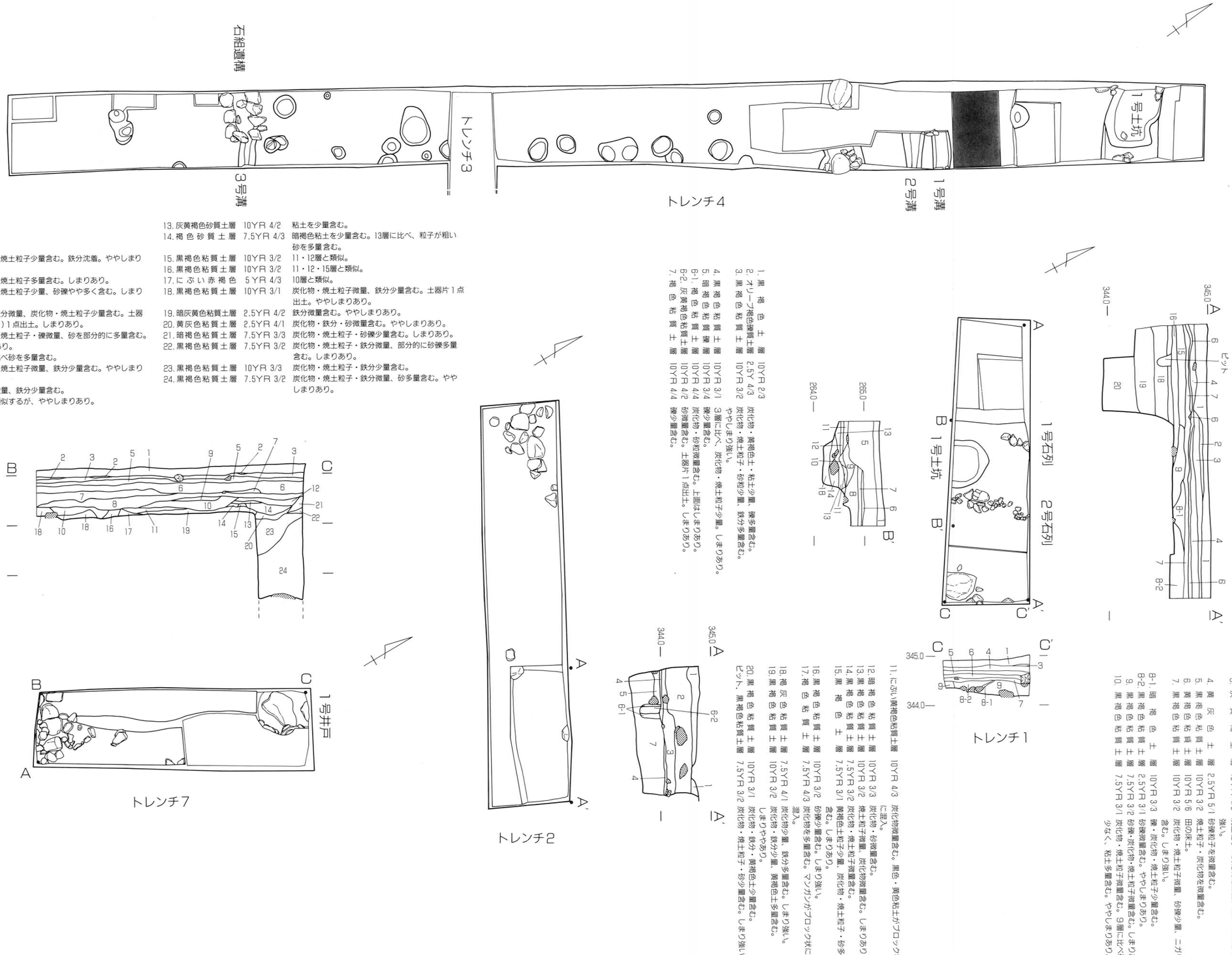
（　）復元値、〈　〉残存値

番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	T－1	土器	かわらけ	(10.0)・(2.1)・(5.4)	口縁部～底部	ロクロ成形	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
2	T－1	土器	かわらけ	(11.2)・〈2.3〉・－	口縁部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	にぶい褐 7.5YR 5/4	
3	T－1	青磁	不明	－・〈3.9〉・－	体部		緻密	良		
4	T－4	土器	かわらけ	(12.9)・(3.55)・(7.2)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母・金雲母	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
5	T－4	土器	かわらけ	(11.6)・(2.4)・5.8	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
6	T－4	土器	かわらけ	11.2・2.8・6.1	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 6/6	
7	T－4	土器	かわらけ	9.8・2.5・4.8	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
8	T－4	土器	かわらけ	(9.0)・(2.3)・4.6	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
9	T－4	土器	かわらけ	(8.2)・(1.85)・4.4	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
10	T－4	土器	かわらけ	(8.6)・(1.9)・(5.0)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
11	T－4	土器	かわらけ	(9.9)・(1.6)・(6.8)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR 6/8	
12	T－4	土器	かわらけ	(8.7)・(1.6)・(5.6)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
13	T－4	土器	かわらけ	6.7・1.45・4.1	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
14	T－4	土器	かわらけ	(11.0)・〈2.4〉・－	口縁部～体部	手づくね	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR 7/6	
15	T－4	陶器	皿	(10.5)・〈1.9〉・－	口縁部～体部	灰釉	密	良		大窯第２段階
16	T－4	土器	かわらけ	(7.8)・(2.6)・(5.0)	口縁部～底部	手づくね	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 6/6	
17	T－4	土器	かわらけ	(6.0)・(2.0)・(5.0)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
18	T－4	土器	三脚香炉	(9.0)・(3.45)・5.6	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕 脚貼り付け	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR 7/6	
19	T－4	土器	擂鉢	－・〈6.1〉・－	口縁部	ナデ成形 内面櫛目	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
20	T－4	陶器	皿	(11.0)・(2.7)・(6.0)	口縁部～底部		密	良		トチン痕２箇所あり
21	T－4	陶器	天目茶碗	(12.0)・〈2.9〉・－	口縁部～体部	鉄釉	密	良		大窯か？
22	T－4	陶器	天目茶碗	(11.4)・〈2.5〉・－	口縁部	鉄釉	密	良		大窯か？
23	T－4 集石	陶器	茶入	(3.2)・〈1.4〉・－	口縁部	鉄釉	密	良		瀬戸美濃系
24	T－4 Pit	陶器	皿	(11.0)・〈1.5〉・－	口縁部	緑釉	密	良		
25	T－4	白磁	不明	－・〈1.6〉・－	口縁部		緻密	良		中国製
26	T－5	土器	かわらけ	(10.6)・(2.0)・(6.0)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・石英・金雲母	良	内／にぶい黄褐 10YR 5/3 外／褐灰 10YR 4/1	
27	T－5	土器	かわらけ	8.4・2.2・3.0	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	石英・雲母・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
28	T－5	土器	かわらけ	9.0・1.8・(5.2)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・石英・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
29	T－5	土器	かわらけ	7.2・1.85・3.1	完形	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
30	T－5	土器	かわらけ	(7.8)・1.5・(4.6)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
31	T－5	土器	かわらけ	(10.6)・〈2.1〉・－	口縁部～体部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
32	T－5	土器	かわらけ	－・〈2.6〉・(8.4)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕	密	良	内／褐灰 10YR 5/1 外／灰白 7.5YR 8/2	
33	T－5	土器	擂鉢？	－・〈4.3〉・－	口縁部	ロクロ成形	長石・金雲母・赤色粒子	良	明赤褐 5YR 5/6	
34	T－5	土器	かわらけ	－・〈2.1〉・4.8	底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	内／橙 7.5YR 7/6 外／にぶい褐 7.5YR 5/3	
35	T－5	土器	甕	－・〈3.1〉・14.1	体部～底部	不明	長石・雲母・金雲母	良	内／にぶい橙 7.5YR 6/4 外／にぶい橙 7.5YR 7/4	

表２　第51次調査出土遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

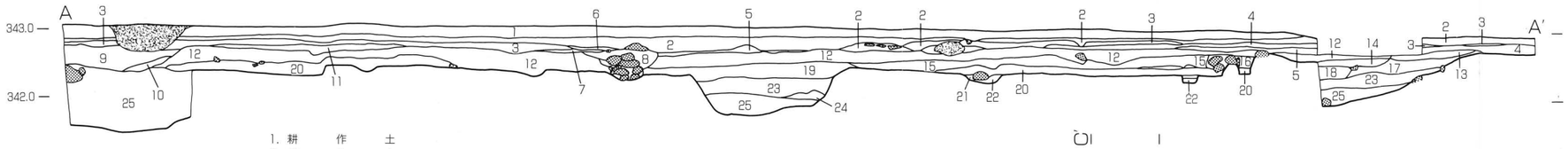
番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
36	T－5	土器	甕？	－・〈4.1〉・－	底部	ナデ成形	長石・雲母・金雲母	良	内/にぶい褐 7.5YR 6/3 外／橙 5YR 6/6	
37	T－5	陶器	不明	－・〈1.9〉・(3.8)	口縁部	ロクロ成形	密	良		内面に溶融物付着
38	T－5	陶器	丸皿	10.8・2.55・6.0	口縁部～底部		緻密	良		輪ドチ痕、見込み印花文 大窯第２段階
39	T－5	青磁	碗	(12.0)・〈3.4〉・－	口縁部～体部		緻密	良		龍泉窯
40	T－5	土器	不明	－・〈2.4〉・－	口縁部			良	内/にぶい褐 7.5YR 5/3 外/にぶい橙 7.5YR 5/3	
41	T－6	土器	かわらけ	13.6・2.4・6.8	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	浅黄橙 7.5YR 8/4	底部穿孔
42	T－6	土器	かわらけ	12.0・2.7・5.4	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	口縁部に炭化物付着
43	T－6	土器	かわらけ	10.9・2.7・5.4	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
44	T－6	土器	かわらけ	10.2・2.45・5.2	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	橙 2.5YR 6/6	
45	T－6	土器	かわらけ	9.2・2.05・5.2	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	橙 5YR 7/6	
46	T－6	土器	かわらけ	(8.2)・1.7・(4.6)	口縁部～底部	ロクロ成形 回転糸切痕	金雲母	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
47	T－6	土器	かわらけ	(11.6)・〈2.1〉・－	口縁部～体部	ロクロ成形	赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
48	T－6	土器	不明	(10.6)・〈2.7〉・－	口縁部～体部	ロクロ成形	長石・金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
49	T－6	土器	かわらけ	(8.8)・〈1.7〉・－	口縁部	ロクロ成形	金雲母・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
50	T－6 Pit	土器	かわらけ？	－・〈2.2〉・(6.5)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕	金雲母・赤色粒子	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	
51	T－6	土器	かわらけ？	－・〈2.2〉・(7.5)	底部	ロクロ成形 回転糸切痕	長石・金雲母・赤色粒子	良	内/暗緑灰 5G 3/1 外/黒褐 7.5YR 3/1	
52	T－6	陶器	丸皿？	－・〈0.9〉・(6.6)	底部		密	良		大窯第２段階？
53	一括	陶器	丸皿	(12.0)・2.85・(7.0)	口縁部～底部		密	良		大窯第１段階？
54	T－7	土器	かわらけ	(12.5)・〈2.8〉・－	口縁部～体部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	内/黒褐 10YR3/1 外/にぶい黄橙 10YR6/3	
55	T－7	土器	かわらけ	(7.3)・(1.5)・(4.9)	口縁部～底部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
56	T－7	土器	かわらけ	－・〈1.2〉・(5.6)	底部	ロクロ成形	長石・石英・雲母・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
57	T－1 土坑	鉄製品	釘	長さ〈4.05〉・幅〈1.1〉						
58	T－4	鉄製品	釘	長さ〈2.65〉・幅〈1.0〉						
59	T－4	鉄製品	釘	長さ〈6.4〉・幅〈1.7〉						
60	T－4	鉄製品	釘	長さ〈4.35〉・幅〈1.05〉						
61	T－4	鉄製品	釘	長さ〈3.45〉・幅〈1.3〉						
63	T－4	古銭	元豊通宝	直径・穿径・重量 23.7・6.1mm・3.1g						
64	T－4	古銭	宣徳通宝	直径・穿径・重量 25.4・5.5mm・2.7g						
65	一括	古銭	天禧通宝	直径・穿径・重量 24.2・7mm・2.1g						
66	T－4	古銭	祥符元宝	直径・穿径・重量 23.2・6.5mm・1.7g						
67	T－6	古銭	永楽通宝	直径・穿径・重量 24.8・6.1mm・1.6g						
68	T－5	古銭	宣和通宝	直径・穿径・重量 23.8・6.5mm・2.6g						



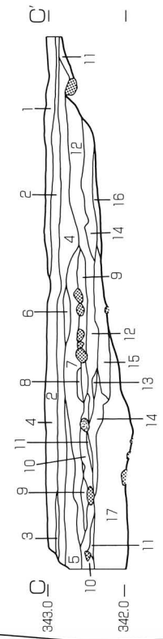
1. 耕　作　土
2. 明 褐 色 土 層　7.5YR 5/6
3. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/3
4. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/1　炭化物・焼土粒子少量含む。鉄分沈着。ややしまりあり。
5. 褐 色 粘 質 土 層　7.5YR 4/3　炭化物・焼土粒子多量含む。しまりあり。
6. 暗褐色粘質土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子少量、砂礫やや多く含む。しまりあり。
7. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　砂礫・鉄分微量、炭化物・焼土粒子少量含む。土器片(P-1)1点出土。しまりあり。
8. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/1　炭化物・焼土粒子・礫微量、砂を部分的に多量含む。しまりあり。
9. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/1　8層に比べ砂を多量含む。
10. に ぶ い 赤 褐 色　5YR 4/3　炭化物・焼土粒子微量、鉄分少量含む。ややしまりあり。
11. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　炭化物微量、鉄分少量含む。
12. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　11層と類似するが、ややしまりあり。
13. 灰黄褐色砂質土層　10YR 4/2　粘土を少量含む。
14. 褐 色 砂 質 土 層　7.5YR 4/3　暗褐色粘土を少量含む。13層に比べ、粒子が粗い砂を多量含む。
15. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　11・12層と類似。
16. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　11・12・15層と類似。
17. に ぶ い 赤 褐 色　5 YR 4/3　10層と類似。
18. 黒褐色粘質土層　10YR 3/1　炭化物・焼土粒子微量、鉄分少量含む。土器片1点出土。ややしまりあり。
19. 暗灰黄色粘質土層　2.5YR 4/2　鉄分微量含む。ややしまりあり。
20. 黄灰色粘質土層　2.5YR 4/1　炭化物・鉄分・砂微量含む。ややしまりあり。
21. 暗褐色粘質土層　7.5YR 3/3　炭化物・焼土粒子・砂礫少量含む。しまりあり。
22. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　炭化物・焼土粒子・鉄分微量、部分的に砂礫多量含む。しまりあり。
23. 黒褐色粘質土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子・鉄分少量含む。
24. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　炭化物・焼土粒子・鉄分微量、砂多量含む。ややしまりあり。

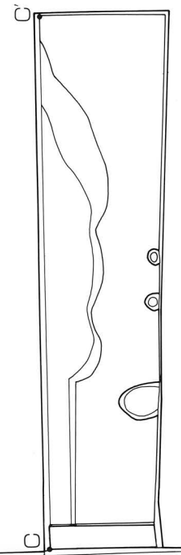
1. 黒 褐 色 土 層　10YR 2/3　炭化物・黄褐色土・粘土少量、礫多量含む。
2. オリーブ褐色礫質土層　2.5Y 4/3　炭化物・焼土粒子・砂粒少量、鉄分多量含む。
3. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 3/2　ややしまり強い。
4. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 3/1　3層に比べ、炭化物・焼土粒子少量。しまりあり。
5. 暗 褐 色 粘 質 礫 層　10YR 3/4　礫少量含む。
6-1. 褐 色 粘 質 土 層　10YR 4/4　炭化物・砂粒微量含む。上面はしまりあり。
6-2. 灰黄褐色粘質土層　10YR 4/2　砂微量含む。土器片1点出土。しまりあり。
7. 褐 色 粘 質 土 層　10YR 4/4　礫少量含む。
8-1. 灰オリーブ砂質土層　5 YR 5/2　砂礫粒子少量含む。
8-2. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/4　焼土粒子・炭化物を微量、礫少量含む。しまり強い。
9. 灰 黄 褐 色 土 層　10YR 4/2　焼土粒子・炭化物を微量含む。
10. 黒 褐 色 粘 質 土 層　2.5YR 5/1　砂礫粒子を微量含む。
11. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 3/2　焼土粒子・炭化物を微量含む。
12. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 5/6　田の床土。
13. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子微量、砂礫少量、ニガリ多量含む。しまり強い。
14. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/3　礫・炭化物・焼土粒子少量含む。
15. 黒 褐 色 粘 質 土 層　2.5YR 3/1　砂礫微量含む。ややしまりあり。
16. 黒 褐 色 粘 質 土 層　7.5YR 3/2　砂礫・炭化物・焼土粒子微量含む。しまりあり。
17. 黒 褐 色 粘 質 土 層　7.5YR 3/1　炭化物・焼土粒子微量含む。9層に比べ砂礫少なく、粘土多量含む。ややしまりあり。
18. 褐 色 粘 質 土 層　7.5YR 4/3　炭化物微量含む。黒色・黄色粘土がブロック状に混入。
19. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 3/2　炭化物・砂微量含む。
20. 黒 褐 色 粘 質 土 層　10YR 3/1　焼土粒子・炭化物微量含む。しまりあり。
ピット. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　炭化物・焼土粒子・砂少量含む。しまり強い。

図5　トレンチ1・2・4・7平面図・セクション

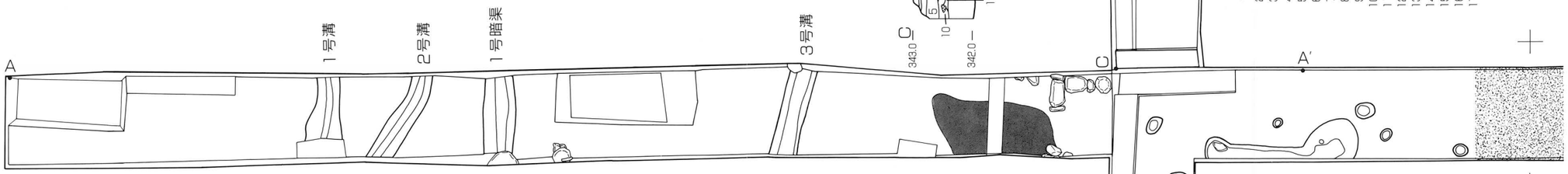


1. 耕　　作　　土
2. 耕　　作　　土
3. 灰 黄 褐 色 土 層　10YR 4/2　炭化物・焼土粒子・マンガン少量含む。
4. 褐 灰 色 土 層　7.5YR 4/1　炭化物・焼土粒子・マンガン少量含む。
5. 黒 褐 色 土 層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子多量含む。
6. 灰 黄 褐 色 土 層　10YR 4/2　炭化物・焼土粒子微量、砂礫少量含む。
7. 黒 褐 色 土 層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子微量、砂礫少量含む。
8. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子微量、マンガン・砂礫少量含む。
9. にぶい黄褐色粘質土層　10YR 4/3　炭化物・焼土粒子微量、砂礫多量含む。しまりあり。
10. 黒褐色粘質土層　2.5Y 3/1　砂微量含む。しまりあり。
11. 暗褐色粘質土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子・マンガン・砂礫少量含む。
12. 暗褐色粘質土層　10YR 3/3　11層に比べ、炭化物・焼土粒子多量含む。しまりあり。
13. 暗褐色粘質土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子・砂礫少量含む。しまりあり。
14. 黒褐色粘質土層　10YR 3/1　鉄分・砂礫少量含む。ややしまりあり。
15. 暗褐色粘質土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子微量含む。しまりあり。
16. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子・砂礫微量含む。しまりあり。
17. 暗褐色粘質土層　10YR 3/4　砂礫少量含む。しまりあり。
18. 黒褐色粘質土層　10YR 3/1　鉄分・砂少量含む。
19. 褐灰色粘質土層　10YR 4/1　砂礫微量・鉄分多量含む。しまりあり。
20. 黒褐色粘質土層　10YR 3/1　炭化物・焼土粒子・砂礫少量含む。しまりあり。
21. 灰黄褐色粘質土層　10YR 4/ 2　炭化物微量・鉄分少量含む。しまりあり。
22. 褐灰色粘質土層　10YR 4/1　砂礫微量、鉄分多量含む。しまりあり。
23. にぶい黄褐色粘質土層　10YR 4/3　鉄分少量、黄褐色土・砂多量含む。
24. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/1　鉄分・砂少量含む。ややしまりあり。
25. 褐色土層の地山



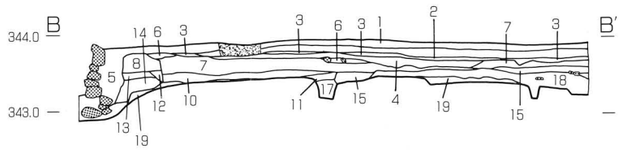


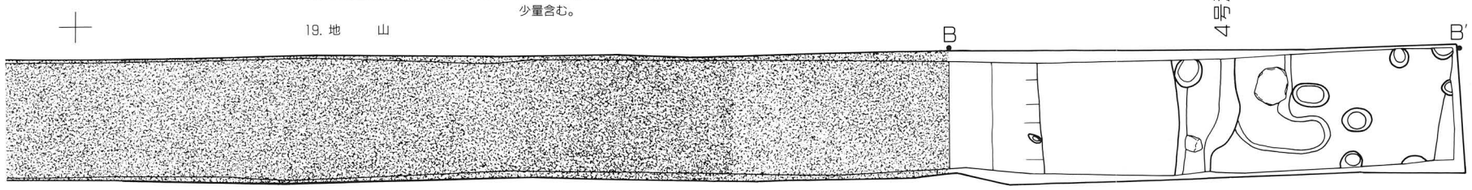
1.
2. 耕　作　土
3.
4.
5. 黒 褐 色 土 層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子・砂礫微量含む。しまりあり。
6. 灰褐色粘質土層　7.5YR 4/2　炭化物・焼土粒子・ニガリ・砂少量含む。しまり強い。
7. 灰褐色粘質土層　7.5YR 4/2　炭化物・焼土粒子・砂少量含む。しまり強い。
8. 灰褐色粘質土層　7.5YR 4/2
9. 黒 褐 色 土 層　10YR 3/1　炭化物・焼土粒子多量含む。ややしまりあり。
10. 暗褐色粘質土層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子・砂微量含む。しまり強い。
11. 黒 褐 色 土 層　2.5YR 3/1　炭化物・焼土粒子多量含む。ややしまりあり。
12. 灰黄褐色粘質土層　10YR 4/2　炭化物・焼土粒子・砂礫微量、鉄分少量含む。しまり強い。
13. 灰黄褐色粘質土層　10YR 4/2
14. 褐 色 粘 質 土 層　10YR 4/1　炭化物・焼土粒子・砂礫微量含む。しまり強い。
15. 褐 色 粘 質 土 層　10YR 4/1
16. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　炭化物微量、黄褐色土粒子少量含む。しまりあり。
17. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　炭化物微量、黄褐色土粒子・砂少量含む。ややしまりあり。



トレンチ5

1. 耕　　作　　土
2. 耕　　作　　土
3. 灰 黄 褐 色 土 層
4. 耕　　作　　土
5. 石 積 盛 土 層
6. にぶい黄褐色土層　10YR 4/3　炭化物・焼土粒子・砂礫少量含む。しまりあり。
7. 黒 褐 色 土 層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子多量含む。ややしまりあり。
8. 灰 黄 褐 色 土 層　10YR 4/2　炭化物・焼土粒子・砂礫少量含む。しまりあり。
9. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/3　炭化物・焼土粒子微量、砂礫少量、マンガン多量含む。ややしまりあり。
10. 黒 褐 色 土 層　7.5YR 3/2　炭化物・焼土粒子・砂礫微量含む。ややしまりあり。
11. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/4　炭化物・焼土粒子・砂礫少量含む。ややしまりあり。
12. 暗褐色粘質土層　7.5YR 3/4　炭化物・焼土粒子微量、砂礫少量含む。
13. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　炭化物・焼土粒子微量、砂礫多量含む。しまり強い。
14. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　13 層に比べ、砂礫多量含む。
15. 黒褐色粘質土層　7.5YR 3/2　炭化物・焼土粒子・ニガリ少量含む。ややしまりあり。
16. 暗 褐 色 土 層　10YR 3/3　砂礫多量含む。
17. 暗褐色粘質土層　10YR 3/4　砂礫少量、炭化物・焼土粒子多量含む。ややしまりあり。
18. 黒褐色粘質土層　10YR 3/2　炭化物・焼土粒子・砂礫微量、鉄分・黄褐色土粒子少量含む。
19. 地　　山





トレンチ5

図6　トレンチ5・6平面図・セクション

＝焼土集中

トレンチ6

0　4m

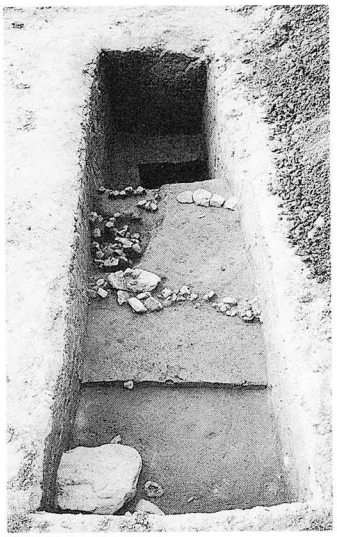


写真１　トレンチ１　石列

写真２　トレンチ４

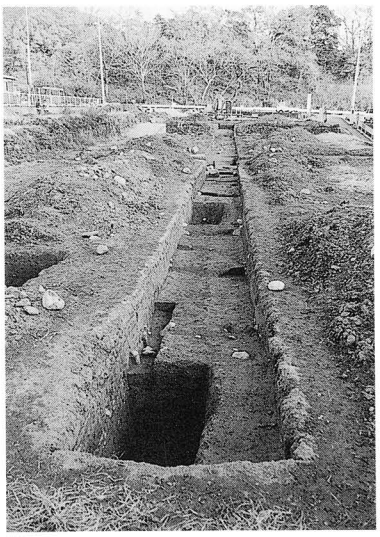


写真３　トレンチ５

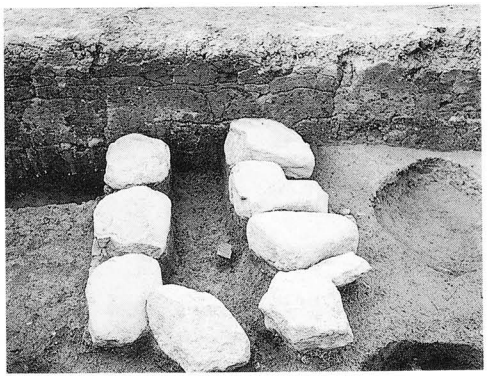


写真４　トレンチ４　石組遺構

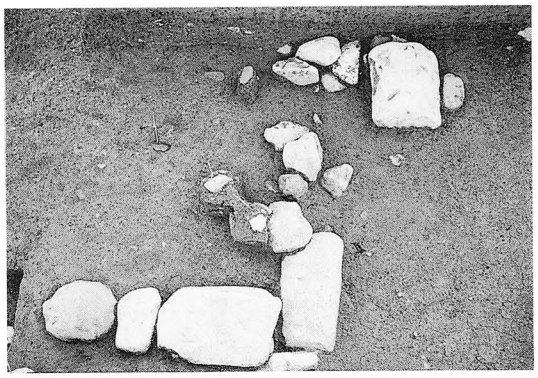


写真５　トレンチ５　石列

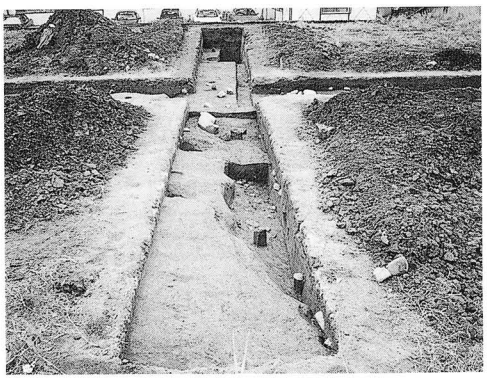


写真６　トレンチ６

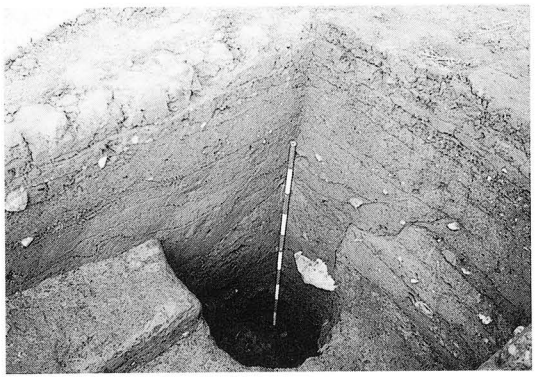


写真７　トレンチ７　１号井戸

第2章　小　　括

最後に、第32次調査（平成元年度）から第52次調査（平成９年度）までの成果について、まとめておきたい。

１．絵図と文献に見る武田氏館跡周辺の歴史的環境

永正16（1519）年、川田に構えられていた甲斐武田氏の居館が、武田信虎によって躑躅が崎へ移された。同時に、その政治的・軍事的中心の確立を図るため、館を囲むように家臣団屋敷を配した甲斐府中の建設が進められた。その規模について『甲斐国志』は、「古府中村ノ境内東ハ岩窪ヨリ西ハ塚原マデ五百三十間南ハ元柳町ヨリ北ハ下積翠寺村マデ九百二間」と述べている。

現在、武田氏館跡周辺には「土屋敷」（土屋右衛門尉昌次）、「逍軒屋敷」（武田逍遙軒信綱）、「天久」（武田典厩信繁）、「長閑」（長坂長閑斎）、「小山田」（小山田備中守）の家臣屋敷を示唆する小字が残されており、安政４年に複写された貞享３年「古府中村絵図」（中沢泉氏所蔵）にも同じ地名を確認することができる。これらの地名から推定すると、今回の報告のうち第32・45・46次調査地点以外は家臣屋敷地の可能性が高いものと考えられる。

『甲陽軍艦』によると土屋右衛門尉昌次の屋敷は、信州で死去した武田信玄を仮埋葬した場所である。また、『甲斐国志』古跡部「火葬場」の項も「元亀四年四月信玄参州陣中ニ逝ス其事秘スルニ依テ当時知ル者ナシ密ニ土屋右衛門尉邸中ニ送テ火葬シ三年其家ニ殯ス」と記述する。しかし、同書は、岩窪に所在する信玄火葬場（火葬塚）の地について、原甚四郎改易の後、元亀元年に土屋氏に与えられた屋敷地と考察しており、第33次調査地点（字「土屋敷」）に信玄が仮埋葬された訳ではなさそうである。新たな屋敷地を与えられた後、土屋氏が移転したのか、両方の屋敷地を所有したのかを明らかにする資料は確認されていない。

２．調査の成果に見る武田氏家臣屋敷

（１）遺構から

各調査で検出された遺構は、溝・土坑・ピット・井戸・堀・石列などである。特に、第33次調査では一定の規則性が見られるピット列と屋敷地を区画する堀跡が確認され、屋敷跡の存在を明らかにすることができた。溝やピットが複雑に入り組み、数回に渡る屋敷の建て替えが行われていた状況が窺える。また、自然地形を利用して屋敷が造営されていたことが特徴である。例えば、東側に堀を設けて屋敷境としているのに対し、西側は自然地形の傾斜が強まるラインまでを屋敷地としている。Ｈ区とＪ区の間に段差があるが、これも屋敷境としての機能をもたせたものと考えられる。

第37次調査でも、調査区中央部で北側に広がると推定される建物跡の存在を示すピット列が確認されたが、規模等の詳細は不明である。

第49次調査地点は小字が「逍軒屋敷」で、これを囲むように街路が走り、武田氏時代の地割が残されている。井戸・土坑・溝・ピットが検出され、武田氏の時代に相当する16世紀代の遺物が出土した。

第51次調査では、建物跡は確認されなかったものの、溝・土坑・ピットは出土遺物から16世紀に位置づけられるものである。溝はセクションの観察により、３時期の変遷を追うことができる。また、礎石とも考えられる平坦面をもった自然石や炭化物・焼土の集中区、石組み遺構なども検出され、屋敷が存在した可能性が高い。

（２）遺物から

武田氏の時代に関係すると思われるものは、かわらけを主体とし、国産陶器では瀬戸美濃・常滑・志野、輸入磁器では青磁・白磁・明染付けが出土している。

かわらけの多くはロクロ成形であるが、第43次調査で１点、第51次調査では２点、手づくねのものが出土している。特に、第43次調査で出土したものは、関西系の技法によるものである。これは、主に京を中心として畿内で流通していたもので、都との交流関係を考える上で貴重である。

出土した瀬戸美濃は大窯第１～３段階に比定されるが、前回と同様に第２段階のものが多い。器種は天目茶碗・皿・擂鉢が出土している。多くは破片であるが、第44次調査では、ピットから大窯第２段階に比定される端反皿が完形で出土した。第34次・38次調査では天目茶碗が、第51次では天目茶碗と茶入れが出土しており、茶を嗜める身分の者の居住を示している。

常滑は第33次・46次調査において出土しているが、第33次調査では地面に埋置されていた甕以外は図化できない小片である。

志野は第35次調査において丸皿が出土したのみである。前回の第21次調査においても志野が出土しているが、これまでの武田氏館跡周辺調査における国産陶器の出土量の中では極めて少ない。

輸入磁器は、第33次調査で青磁・白磁片の他に明染付けが出土している。底部には、所有者の区別を示す線刻が見られる。第43次・51次調査出土の青磁は、龍泉窯産と思われる。

３．ま　と　め

これまでの数次に渡る武田氏館跡周辺調査の出土遺物は、大窯第１～３段階に比定され、中でも第２段階のものが多い。また、輸入磁器に関しては、破片出土がほとんどで漠然とした年代しか得られない状況にある。しかし、近年の武田氏館跡の調査では、遺構に伴って漳州窯系の碗皿などをはじめ、佐々木満氏が指摘する「武田氏滅亡後の徳川氏、加藤氏による改修後の館に伴う資料」(1)を得ている。

武田氏は天正９（1581）年末に新府城へ本拠を移転、翌年には甲斐支配を行った徳川家康の家臣である平岩親吉、豊臣系大名の羽柴秀勝・加藤光泰・浅野長政父子が武田氏館を利用したといわれ、数野雅彦氏は武田氏館跡の調査成果を基に、館変遷過程の推定を試みている(2)。こうした成果や、天正10（1582）年以降に比定される遺物の出土によって、慶長５（1600）年の甲府城築城までの間、徳川氏・加藤氏による館の再利用が考古学的に実証されたといえる。

しかし、武田氏滅亡後の館周辺の様相を検討するには、該期資料の検出量が未だ少なく、今後の調査による成果と資料の増加を待たねばならない。

（鈴木由香）

註

(1) 佐々木満「山梨県内における城館跡出土土器・陶磁器の様相－武田氏の本拠地出土遺物を中心として－」『武田系城郭研究の最前線』山梨県考古学協会　2001年

(2) 数野雅彦「武田氏館跡の調査成果－居館から連郭式城郭への変遷を中心に－」『新府城と武田勝頼』新人物往来社　2001年

参考文献

『甲斐国志』（雄山閣大日本地誌大系本）
なかざわ・しんきち　「甲斐府中概観－飯沼論文批評－」『甲府市史研究』第３号　甲府市市史編さん委員会　1986年
なかざわ・しんきち　「甲斐府中における建築」『甲府市史研究』第５号　甲府市市史編さん委員会　1988年
『史跡武田氏館跡Ⅴ』山梨県甲府土木事務所　甲府市教育委員会　2000年
『史跡武田氏館跡Ⅶ』甲府市教育委員会　2000年

史跡武田氏館跡関係報告書一覧（既刊分）

『史跡武田氏館跡Ⅰ』－昭和55～57年度発掘調査報告書－　1985年
『史跡武田氏館跡Ⅱ』－武田氏館跡関係資料集－　1986年
『史跡武田氏館跡Ⅲ』－平成７年度・８年度試掘調査概要報告書－　1998年
『史跡武田氏館跡Ⅳ』－平成９年度西曲輪試掘調査・土橋等石積測量調査、平成７～９年度笹堀試掘調査、概要報告書－　1999年
『史跡武田氏館跡Ⅴ』－県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書－　2000年
『史跡武田氏館跡Ⅵ』－武田神社社務所増築・参道石垣改修に伴う主郭部調査－　2000年
『史跡武田氏館跡Ⅶ』－第14次～第31次調査報告書－　2000年
『武田城下町遺跡Ⅰ』－大手一丁目（甲府営林署跡地）発掘調査報告書－　2001年

遺物・図面整理スタッフ

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと
書名	史跡武田氏館跡
副書名	第32次～第52次調査報告書
巻次	Ⅷ
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	18
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成14年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	調査年度 調査面積	調査原因
たけだしやかたあと 武田氏館跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 こふちゅうまち　おおて 古府中町・大手三丁目	19201	1110	平成元年度 ～ 平成９年度 2599.4m²	現状変更に伴う発掘調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考
城館跡	中世	井戸・柱穴・石列・土坑墓・地鎮遺構	手づくね土器・かわらけ・染付・白磁・青磁・瀬戸美濃系陶器・分銅	第42・48・52次調査は『武田氏館跡Ⅳ』で報告済

甲府市文化財調査報告18

史跡　武田氏館跡 Ⅷ

― 第32次～第52次調査報告書 ―

平成14年２月28日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18番１号
TEL 055（223）7324
FAX 055（226）4889

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18